

鳥取県米子市

いし い よう がい あと
石 井 要 害 跡 I

2019. 3

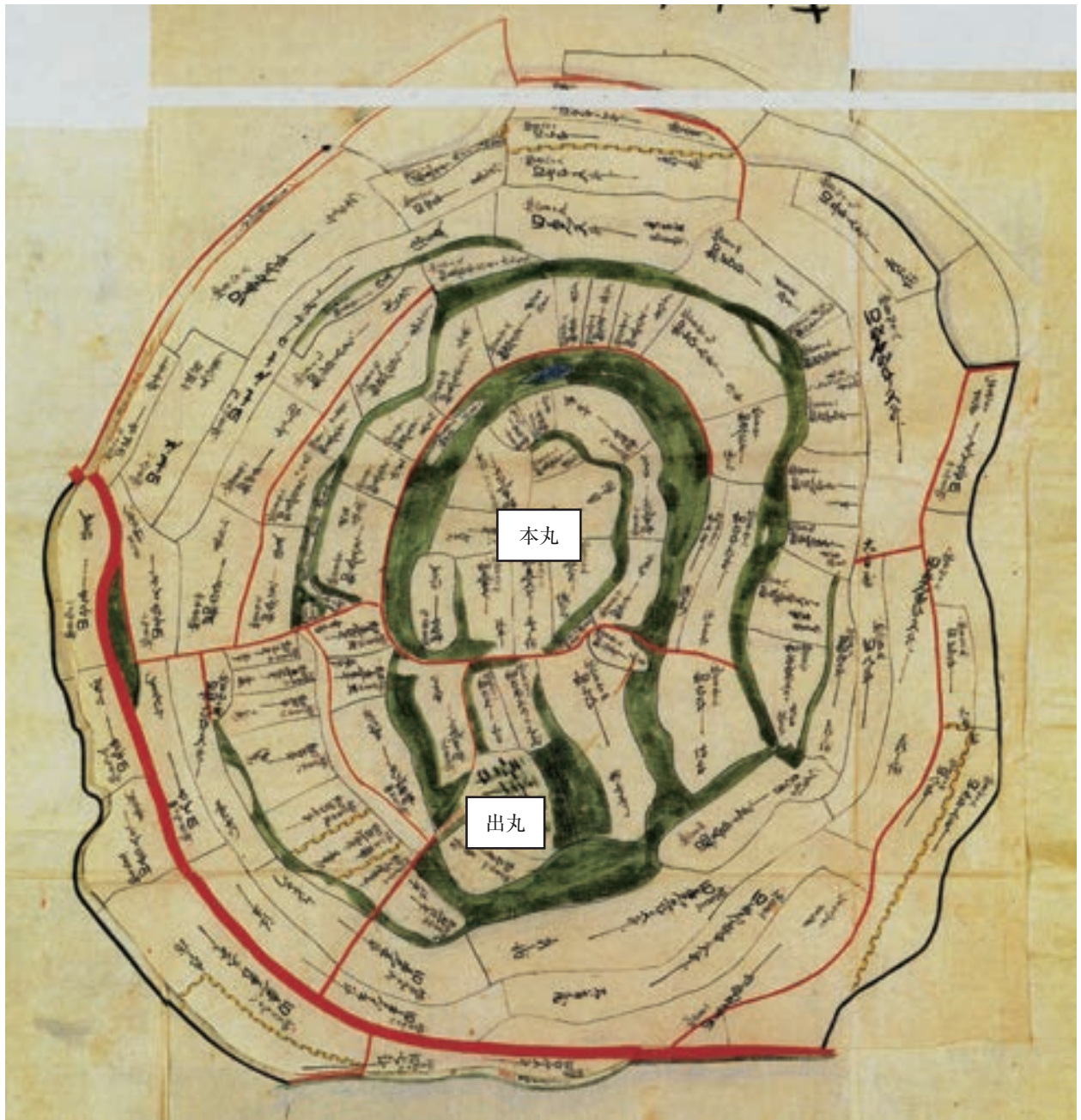
一般財団法人 米子市文化財団

鳥取県米子市

いし い よう がい あと
石 井 要 害 跡 I

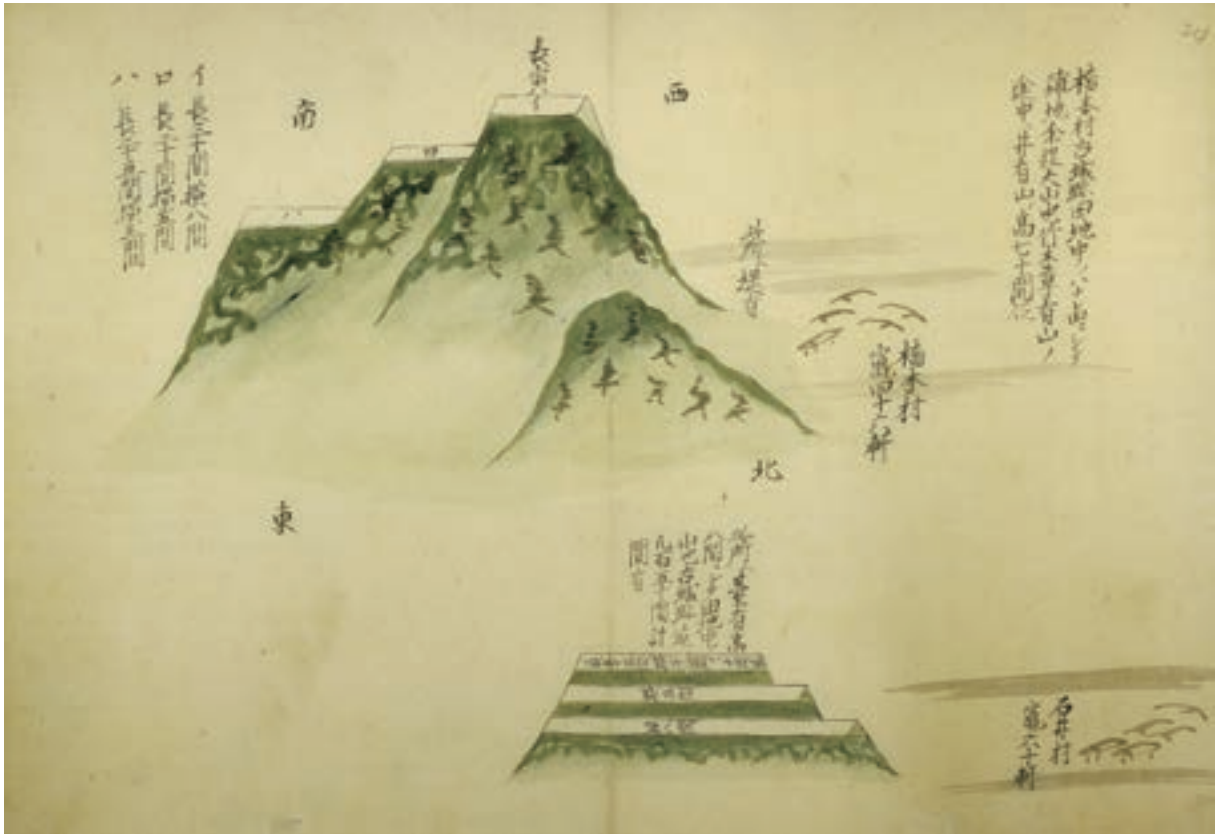
2019. 3

一般財団法人 米子市文化財団



石井村田畑地続字限絵図・字要害（明治2年）

米子市立山陰歴史館所蔵



石井村・橋本村古城跡（『因伯古城跡図志』） 鳥取県立博物館所蔵



石井要害跡全景（西から）

序

当財団では、平成29・30年度に鳥取県の委託を受け、石井地区単県急傾斜地崩壊対策工事に伴い中世城館の石井要害跡の発掘調査を実施しました。

石井要害跡は、昭和44年の住宅団地造成工事により未調査で遺跡の大部分が削られてしまいました。また、文献史料に乏しく、これまでその様相は明らかになっていませんでした。

調査の結果、郭や腰郭、空堀などの遺構を確認しました。これらは石井要害跡のごく一部ではありますが、その構造やこの地域の歴史を解明するうえで貴重な資料となると考えられます。

この度、調査成果をまとめ、発掘調査報告書として『石井要害跡Ⅰ』を刊行することができました。本報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解、関心がより深まることを期待しています。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました鳥取県西部総合事務所米子県土整備局ならびに関係各位に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成31年3月

一般財団法人 米子市文化財団
理事長 杉原弘一郎

例 言

1. 本報告書は、鳥取県が計画する石井地区単県急傾斜地崩壊対策工事に伴い、平成29・30年度に米子市石井地内で実施した石井要害跡第1次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて一般財団法人 米子市文化財団が実施した。
3. 本報告書における方位は公共座標北を示し、X、Yの数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。また、レベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「米子」、米子市作成の1/2500「米子市都市計画図」、及び鳥取県西部総合事務所米子県土整備局作成の1/500「石井地区急傾斜地崩壊防止工事平面図」を加筆して使用した。
5. 図版2の写真は、『米子市石井要害土地区画整理事業 記念誌』1971 米子市石井要害土地区画整理組合から転載し、掲載した。
6. 出土遺物を整理、評価するにあたり、貿易陶磁については、松江城調査研究室 西尾克己氏と鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 守岡正司氏、備前焼については、岡山市教育委員会 乗岡実氏、石製品の石材鑑定については鳥取県教育委員会 高橋章司氏にご教示いただいた。記して感謝いたします。
7. 出土鉄製品のX線写真撮影については、鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。記して感謝いたします。
8. 本発掘調査における基準点測量、調査後空中写真撮影、軟X線写真観察、放射性炭素年代測定は業者に委託した。
9. 本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室で行った。
10. 本報告書で使用した遺構写真は高橋が、遺物写真は佐伯が撮影した。
11. 本報告書の執筆は、第5章 第2節を佐伯、それ以外を高橋が行い、編集は、高橋が行った。
12. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類及び出土遺物は、米子市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 遺構の略称は「ISYG」とした。
2. 本報告書における遺物の縮尺は以下のとおりである。
土器、陶磁器：1/3 石製品：1/3（茶臼以外）・1/4（茶臼）
金属製品：1/2（銭貨以外）・1/1（銭貨） 瓦：1/4
3. 本文中、挿図中、遺物観察表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
4. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで示した。
5. 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
6. ピット計測表において（ ）で表したものは残存部分での計測値である。

目 次

序
例言
凡例
目次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2
第4節 調査体制	3
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の概要	
第1節 調査の方法	11
第2節 遺跡の立地と現状	12
第3節 検出した遺構と遺物	
1. 出丸の頂部平坦面の調査	12
2. 出丸の南西側斜面の調査	25
第4節 遺構外出土遺物	
1. 古代以前の遺物	39
2. 中世の遺物	39
3. 近世以降の遺物	43
第4章 自然科学分析	
第1節 陶器・瓦溜り出土炭化物の放射性炭素年代測定	48
第2節 石井要害跡における軟X線写真観察	51
第5章 総 括	
第1節 石井要害跡をめぐる諸問題	60
第2節 出土遺物について	65
第3節 まとめ	66
遺物観察表	68
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	調査区位置図	4
第3図	周辺遺跡分布図	9
第4図	石井要害跡位置図及び周辺の山城・砦分布図	10
第5図	頂部平坦面 第2遺構面遺構分布図及び出土遺物分布図	13・14
第6図	頂部平坦面土層図	15
第7図	腰郭3	16
第8図	郭1出土遺物(1)	18
第9図	郭1出土遺物(2)	19
第10図	土坑1・3	20
第11図	土坑1出土遺物	21
第12図	土坑2	22
第13図	土坑2出土遺物	22
第14図	集石遺構	23
第15図	集石遺構出土遺物	24
第16図	柱穴列1(P27)遺物出土状況図	25
第17図	柱穴列1(P27)出土遺物	25
第18図	柱穴列2(P15)出土遺物	26
第19図	柱穴列3(P36)出土遺物	26
第20図	頂部平坦面 第1遺構面遺構分布図及び出土遺物分布図	27・28
第21図	陶器・瓦溜り	29
第22図	陶器・瓦溜り出土遺物	30
第23図	腰郭1	31
第24図	南西側斜面腰郭土層図	32
第25図	土手状遺構・溝状遺構・柵列1	33
第26図	柵列1(P4)出土遺物	34
第27図	障壁設置遺構1～3	35
第28図	腰郭2	36
第29図	腰郭2土層図	37
第30図	腰郭2造成土出土遺物	38
第31図	腰郭2出土遺物	39
第32図	遺構外出土の古代以前遺物	40
第33図	遺構外出土の中世遺物(1)	41
第34図	遺構外出土の中世遺物(2)	42
第35図	遺構外出土の中世遺物(3)	43
第36図	遺構外出土の近世以降遺物(1)	44
第37図	遺構外出土の近世以降遺物(2)	45
第38図	遺構外出土の近世以降遺物(3)	46
第39図	暦年較正結果	50
第40図	調査区平面図(試料採取地点)	51

第41図	試料採取地点断面図 (T2)	52
第42図	試料採取地点断面図 (T8)	54
第43図	軟X線写真観察結果：T2 (最上部)	55
第44図	軟X線写真観察結果：T2 (上部)	56
第45図	軟X線写真観察結果：T2 (下部)	57
第46図	軟X線写真観察結果：T2 (最下部)	58
第47図	軟X線写真観察結果：T8	59
第48図	石井地区の小字図	61
第49図	I・II期の郭・腰郭の推定模式図	62

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	頂部平坦面ピット計測表	13・14
第3表	腰郭1ピット計測表	33
第4表	放射性炭素年代測定および暦年較正結果	49
第5表	石井要害跡 第1次調査出土土器・陶磁器集計表	66
第6表	郭1出土陶磁器・土器観察表	68
第7表	郭1出土石製品観察表	69
第8表	郭1出土金属製品観察表	69
第9表	土坑1出土陶器観察表	69
第10表	土坑2出土陶磁器・土器観察表	69
第11表	集石遺構出土陶器観察表	70
第12表	柱穴列1 (P27) 出土陶器観察表	70
第13表	柱穴列2 (P15) 出土陶磁器観察表	70
第14表	柱穴列3 (P36) 出土磁器観察表	70
第15表	陶器・瓦溜り出土陶器・瓦観察表	71
第16表	柵列1 (P4) 出土石製品観察表	71
第17表	腰郭2造成土出土陶器・土器観察表	71
第18表	腰郭2出土陶器観察表	72
第19表	腰郭2出土金属製品観察表	72
第20表	遺構外出土の古代以前土器観察表	72
第21表	遺構外出土の古代以前石器観察表	73
第22表	遺構外出土の中世陶磁器・土器観察表	73
第23表	遺構外出土の中世石製品観察表	74
第24表	遺構外出土の近世以降陶磁器・土製品観察表	75
第25表	遺構外出土の近世以降瓦観察表	76
第26表	遺構外出土の近世以降金属製品観察表	76

写真図版目次

- 巻頭図版 1 石井村田畑地続字限絵図・字要害
巻頭図版 2 石井村・橋本村古城跡
 (『因伯古城跡図志』)
 石井要害跡全景(西から)
- 図版 1 石井要害跡 本丸(西から)
 昭和44年撮影
 石井要害跡 本丸(西から)
 昭和44年撮影
- 図版 2 住宅造成工事中の状況(北から)
 住宅造成工事中の状況(南から)
 住宅造成工事完成後の状況(北西から)
- 図版 3 調査地遠景(東から)
 調査地の頂部から東を望む
- 図版 4 調査地の頂部から南東の橋本七尾城跡
 を望む
 調査地の頂部から西の新山要害跡を望む
- 図版 5 南東側斜面 調査前状況(東から)
 南西側斜面 調査前状況(南西から)
- 図版 6 頂部平坦面 調査前状況(南西から)
 南西側斜面腰郭 調査前状況
 (北西から)
- 図版 7 調査位置全景(上が南東)
 調査地全景(上が南東)
- 図版 8 調査地全景(南東から)
 調査地全景(南西から)
- 図版 9 頂部平坦面 第2遺構面全景
 (上が南東)
 T7土層断面(南から)
- 図版10 T9土層断面(北から)
 T11土層断面(北東から)
- 図版11 T12土層断面(南から)
 T8 腰郭3 検出状況(南西から)
- 図版12 土坑1、3(北東から)
 土坑2(南西から)
- 図版13 集石遺構内遺物出土状況推移
 (北東から)
- 図版14 柱穴列1(P27) 遺物出土状況
 頂部平坦面 D2・3、E2・3グリッド
 第1遺構面全景(北東から)
- 図版15 頂部平坦面 D4・5、E4・5グリッド
 第1遺構面全景(北東から)
 陶器・瓦溜り遺物出土状況(東から)
- 図版16 腰郭1(上が南西)
 T3拡張区 腰郭1(東から)
- 図版17 T2 腰郭1(南西から)
 T2 腰郭1(北東から)
- 図版18 T6 腰郭1(南西から)
 T6 腰郭1(北東から)
- 図版19 T2 腰郭1 排水用溝(北西から)
 T1拡張区 腰郭1 全景(北東から)
- 図版20 土手状遺構(北東から)
 土手状遺構(南西から)
- 図版21 土手状遺構 方形穴(北東から)
 溝状遺構(北東から)
- 図版22 柵列1(南東から)
 T2 空堀1(北西から)
- 図版23 T6 空堀1(北西から)
 T3拡張区 空堀1(北西から)
- 図版24 障壁設置遺構1～3(北から)
 障壁設置遺構1(北から)
- 図版25 障壁設置遺構2(北から)
 障壁設置遺構3(北から)
- 図版26 腰郭2(北東から)
 T1 腰郭2土層断面(西から)
- 図版27 T2 腰郭2土層断面(北西から)
 T6 腰郭2土層断面(南東から)
- 図版28 T3拡張区 腰郭2土層断面(東から)
 南西側斜面上部切岸(南西から)
 南西側斜面下部切岸(南西から)
- 図版29 郭1出土遺物
 土坑2、柱穴列2、柱穴列3出土遺物
- 図版30 集石遺構出土遺物
 柱穴列1(P27)出土遺物
 陶器・瓦溜り出土遺物
- 図版31 腰郭2造成土、腰郭2出土遺物
 郭1、腰郭2出土鉄製品
 工事中出土遺物
- 図版32 遺構外出土の中世遺物(1)
 遺構外出土の中世遺物(2)

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県米子市石井地内において計画された石井地区単県急傾斜地崩壊対策工事に伴い、工事対象地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

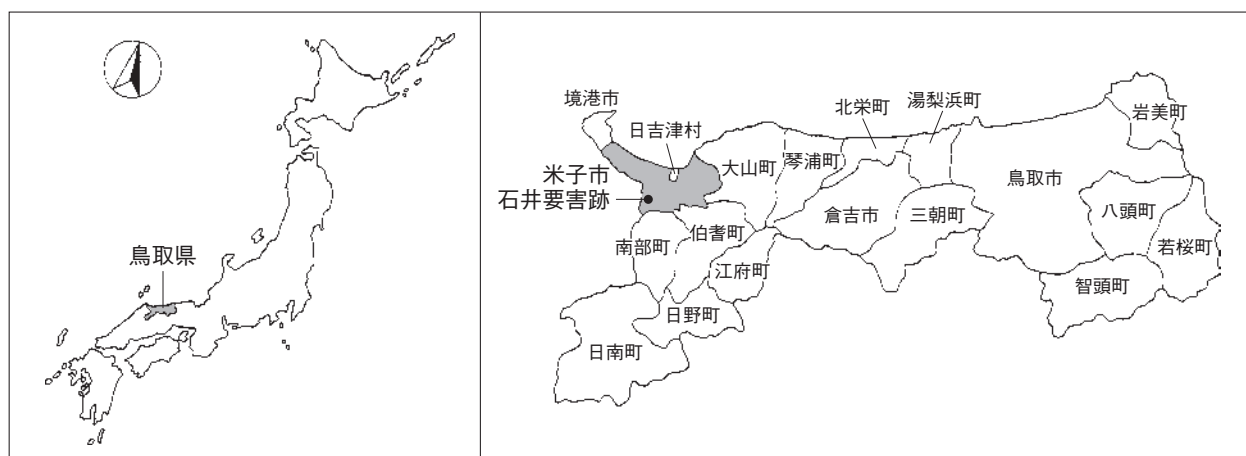
工事対象地は、周知の遺跡である石井要害跡の出丸として認識されており、工事に先立って工事対象地内の遺跡の有無及びその範囲を確認する必要が生じた。そのため、米子市教育委員会が平成28年度に試掘調査を実施したところ、頂部では地山の造成平坦面と地山の落ち込み部分に造成土が確認され、陶磁器と土師質土器が出土した。また、丘陵の南西側斜面では腰郭が良好な状態で遺存し、硬く突き固めて造成して構築していることが明らかとなった。

この結果を受け、鳥取県西部総合事務所と米子市教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行い、発掘調査が必要との判断に至った。そのため、鳥取県西部総合事務所は、一般財団法人米子市文化財団に発掘調査を委託することとなり、当財団は、平成29年12月5日付で文化財保護法第92条に基づく発掘届を鳥取県教育委員会に提出し、平成29年度の調査は、平成30年1月15日付、平成30年度の調査は、平成30年3月23日付で鳥取県と契約をした。それに基づき当財団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

発掘調査は、出丸の工事対象地の1,300㎡を対象としたが、調査に着手したのが調査地内の立木の伐開作業と土留柵設置工事が終了した平成30年3月であったため、調査期間の都合により、平成29年度と平成30年度の2ヶ年に分けて調査を実施した。

平成29年度の調査は、工事対象地の一部の350㎡を対象として、平成30年3月2日から平成30年3月29日までの期間で現地調査を行った。平成29年度は、出丸の南西側斜面の中腹に位置する腰郭とその下部に位置する切岸の調査を実施した。



第1図 遺跡位置図

平成29年度調査日誌抄

- 3月2日 業者委託による基準点測量
発掘器材搬入
調査区割のための杭打ち
- 3月6日 発掘作業員稼働開始、調査地及び周辺的环境整備
- 3月7日～ 発掘作業員稼働による表土・包含層の掘削及び遺構検出
- 3月17日 腰郭2完掘
- 3月20日 トレンチ3で空堀1を検出
- 3月27日 トレンチ1で土手状遺構を検出
- 3月29日 平成29年度の調査終了

平成30年度の調査は、工事予定地の残りの950㎡を対象として、平成30年4月10日から平成30年7月11日までの期間で現地調査を行った。平成30年度は、出丸の丘陵頂部平坦面の南東側と南西側斜面のうち、腰郭よりも上部に位置する切岸の調査を実施し、さらに平成29年度に調査を実施した南西側斜面の腰郭を調査区を拡張して追加調査した。

なお、平成30年6月2日には現地説明会を実施し、当日は天候にも恵まれ、98名の参加があった。

平成30年度調査日誌抄

- 4月10日 平成30年度の調査開始
調査区割のための杭打ち
発掘作業員稼働開始、調査地内の環境整備
- 4月10日～ 発掘作業員稼働による表土・包含層の掘削及び遺構検出
- 4月10日～16日 南西側斜面の腰郭の調査区を拡張して調査を実施
- 4月20日 頂部平坦面で陶器・瓦溜り検出
- 4月23日 頂部平坦面 第1遺構面調査終了
- 5月17日 頂部平坦面で集石遺構検出
- 5月22日 頂部平坦面 第2遺構面調査終了
- 5月29日 トレンチ8で腰郭3の平坦面を検出
- 5月31日 記者発表
- 6月2日 現地説明会開催（参加者98名）
- 6月7日 業者委託による調査後空中写真撮影実施
- 6月8日 発掘調査現場片付け、発掘器材撤収
- 7月11日 業者委託による軟X線写真観察試料採取
- 7月11日 平成30年度の調査終了

第3節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成30年度に出土遺物の洗浄と注記、接合作業を行い、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末に報告書を刊行した。

第4節 調査体制

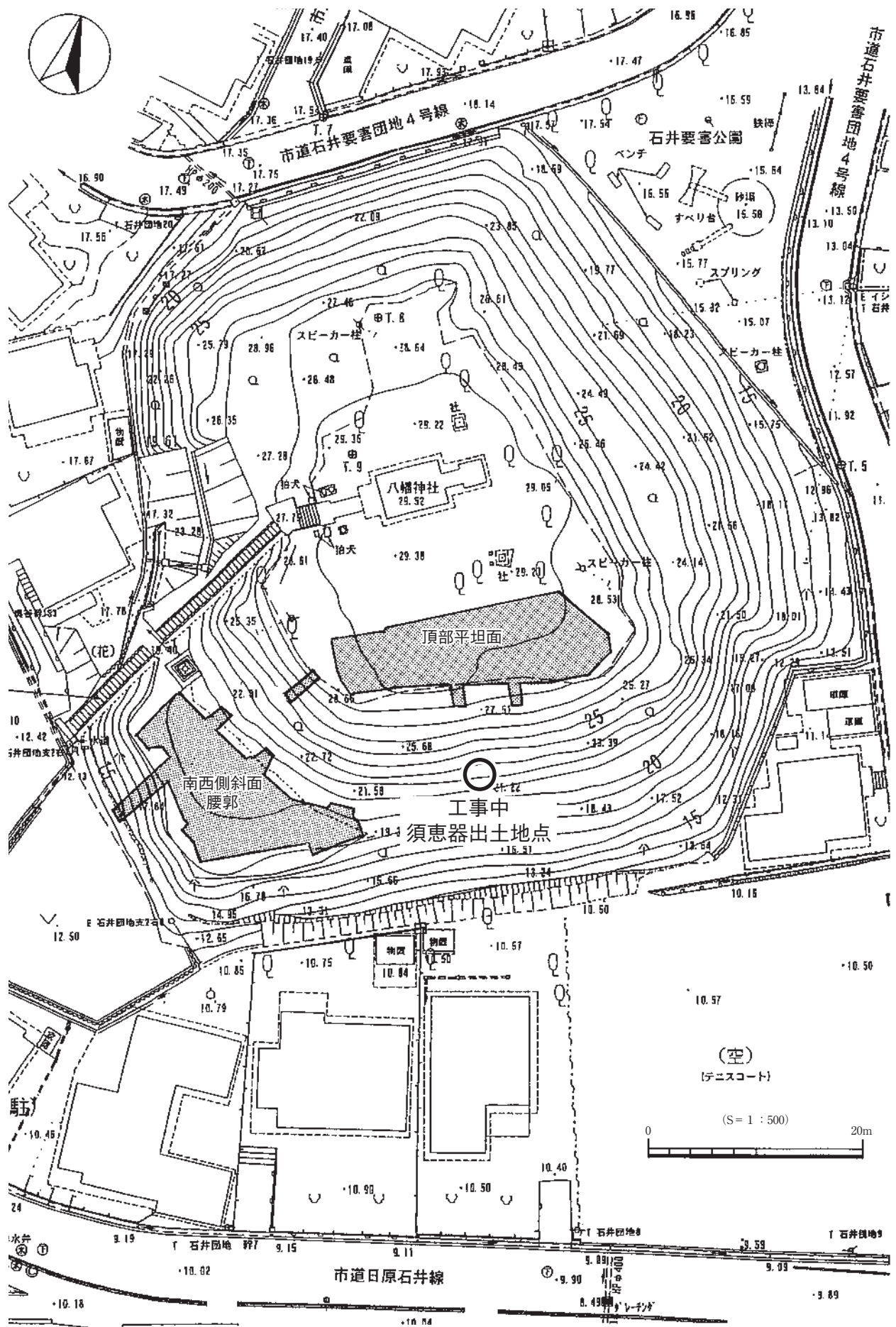
平成29年度（2017年度）

事業主体 一般財団法人 米子市文化財団
理 事 長 杉原弘一郎
常 務 理 事 先灘達也（一般財団法人 米子市文化財団事務局長）
埋蔵文化財調査室
室長兼調査員 小原貴樹
次長兼統括調査員 平木裕子
統括調査員 佐伯純也
非常勤職員 田中昌子
事業担当 室長兼調査員 小原貴樹
主任調査員 高橋浩樹
調査補助員 秦 美香

平成30年度（2018年度）

事業主体 一般財団法人 米子市文化財団
理 事 長 杉原弘一郎
常 務 理 事 先灘達也（一般財団法人米子市文化財団事務局長）
埋蔵文化財調査室
室長兼調査員 小原貴樹
主査兼統括調査員 平木裕子
主幹兼統括調査員 佐伯純也
非常勤職員 田中昌子
事業担当 室長兼調査員 小原貴樹
主幹兼統括調査員 佐伯純也
主任調査員 高橋浩樹
調査補助員 秦 美香

調査協力・管理・指導・助言 米子市教育委員会・鳥取県教育委員会



第2図 調査区位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

米子市は、鳥取県の西端に位置する鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。

地形的には、中国山地に源を発する日野川の沖積作用によって形成された米子平野を中心に、それを取り囲むようにしてその周縁部には大山、中国山地からつづくなだらかな山地や丘陵によって構成されている。さらに、米子平野は日野川によって形成された扇状地性の沖積地である日野川扇状地を中心にして、その北側の低地と発達した2条の砂州からなる日吉津低地、南西側の法勝寺川によって形成された沖積世の河谷低地である法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、西側の米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなっている。また、北西には日野川からの流出土砂が北西の季節風や沿岸流の影響で堆積し、これによって形成された弓浜半島が南北にのび、その西側にはこの半島によって外海と遮断されて形成された汽水湖の中海がある。

米子市は、弓浜半島南部から米子平野北部、そして大山北西麓にかけて市域が広がり、北は境港市、東は大山町、南東は伯耆町、南は南部町、西は島根県安来市とそれぞれ接している。

石井要害跡は米子市西部の米子市石井に所在する。この地は米子市街地の南約3kmにある農村地帯で西へ約2km行けば島根県との県境となる。

調査地は加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地し、南から東側にかけては法勝寺平野が開ける。石井要害跡が立地する丘陵は、昭和44年に住宅団地造成工事のため大半が削平されているが、明治2年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』によると、楕円形の城郭として丘陵は3段に削られ、その周囲を堀跡と考えられる水田が囲んでいる。また、この辺りは出雲や備後に至る街道が通過し、橋本七尾城とともに西伯耆の防御拠点であった。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

周辺での人々の生活の痕跡は旧石器時代まで遡る。長者原台地の諏訪西山ノ後遺跡(21)では、ローム層中から頁岩製のナイフ形石器が1点出土し、古墳の周溝からもナイフ形石器が出土している。また、坂長村上遺跡(58)ではローム漸移層からであるが、黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代

縄文時代草創期には奈喜良遺跡(22)、陰田宮の谷遺跡(31)、吉谷亀尾ノ上遺跡(42)、福成石佛前遺跡(46)、境北井塔遺跡(44)、境矢石遺跡(45)、諸木遺跡(51)から尖頭器が出土している。

縄文時代早期には大山西麓に遺跡が集中しており、日野川左岸では当該期の遺跡は少なく、清水谷遺跡(48)で黄鳥式～高山寺式に比定される押型文土器、新山山田遺跡(38)で早期中葉の押型文土器が少量出土しているのみである。

早期末から前期になると中海沿岸で集落の形成が行われるようになり、このような遺跡には目久美遺跡（4）、陰田第1遺跡（30）、陰田第7遺跡（27）、陰田第9遺跡（29）がある。目久美遺跡では当該期には土器とともに多量の石錘と動植物遺体が出土している。また、陰田第9遺跡では、轟式の影響を受けた土器が出土している。

中期には現在のところあまり明確ではないが、遺跡の数が減少する傾向にある。目久美遺跡では、この時期のドングリ貯蔵穴が多数確認されている。

後期には大山西麓や中海沿岸の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。この時期の遺跡には、目久美遺跡、陰田第1遺跡、陰田第7遺跡、古市河原田遺跡（40）、青木遺跡（16）などがあり、青木遺跡では多数の陥穴が確認されている。

晩期には目久美遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡、新山下山遺跡（36）、古市河原田遺跡などがあり、古市河原田遺跡からは晩期後葉の突帯文土器がまとまって出土している。

弥生時代

弥生時代になると海岸線が後退するとともに沖積が進み、低湿地にて農耕が開始される。

前期には目久美遺跡では低湿地水田と微高地に営む集落が形成され、長砂第1遺跡（6）でも前期後葉～中期初頭の水田跡が確認されている。また、前期末～中期前葉には清水谷遺跡、諸木遺跡、宮尾遺跡（53）天王原遺跡（56）で断面V字状の環濠が確認されている。

中期には遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、低湿地の微高地上、高原地域にも見られるようになる。目久美遺跡、長砂第2遺跡（7）は低湿地に立地する遺跡で、目久美遺跡では中期中葉～中期後葉と中期後葉～中期末の2面の水田跡が検出され、長砂第2遺跡でも前期末～中期前葉と中期後葉～後期の水田跡が確認されている。

後期には前期～中期の拠点的な集落は継続するものは少なく、中期後葉から後期にかけて青木遺跡、福市遺跡（15）、妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群（61）のように新たに拠点的な集落が形成され、古墳時代へと継続する。また、中期後葉～後期には遺跡は低地から低丘陵へ立地が移動する傾向にあり、このような遺跡には陰田第1遺跡、陰田第6遺跡（28）、吉谷銭神遺跡（41）などがあるが、これらは比較的短期間で廃絶する。

古墳時代

前期の古墳には日原6号墳（13）、普段寺1号墳・2号墳（54）などがある。日原6号墳は一辺21mの方墳で、箱形木棺3基、割竹形木棺1基、土壙墓2基が検出されている。普段寺1号墳は全長23mの前方後方墳で、三角縁唐草文帯二神二獣鏡、碧玉製管玉、鉄剣が出土している。普段寺2号墳は直径22～23mの円墳と考えられ、三角縁四神四獣鏡が出土している。青木遺跡では小型の方墳10基と円墳7基からなる古墳群と、これらとの階層差を示す方形周溝墓群が確認され、福市遺跡日焼山地区では土壙墓群が検出されている。

この時期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡などがあり、池ノ内遺跡（5）では水田跡が検出されている。

中期の古墳には陰田41号墳、水道山古墳（8）、新山山田古墳群（39）、三崎殿山古墳（52）、浅井11号墳、福成春日山古墳などがある。陰田41号墳は直径30mの円墳で、若年の女性を埋葬した箱式石棺

を有する。新山山田古墳群は10基からなる古墳群で、7号墳からは珠文鏡が出土している。三崎殿山古墳は全長108mの前方後円墳で、西伯耆最大の規模を誇る。福成春日山古墳は全長30m級の前方後円墳で、頭蓋骨を朱塗りした人骨が箱式石棺に埋葬されていた。また、水道山古墳からは斜縁八神鏡、浅井11号墳からは画文帯神獸鏡が出土している。

この時期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、新山山田遺跡、新山研石山遺跡（37）などがある。

後期には群集墳がつくられるようになり、この周辺には東宗像古墳群（11）、宗像古墳群（12）、新山山田古墳群などがある。また、この地域は横穴墓の隆盛する出雲地方の影響を受けて、6世紀後半に横穴墓の築造が開始される。50基にも及ぶ陰田横穴墓群、大塔山横穴墓群（10）、マケン堀横穴墓群（50）などがあり、これらはいずれも後背墳丘を有するという特色をもつ。

この時期の集落には青木遺跡、福成早里遺跡（47）、清水谷遺跡などがある。

飛鳥～平安時代

この時期の遺跡は法勝寺川西岸と長者原台地に多く分布している。法勝寺川西岸では、陰田遺跡群（24～26、28、31～35）、新山遺跡群（36～38）などがあり、これらはいずれも丘陵斜面を加工して平坦面をつくり、そこに掘立柱建物などを構築している。また、これらの遺跡では鍛冶、製鉄関連の遺構、遺物が検出され、さらに、木簡や円面硯、墨書土器などが出土しており、7世紀後半以降、官衙的性格を有するようになる。また、陰田第6遺跡では石敷道路が確認されており、古代山陰道の支道と考えられている。以上のことから伯耆、出雲国境近くに位置するこの地域は極めて重要な場所であったと考えられる。

一方、長者原台地では法起寺式の伽藍配置をもつ白鳳期の大寺廃寺跡や平安時代の坂中廃寺跡があり、さらに、これらに近接する長者屋敷遺跡（57）、坂長下屋敷遺跡（59）、坂長第6遺跡（60）では官衙的配置をとる大型建物群が確認されており、長者原台地上に会見郡衙が存在していたことが明らかとなりつつある。

集落としては青木遺跡、樋ノ口第4遺跡（17）、諏訪西山ノ後遺跡などがあり、樋ノ口第4遺跡からは石帯が出土し、諏訪西山ノ後遺跡では土師器甕に和同開珎3枚、刀子、鋤先、墨挺を入れて埋納した胞衣埋納遺構が検出されている。

中世

南北朝から戦国期の動乱を背景として米子市内には石井要害（14）、橋本七尾城（23）、新山要害（43）、戸上山城（9）、飯山城（2）、河岡城、尾高城などが築かれる。『伯耆志』によると、橋本七尾城は守護山名氏の重臣行松氏が在城し、石井要害は片山小四郎が在城し、出雲からの侵攻に備えたという。

古墓は長者原台地で多く確認されており別所長峰古墓（18）、諏訪1号墳（19）、青木遺跡、別所中原地下式横穴（20）がある。別所長峰古墓と諏訪1号墳は、方形の墳丘の周囲に溝を巡らせるもので、墳丘上に宝篋印塔あるいは五輪塔を立てていたと思われる。別所中原地下式横穴では地下式の横穴墓が3基検出された。経塚は長砂町と奥谷で発見されているが、いずれも遺構は不明である。錦町第1遺跡（3）では畠跡が検出されている。

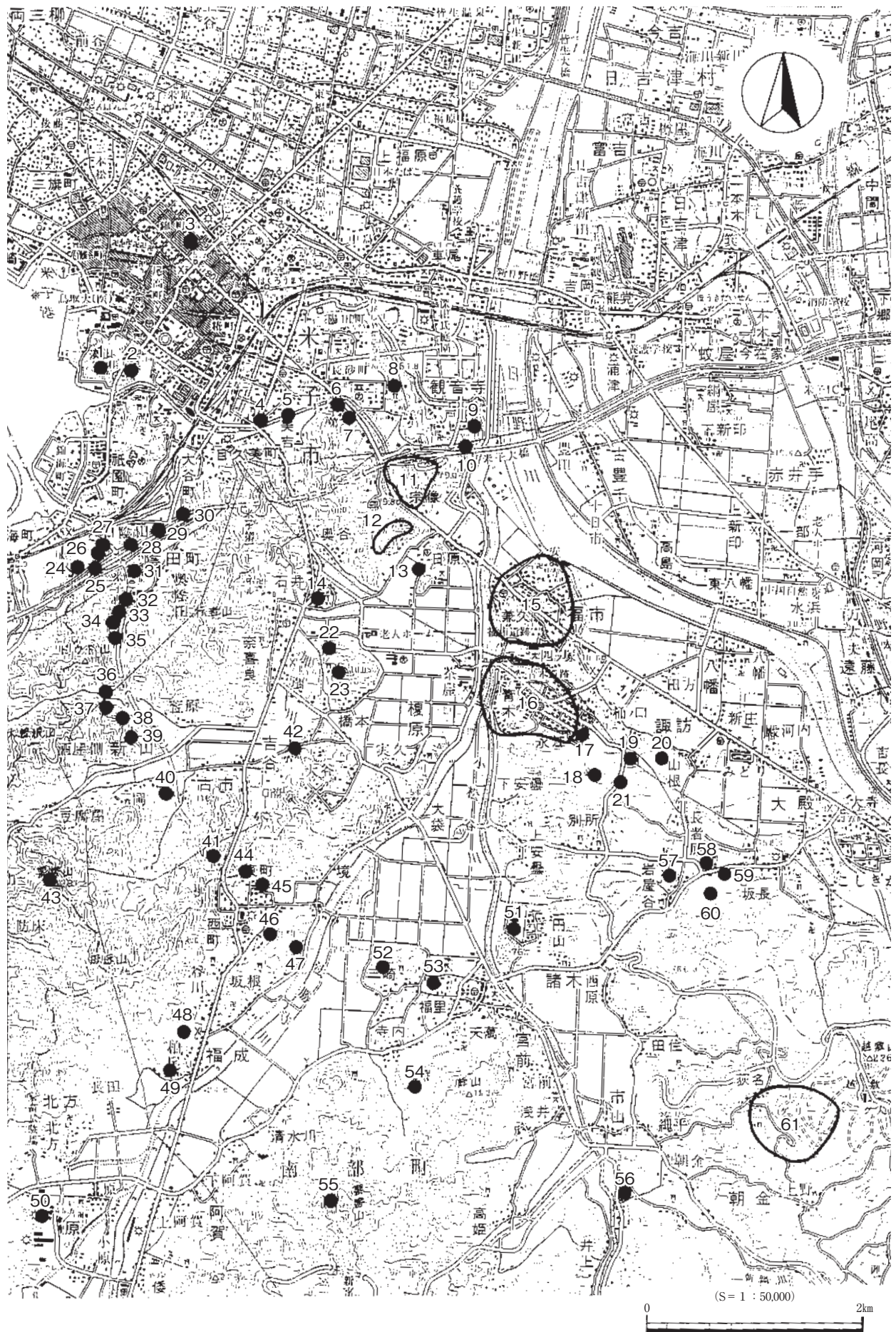
近世・近代

近世の城下町の中心であった米子城は天正19年（1591）に東出雲、西伯耆、隠岐12万石の吉川広家によって築城が開始されるが、慶長5年（1600）周防国岩国に転封される。かわって中村一忠が同年、伯耆18万石の領主として入城したが、慶長14年（1609）に中村家は断絶し、その後、慶長15年（1610）に加藤貞泰が伯耆国汗入・会見郡6万石を領有し、米子城主となる。やがて元和3年（1617）池田光政が因伯2国の領主となり、池田由之が米子城主となる。寛永9年（1632）の国替えによって池田光仲が鳥取藩主となると光仲の首席家老の荒尾成利が米子城を預かることとなり、その後、明治2年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

米子市石井は近世には石井村と称した。法勝寺往来がほぼ南北に通じ、藩政期の拝領高は419石余、本免は四ツ五分で、全村が米子荒尾氏の給地であった。幕末の『六郡郷村生高竈付』では生高471石余、竈数66とあり、『伯耆志』では林46町2反余、家数66、人数300とある。また、明治12年の『共武政表』では家数66、男102、女121、牛27、馬1とある。石井村は明治22年（1889）には会見郡成実村大字石井となり、昭和29年（1954）には米子市石井となり、現在に至っている。

1 米子城跡	2 飯山城跡	3 錦町第1遺跡	4 目久美遺跡
5 池ノ内遺跡	6 長砂第1遺跡	7 長砂第2遺跡	8 水道山古墳
9 戸上山城跡	10 大塚山横穴墓群	11 東宗像古墳群	12 宗像古墳群
13 日原6号墳	14 石井要害跡	15 福市遺跡	16 青木遺跡
17 樋ノ口第4遺跡	18 別所長峰古墓	19 諏訪1号墳	20 別所中原地下式横穴
21 諏訪西山ノ後遺跡	22 奈喜良遺跡	23 橋本七尾城跡	24 陰田荒神谷遺跡
25 陰田小犬田遺跡	26 陰田ヒチリザコ遺跡	27 陰田第7遺跡	28 陰田第6遺跡
29 陰田第9遺跡	30 陰田第1遺跡	31 陰田宮の谷遺跡	32 陰田広畑遺跡
33 陰田隠れが谷遺跡	34 陰田ハタケ谷遺跡	35 陰田夜坂谷遺跡	36 新山下山遺跡
37 新山研石山遺跡	38 新山山田遺跡	39 新山山田古墳群	40 古市河原田遺跡
41 吉谷銭神遺跡	42 吉谷亀尾ノ上遺跡	43 新山要害跡(長台寺城跡)	44 境北井塚遺跡
45 境矢石遺跡	46 福成石佛前遺跡	47 福成早里遺跡	48 清水谷遺跡
49 丸山固屋跡(小鷹城跡)	50 マケン堀横穴墓群	51 諸木遺跡	52 三崎殿山古墳
53 宮尾遺跡	54 普段寺1・2号墳	55 手間要害跡	56 天王原遺跡
57 長者屋敷遺跡	58 坂長村上遺跡	59 坂長下屋敷遺跡	60 坂長第6遺跡
61 越敷山遺跡群			

第1表 周辺遺跡一覧表



第3図 周辺遺跡分布図



第4図 石井要害跡位置図及び周辺の山城・砦分布図

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

石井地区単県急傾斜地崩壊対策工事は、石井要害跡の丘陵斜面が災害等により崩壊するのを防止する工事であり、本工事は、既に崩壊対策工事が行われている一部分を除いた、丘陵のほぼ全周が対象となっている。しかし、工区によって工事の事業主体が鳥取県・米子市と異なっているうえに、さらに鳥取県・米子市とも工区が各々2工区に分かれているために、全体として調査区を4つに分けて調査を実施することとなっている。本調査は、その第1次調査である。

第1次調査は、平成29年度と平成30年度の2年度にわたって実施し、平成29年度の調査は、南西側斜面の中腹に位置する腰郭とその下部の切岸の調査を実施した。

腰郭の調査は、急斜面であるために重機の使用ができないことから、人力で表土及び包含層の掘削を実施し、遺構の検出と掘削を行った。

調査にあたっては、丘陵の斜面地形に沿うように任意で4m画のグリッドを設定し、グリッド単位で調査を行った。グリッドは北東側から南西側へ向かって-A~Cとし、北西から南東へ向かって0~5とした。グリッド名は北側の杭の名称をとって呼称した。

当初、腰郭は1面のみと把握していたが、腰郭の構築状況及び下層の遺構、遺物の有無を確認するために調査中及び調査後に6ヶ所にトレンチを設定して調査を行った。その結果、いずれのトレンチでも遺構を確認したため、遺構の状況に応じてトレンチを拡張してさらなる確認調査を行った。

また、腰郭の調査と並行して腰郭の下部に位置する切岸の調査を実施した。トレンチを1ヶ所（第24図 T1）設定し、調査を行った。本事業が急斜面地崩壊対策であり、法面の掘削傾斜の保全のために全面的な調査ができず、下部遺構の調査はトレンチ調査のみに留めた。

検出した遺構と遺物の記録には、トータルステーションとレベルを用いて座標値を記録した。また、写真撮影は、35mmの一眼レフカメラを使用し、白黒とリバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとしてコンパクトデジタルカメラも使用した。

平成30年度の調査は、出丸の丘陵頂部平坦面の南東側と南西側斜面の腰郭の上部に位置する切岸の調査を実施し、さらに平成29年度に調査を実施した南西側斜面の腰郭の調査範囲を拡張して遺構の状況を追加調査した。

出丸の頂部平坦面の調査は、平成29年度と同様な方法で行った。

調査にあたっては、調査区に沿うように任意で5m画のグリッドを設定し、グリッド単位で調査を行った。グリッドは北西側をD、南東側をEとし、南西から北東へ向かって1~5とした。グリッド名は西側の杭の名称をとって呼称した。また、調査中及び調査後に土層の堆積状況及び下層の遺構、遺物の有無を確認するために6ヶ所にトレンチを設定して調査を行った。

南西側の腰郭の上部に位置する切岸には1ヶ所（第6図 T13）のトレンチを設定して調査を行った。

検出した遺構と遺物の記録には、遺跡調査システムを用いた。また、写真撮影は、35mmの一眼レフカメラを使用し、白黒とリバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとしてコンパクトデジタルカメラも使用した。

第2節 遺跡の立地と現状

石井要害跡は、米子平野の西部に位置する。調査地は加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地し、南から東側にかけては法勝寺平野が開ける。石井要害跡は、明治2年作成の「石井村田畑地続字限絵図・字要害」によると楕円形の城郭として丘陵は三段に構築され、その周囲を堀跡と考えられる水田が囲んでいる。昭和44年に住宅団地造成のため大半が削平され、南側の八幡神社が鎮座している丘陵が残存しているのみである。この丘陵の頂部は平坦となっており、出丸（八幡丸）と称されている。また、南西側及び南東側の切岸と南西側の腰郭は比較的良好に遺存しているが、北西側は住宅団地造成工事のため大きく削平され、北東側は斜面上部に切岸と腰郭が僅かに旧状を留めているのみである。

第3節 検出した遺構と遺物

今回の調査は、出丸の頂部平坦面の南東側と南西側斜面を対象として調査を実施した。頂部平坦面の郭では3時期、南西側斜面の腰郭では2時期の遺構が確認され、本稿では、時期の古い順にⅠ～Ⅲ期として報告する。

Ⅰ期には、頂部平坦面及び南西側斜面では地山を掘り込んで腰郭を構築しているが、Ⅱ期になると、Ⅰ期の腰郭を埋め立てて造成し、郭を拡張している。さらに、頂部平坦面では2面の遺構面があり、下層の遺構面を第2遺構面（Ⅱ期）、上層の遺構面を第1遺構面（Ⅲ期）として調査を行った。

各時期の帰属時期については、Ⅰ期は、遺構に伴う遺物がほとんど出土していないため、帰属時期は不明であるが、15世紀後半以前と考えられ、Ⅱ期は、出土遺物から16世紀前半～中頃、Ⅲ期は、出土遺物と放射性炭素年代測定の結果（第4章 第1節参照）から近世以降と考えられる。

1. 出丸の頂部平坦面の調査

(1) 頂部平坦面の層序（第6図）

丘陵の頂部には40m×20～25mの平坦面が広がり、その中央に八幡神社が鎮座する。

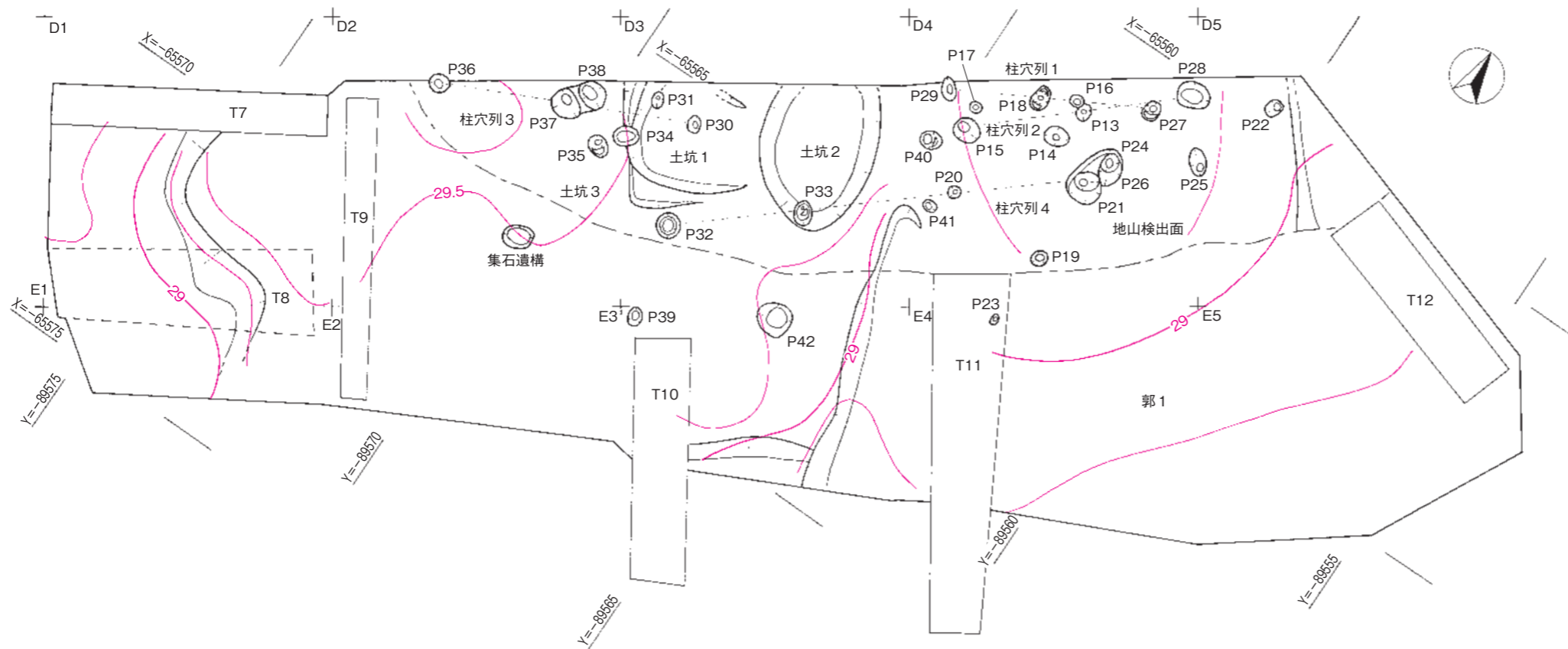
層序は、現地表面から表土（1層、層厚：10～25cm）、明褐色土（2層、層厚：10～50cm）となっており、調査区の北西側では、2層直下が軟岩質の地山となっている。調査区の南東側から南西側にかけては、地山を掘り込んで古い時期の腰郭が構築されており、新しい時期に郭を拡張、造成するにあたって、古い時期の腰郭を埋め立てている。埋め立て造成土は硬く締まっており、版築状となっている。

なお、第2層上面を第1遺構面、地山及び郭の拡張に伴う造成土上面を第2遺構面として遺構の検出を行った。

(2) Ⅰ期

腰郭3（第7図）

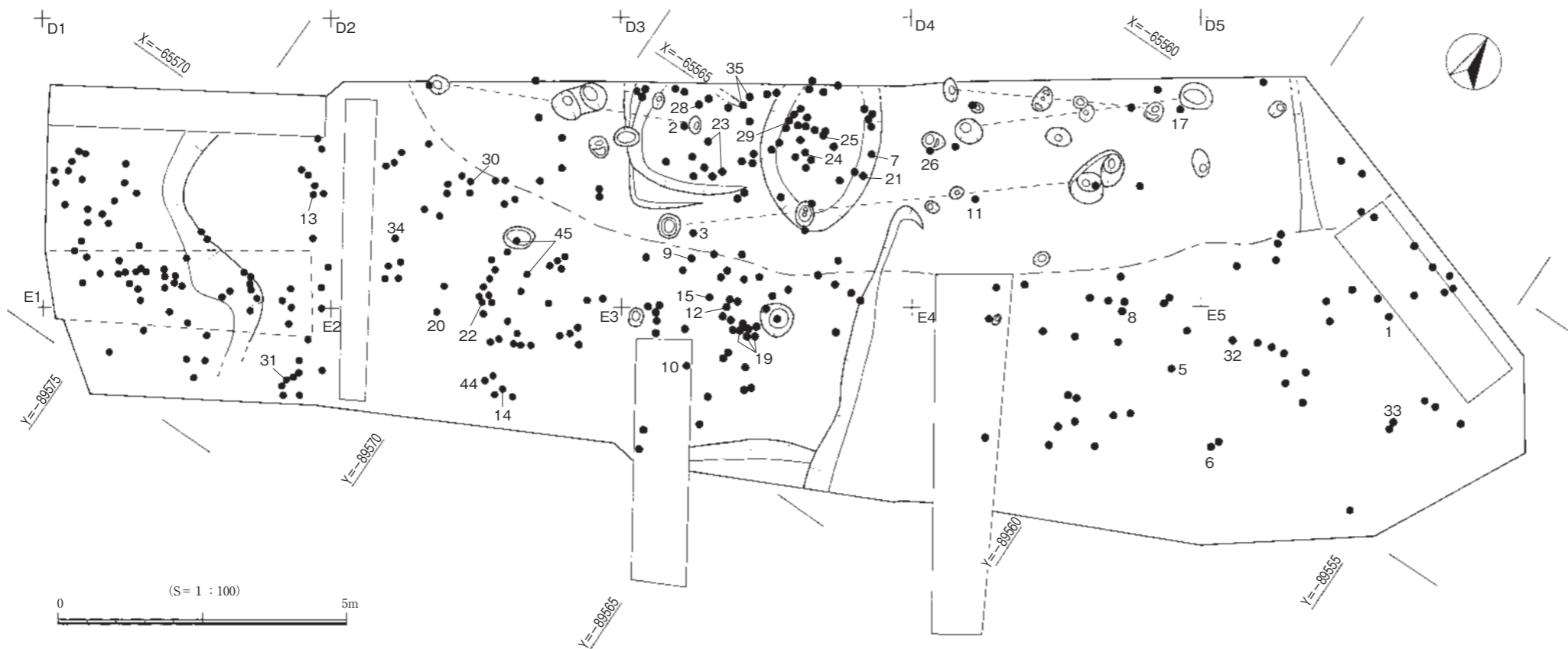
腰郭3は、調査区の南西側に設定した2ヶ所のトレンチ（T7・8）で、その平坦面（網掛け部分）を確認した。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。D2グリッドの地山検出面から掘り込まれたと考えられ、T7の平坦面の標高は28.1m、T8の平坦面の標高は27.9mで、D2グリッドの地山検出面との比高差は1.7～1.9mを測る。埋土はT7では認められなかったが、T8では最下層の



第2表 頂部平坦面ピット計測表

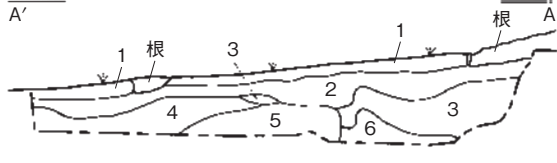
(単位: cm)

P	長径	短径	深さ
13	32	28	25
14	46	36	45
15	53	45	71
16	27	22	42
17	24	19	64
18	51	35	46
19	34	26	61
20	29	26	44
21	60	53	74
22	37	31	32
23	20	20	42
24	33	27	47
25	53	35	66
26	18	18	32
27	49	38	63
28	64	50	73
29	49	28	78
30	35	24	24
31	30	25	32
32	45	45	62
33	40	35	57
34	49	38	38
35	41	34	40
36	41	35	78
37	55	42	70
38	58	45	87
39	36	26	46
40	36	32	58
41	22	18	18
42	62	49	31



第5図 頂部平坦面 第2遺構面遺構分布図及び出土遺物分布図

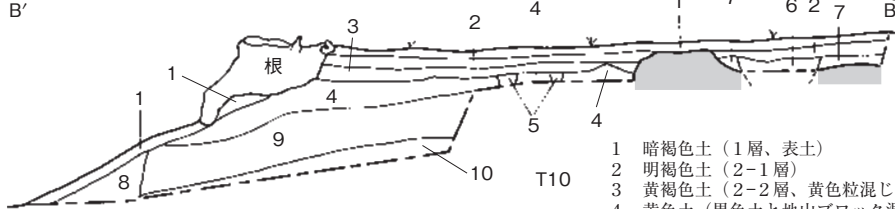
H=30.5m



- 1 暗褐色土 (1層、表土)
- 2 明褐色土 (2層)
- 3 黄色土 (地山ブロック土、造成土)
- 4 黄褐色土 (黄色粒混じり、造成土)
- 5 黄褐色土 (褐色土と黄色粒混じり、造成土)
- 6 黒色土 (造成土)

T9

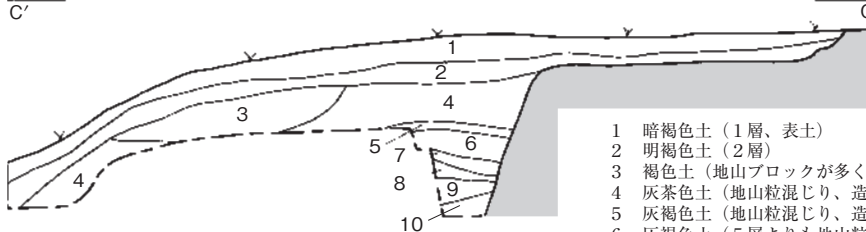
H=30.2m



- 1 暗褐色土 (1層、表土)
- 2 明褐色土 (2-1層)
- 3 黄褐色土 (2-2層、黄色粒混じり)
- 4 黄色土 (黒色土と地山ブロック混じり、造成土)
- 5 黒褐色土 (柱穴埋土)
- 6 褐色土 (土坑1埋土、地山粒混じり)
- 7 黄褐色土 (土坑3埋土、黄色粒混じり)
- 8 淡褐色土 (造成土)
- 9 茶灰褐色土 (地山小ブロック混じり、造成土)
- 10 茶灰色土 (地山小ブロック混じり、造成土)

T10

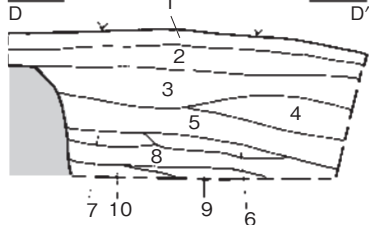
H=29.8m



- 1 暗褐色土 (1層、表土)
- 2 明褐色土 (2層)
- 3 褐色土 (地山ブロックが多く混じる、造成土)
- 4 灰茶色土 (地山粒混じり、造成土)
- 5 灰褐色土 (地山粒混じり、造成土)
- 6 灰褐色土 (5層よりも地山粒が多く混じる、造成土)
- 7 灰褐色土 (橙褐色と黒色のブロック混じり、造成土)
- 8 灰褐色土 (橙褐色小ブロックと地山粒が僅かに混じる、造成土)
- 9 灰褐色土 (地山ブロックが多く混じる、造成土)
- 10 褐色土 (造成土)

T11

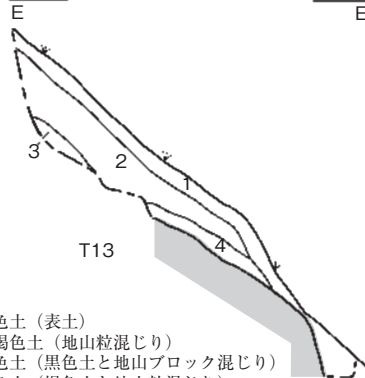
H=29.5m



- 1 暗褐色土 (1層、表土)
- 2 明褐色土 (2層)
- 3 灰茶色土 (地山粒、炭化物混じり、造成土)
- 4 淡黄褐色土 (造成土)
- 5 橙褐色土 (造成土)
- 6 灰褐色土 (地山ブロック、地山粒混じり、造成土)
- 7 淡灰褐色土 (地山ブロックが多く混じる、造成土)
- 8 淡灰褐色土 (地山粒混じり、造成土)
- 9 灰茶色土 (造成土)
- 10 灰茶色土 (地山粒混じり、造成土)

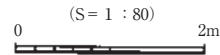
T12

H=29.2m

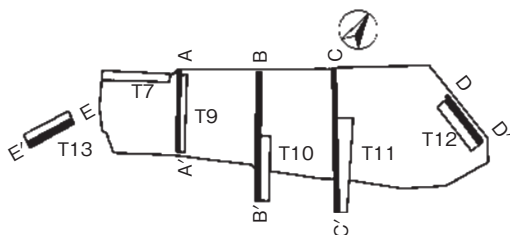


- 1 灰褐色土 (表土)
- 2 黄赤褐色土 (地山粒混じり)
- 3 黒褐色土 (黒色土と地山ブロック混じり)
- 4 暗褐色土 (褐色土と地山粒混じり)

T13



(網掛けは地山を示す)



第6図 頂部平坦面土層図

締まりのない淡褐色土(4層)が厚さ10cm残存するのみである。

T8の平坦面では、北西—南東方向へのびる検出長25cm、幅45cm、深さ5cmの溝状遺構と、北西から南東へ落ち込む溝状の掘形を検出した。また、トレンチの北東端では北東側に落ち込む掘形を検出し、T11では地山をほぼ垂直に2m以上掘り込んだ切岸を確認していることから、腰郭3の北東側にもう1段低い腰郭が存在すると推測される。

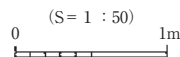
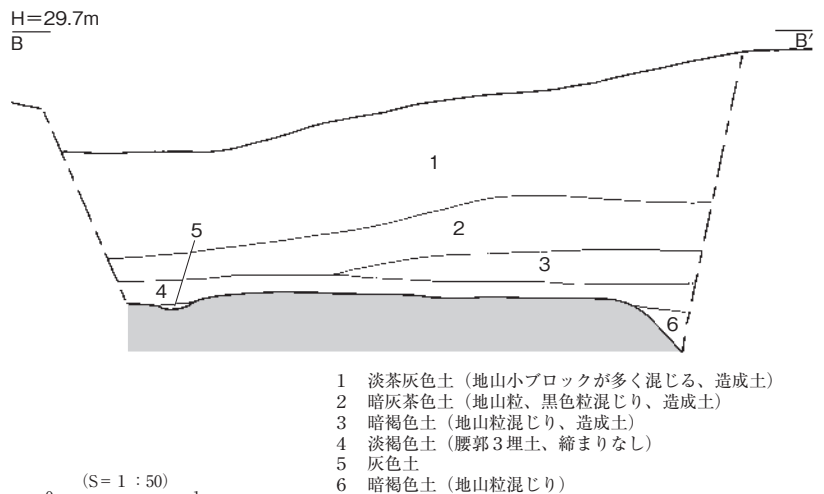
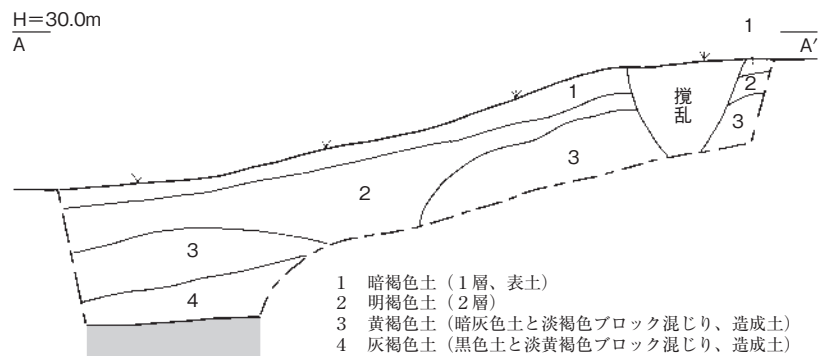
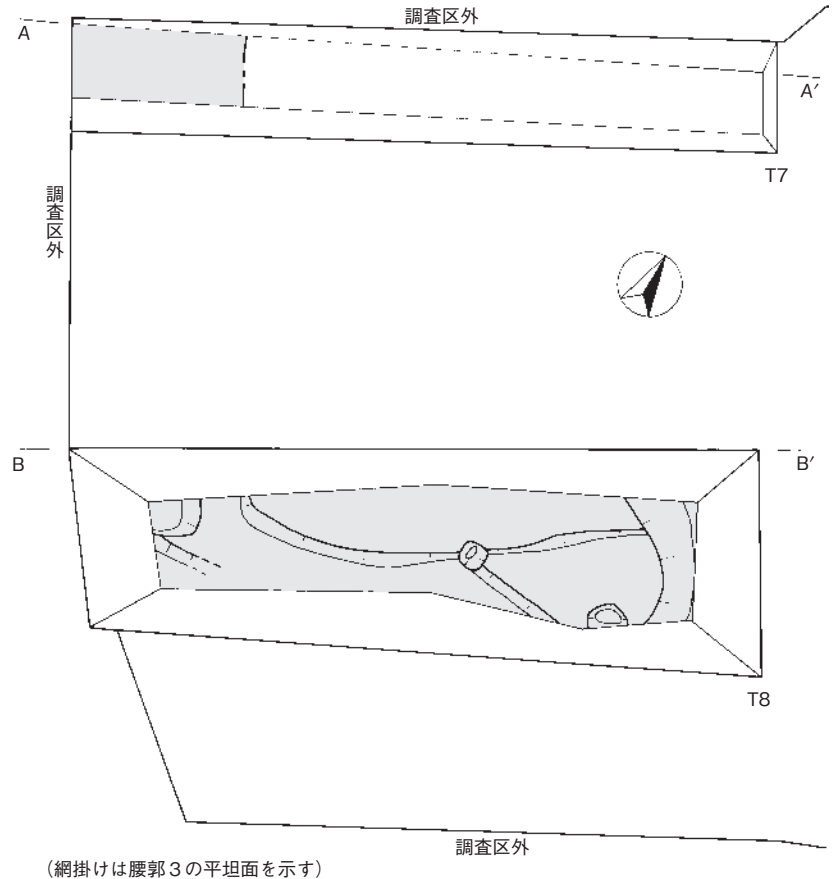
造成土からは遺物は出土しなかった。

(2) II 期

郭1 (第5・8・9図)

郭1は、出丸の頂部平坦面の郭で、検出した範囲は長さ21.7m、幅は最大で8.0mを測る。標高は29.6~29.8mを測る。調査区北西側のD2~D5グリッドでは軟岩質の地山を削平し、それよりも南西から南東にかけてはI期の腰郭を埋め立てて、平坦面を造成している。調査区北西側の削平した地山掘形から南東側に4~5m、南西側に6m程、郭を拡張している。造成土は非常に硬く締まっており、版築状となっている。

郭1では、主に調査区北西側の地山検出面で遺構を検出した。検出した遺構は、土坑3基、集石遺構1基、ピット30基である。ピットは深く掘り込まれたものが多く、柱穴と認識で



第7図 腰郭3

きるものであるが、このうち、建物跡として確認できなかったが、柱筋と柱間距離がほぼ揃う柱穴列を4条想定した。

遺物は、青磁、白磁、青花、朝鮮陶器、備前焼、唐津焼、土師質土器などが出土した。このうち、37点を図示する。

1～8は青磁である。1は上田分類の青磁碗B3類で、外面にはヘラ描きによる蓮弁文が施文されている。2、3は上田分類の青磁碗B4類で、いずれも外面には線描きによる連弁文が施文されている。4は上田分類の青磁碗E類である。5、6は稜花皿で、いずれも口縁端部に稜を持ち、貫入が認められる。いずれも内面には2条の波状文が施文されている。7、8は盤である。7は折縁の盤で、口縁端部には稜を持つ。また、内面には3条の波状文が施文されている。8は口縁部が2段に屈曲し、内面には丸ノミによる4条1単位の連弁文が施文されている。

9、10は白磁の皿である。9は森田分類のE群で、口縁端部が外反する。10は口縁部が外傾しながら立ち上がるものであるが、分類は不明である。

11、12は青花である。いずれも小野分類の染付皿B1群で、口縁端部が外反し、外面には一重圏線と牡丹唐草文、内面には一重圏線が施文されている。

13は褐釉陶器の筒形鉢で、外面には横位の突帯があり、内面は露胎となっている。産地は中国南方系か。

14は朝鮮半島産の粉青沙器の皿である。

15～21は備前焼で、15～19は壺である。15は口縁部で、やや外傾し、口縁端部外面を僅かに肥厚させている。乗岡編年の中世6a期に比定される。16は頸部から肩部にかけての部分、17～19は底部で、19の外面には下駄痕がある。20は甕で、口縁部は直立し、扁平な口縁帯をもつ。乗岡編年の中世5b期に比定される。21は播鉢で、口縁部は内傾し、口縁端部は外角をややつまみ上げ、口縁帯下角は垂下していない。乗岡編年の中世5b～6a期に比定される。

22、23は唐津焼の皿で、23の見込みには胎土目がある。24は瓷器系陶器の壺の口縁部で、内面には自然釉がかかっているが、外面は自然釉が剥落している。

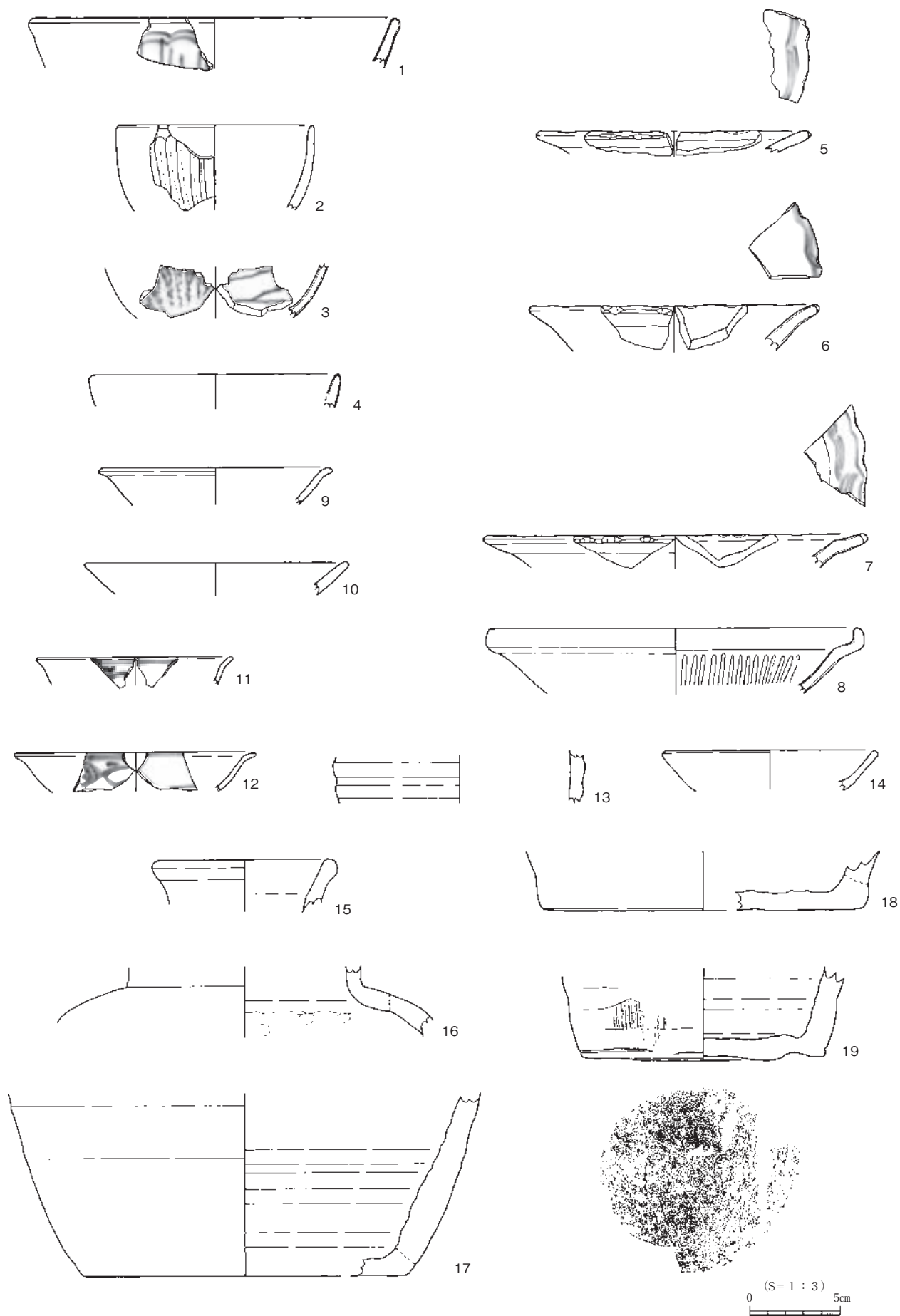
25～33は土師質土器で、25～30は皿である。25は京都系の皿で、口縁端部が僅かに外反し、口縁端部内面は浅い沈線状となっている。26は外傾して立ち上がるもので、底部外面には回転糸切りが施されている。27～30は底部で、いずれも外面には静止糸切りが施されている。31～33は火鉢である。31は口縁部が直立し、逆L字状を呈する。32、33は胴部で、32は31と同一個体である可能性があり、外面には2条の突帯が巡る。33の外面には雷文のスタンプ文が施されている。

34は瓦質土器の火鉢である。外面には1条の突帯の貼付痕があり、その下には渦巻状のスタンプ文が施されている。

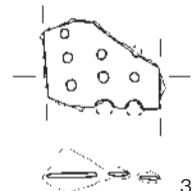
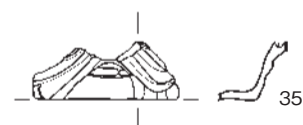
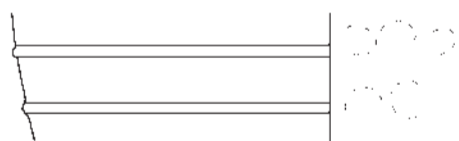
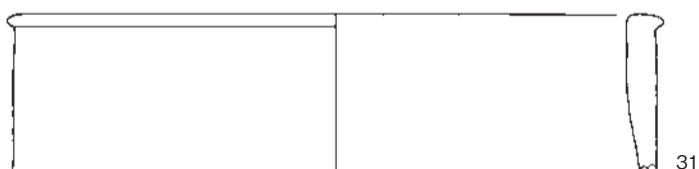
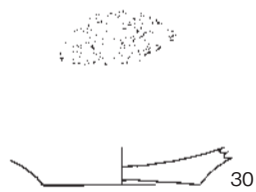
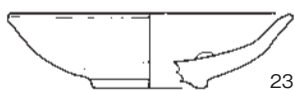
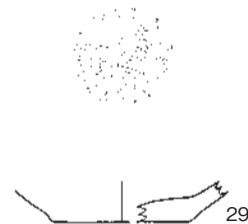
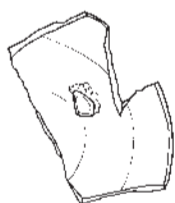
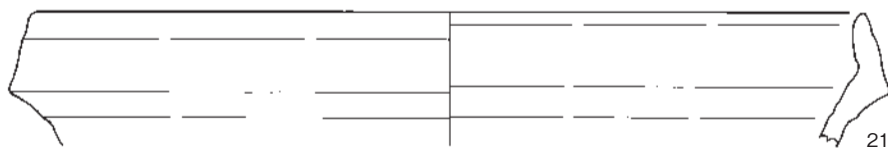
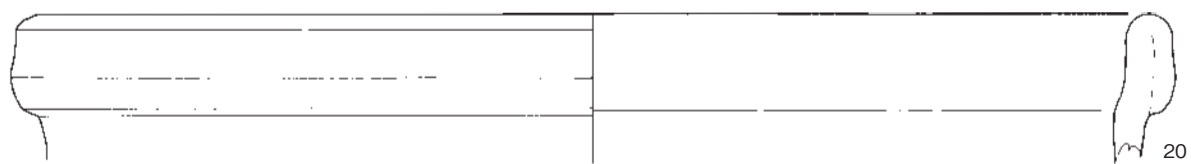
35は土製品である。器壁が薄く、左右にハの字状に開かれた衣の裾部を表現しており、人形の右足部分と考えられる。

36は石製品である。安山岩製の茶臼の下臼の臼面部片で、被熱している。分画、ふくみは不明である。

37は甲冑に用いられる鉄小札で、札頭は欠損しているが、残存札足（長さ）2.4cm、残存札幅（横幅）3.2cm、厚さ1.0mmを測る。縦は4mm、横は6mm間隔で3列に直径2.5～3.0mmの孔が穿たれている。本遺構の帰属時期は、出土遺物から16世紀前半～中頃と考えられる。



第8図 郭1出土遺物(1)



(S=1:3) 0 5cm

(S=1:4) 0 10cm

(S=1:2) 0 5cm

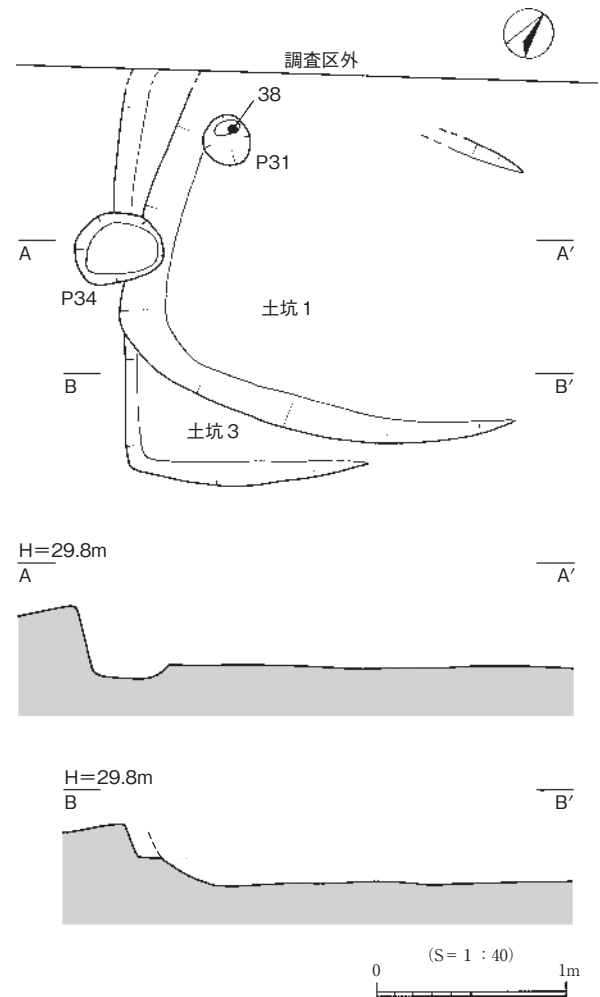
第9図 郭1出土遺物(2)

土坑1 (第10・11図)

土坑1は、調査区の中央やや北西寄りのD3グリッドで検出した。東側は削平され、北西隅は調査区外にかかっているが、平面形態は隅丸長方形を呈すると考えられる。土坑3を切っており、規模は長軸2.2m以上、短軸1.7m、深さ0.15mを測る。埋土は地山小粒が混じる褐色土の単層である。

遺物は、備前焼が出土した。38は備前焼の壺の肩部から底部にかけての部分で、肩部は丸みを持ち、胴部の中央には穿孔と工具痕が認められる。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から16世紀前半～中頃と考えられる。



第10図 土坑1・3

土坑2 (第12・13図)

土坑2は、調査区の中央やや北西寄りのD3グリッドで検出した。北西側は調査区外にかかっているが、平面形態は楕円形を呈すると考えられる。規模は長径2.6m以上、短径2.0m、深さ0.25mを測る。埋土は灰茶色土の単層である。

遺物は、青花、陶器、土師質土器、備前焼、須恵器が出土した。このうち、4点を図示する。

39は青花で、小野B1群の皿である。外面には一重圏線と牡丹唐草文、内面には二重圏線が施文されている。40は黒釉陶器の壺の肩部で、外面は施釉されているが、内面は露胎となっている。産地は中国南方系か。41は備前焼の壺の底部である。42は須恵器の提瓶の肩部で、把手の貼付痕が認められる。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から16世紀前半頃と考えられる。

土坑3 (第10図)

土坑3は、調査区の中央やや北西寄りのD3グリッドで検出した。東側は削平され、北西側は調査区外にかかっているが、平面形態は方形を呈すると考えられる。土坑1に切られているが、規模は南西—北東長1.3m以上、北西—南東長2.2m以上、深さ0.2mを測る。埋土は黄色小粒が混じる黄褐色土の単層である。

遺物は出土しなかった。

集石遺構 (第14・15図)

集石遺構は、調査区の中央やや南西寄りのD2グリッドで検出した。長径55cm、短径43cm、深さ24

cmの楕円形の掘形内に上面には被熱した13~20cm大の礫があり、その下からは備前焼の壺、水屋甕、建水、瓷器系陶器の壺の破片が幾層にも重なった状態で出土した。

43~45は備前焼である。43は壺の口縁部から肩部にかけての部分で、口縁部は外傾し、口縁端部を肥厚させて玉縁状としている。また、肩部には粘土紐の耳を貼り付けている。乗岡編年の中世5b期に比定される。44は水屋甕で、口縁部は短く直立し、口縁端部を外側に僅かにつまみ出している。乗岡編年の中世6a期に比定される。45は建水で、ほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は平滑に仕上げられ、外側へつまみ出されている。46~48は瓷器系陶器の壺で、46は肩部、47、48は底部である。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から16世紀前半~中頃と考えられる。

柱穴列1 (第5・16・17図)

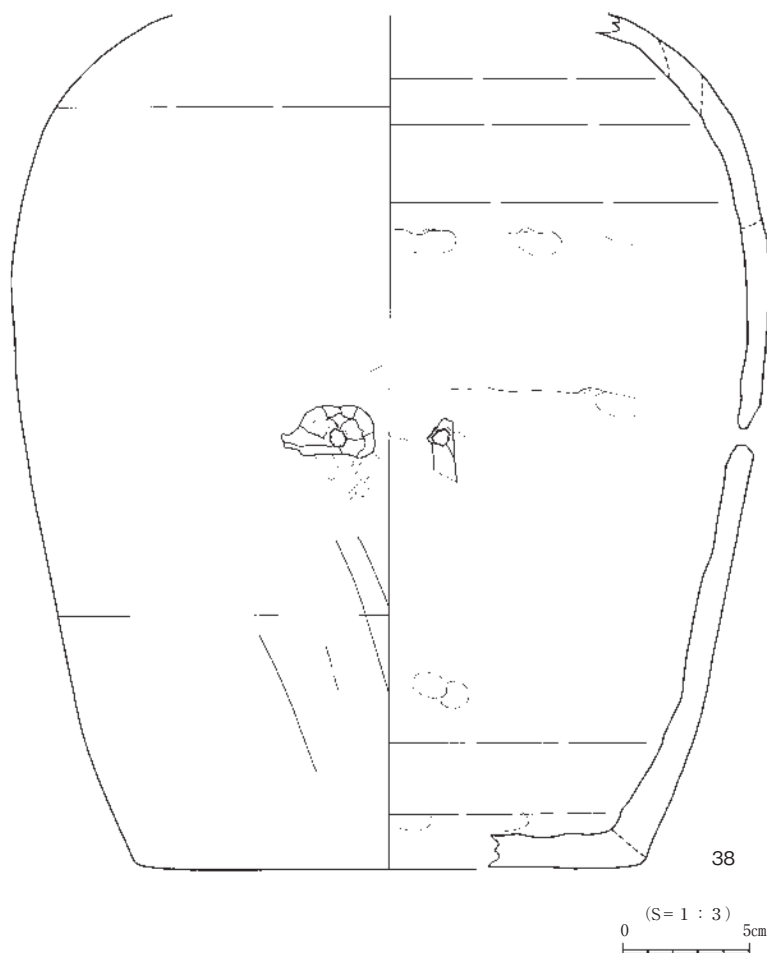
柱穴列1は、D4グリッドの北西側でP29、P18、P27の2間分(長さ3.8m)を検出した。柱間距離は、P29—P18間が1.6m、P18—P27間が1.9mで、主軸はN-62°-Eである。柱穴の埋土はいずれも灰茶色土の単層で、柱痕跡は認められなかったが、P27の北東側には柱の根固めとして備前焼の壺の破片が据えられていた。なお、各ピットの規模は第2表のピット計測表を参照されたい。

49~51はP27から出土したもので、いずれも備前焼の壺である。49は口縁部で、くの字形に大きく外傾し、口縁端部を外側に肥厚させて玉縁状としている。乗岡編年の中世6a期に比定される。50は肩部から胴部にかけての部分で、肩部には4条の沈線と波状文、胴部最大径部分には4条の沈線が巡る。51は胴部下半から底部にかけての部分である。

本遺構の帰属時期は、P27から出土した遺物から16世紀前半~中頃と考えられる。

柱穴列2 (第5・18図)

柱穴列2は、D4グリッドの北西側でP15、P13、P28の2間分(長さ4.5m)を検出した。柱間距離は、P15—P13間が2.0m、P13—P28間が1.9mで、主軸はN-49°-Eである。柱穴の埋土はいずれも灰



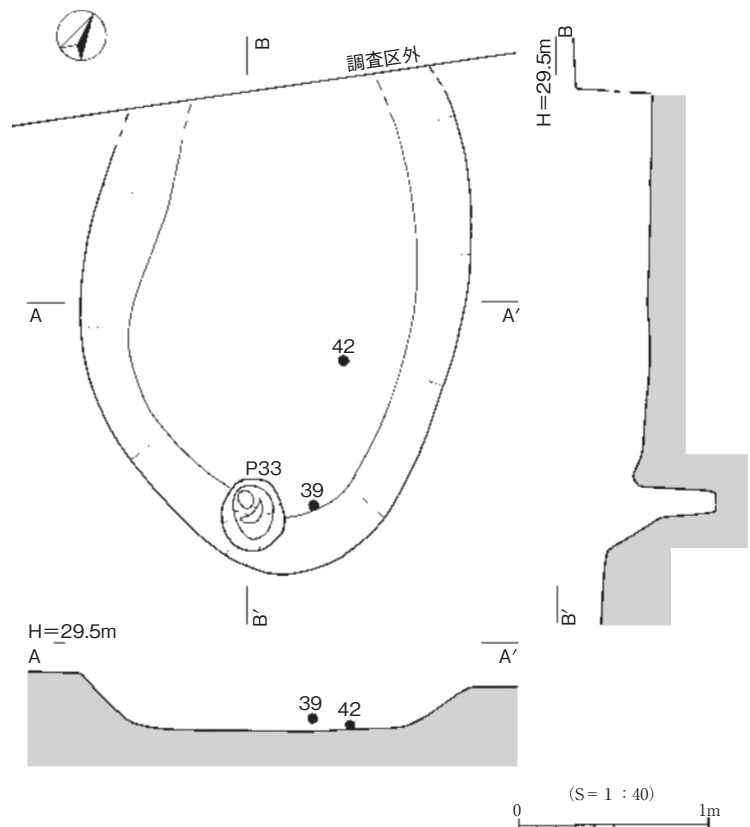
第11図 土坑1出土遺物

茶色土の単層で、柱痕跡は認められなかった。なお、各ピットの規模は第2表のピット計測表を参照されたい。

P15から青磁と陶器、P13から陶器片、P28から土師質土器の細片が出土した。このうち、P15から出土した遺物を3点図示する。

52は青磁の盤で、内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。また、高台内には砂が付着する。53、54は朝鮮半島産の陶器で、舟徳利形をした瓶の底部である。

本遺構の帰属時期は、P15から出土した遺物から16世紀前半頃と考えられる。



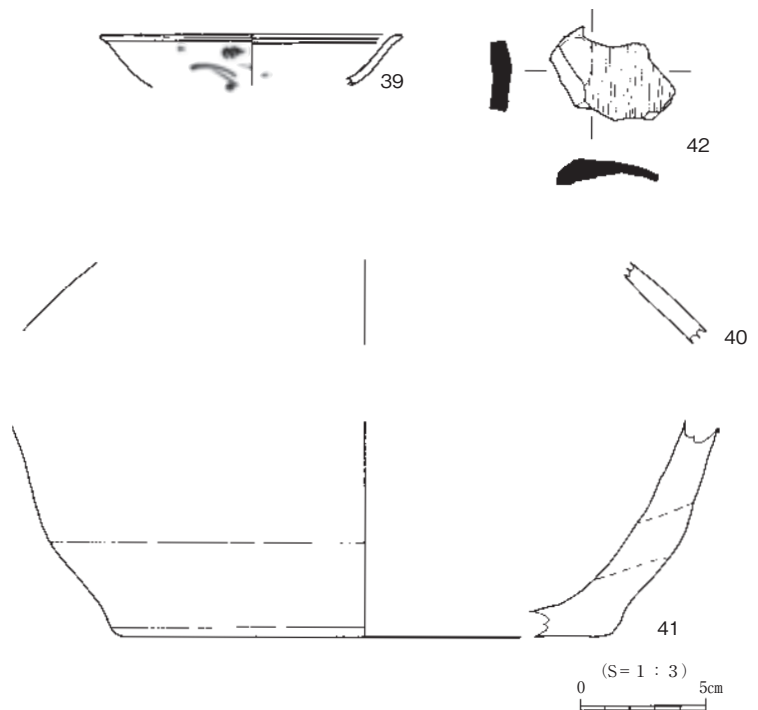
第12図 土坑2

柱穴列3 (第5・19図)

柱穴列3は、D2・D3グリッドの北西側でP36、P37、P30の2間分(長さ4.8m)を検出した。柱間距離は、P36—P37間が2.2m、P37—P30間が2.3mで、主軸はN-67°-Eである。柱穴の埋土はいずれも灰茶色土の単層で、柱痕跡は認められなかった。なお、各ピットの規模は第2表のピット計測表を参照されたい。

P36からは青磁、P30からは土師質土器の細片が出土した。このうち、P36から出土した遺物を1点図示する。

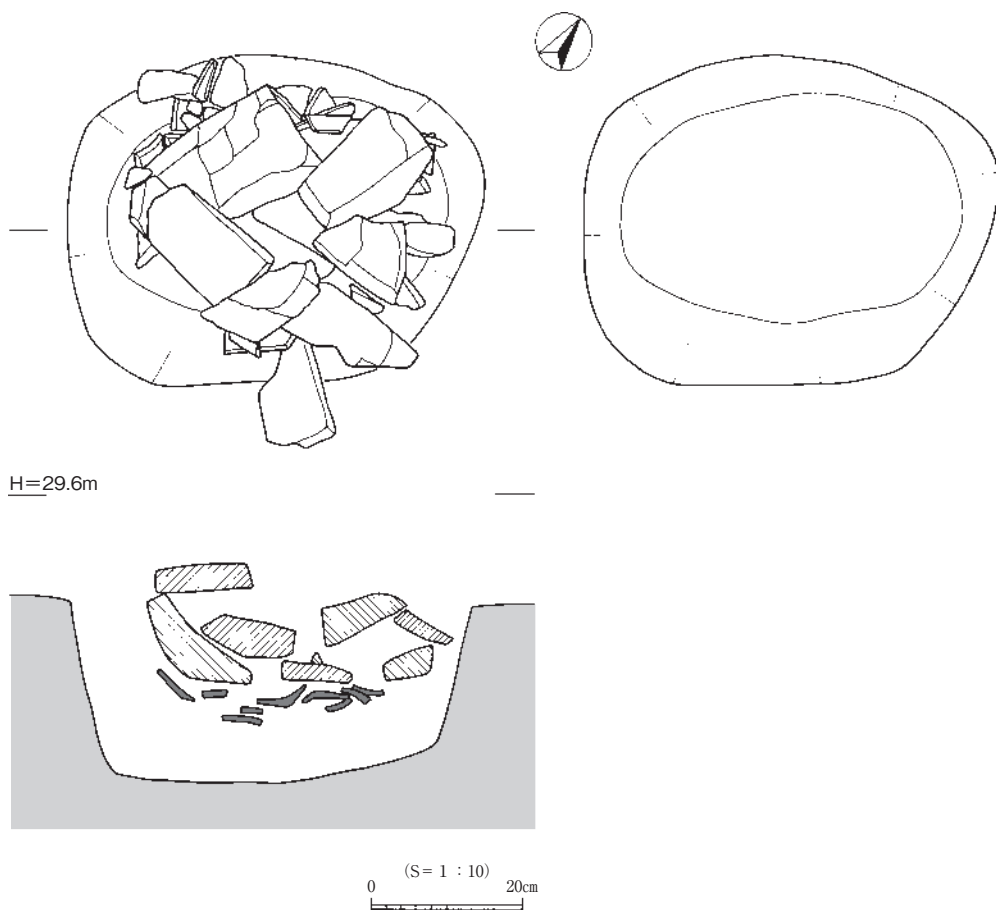
55は青磁で、上田分類の青磁碗E類の体部である。



第13図 土坑2出土遺物

柱穴列4 (第5図)

柱穴列4は、D3・D4グリッドの中央でP32、P33、P20、P21の



第14図 集石遺構

3間分（長さ7.7m）を検出した。柱間距離は、P32—P33間が2.3m、P33—P20間が2.6m、P20—P21間が2.3mで、主軸はN-52°-Eである。柱穴の埋土はいずれも灰茶色土の単層で、柱痕跡は認められなかった。なお、各ピットの規模は第2表のピット計測表を参照されたい。

いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

(3) III 期

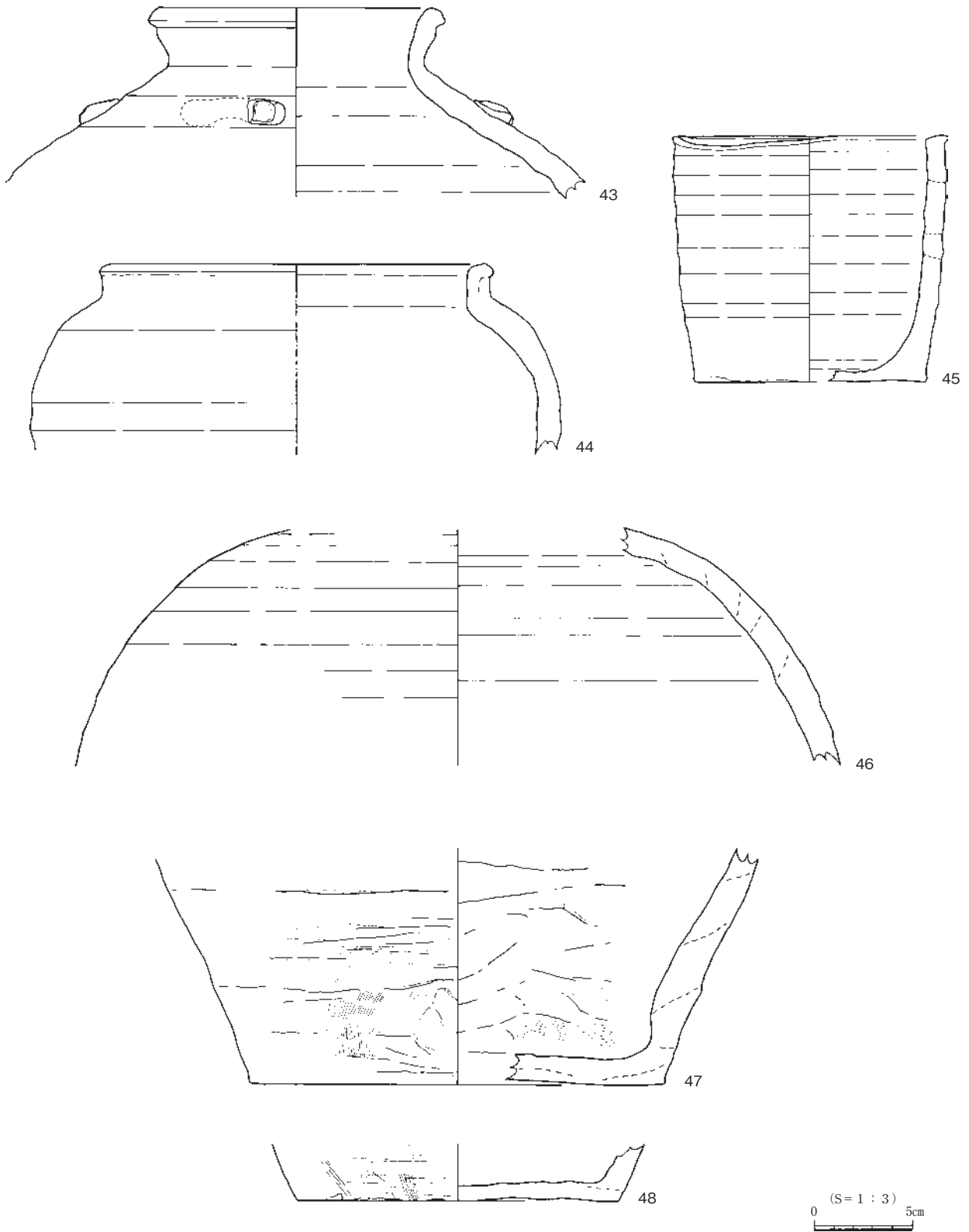
陶器・瓦溜り（第21・22図）

陶器・瓦溜りは、調査区の中央やや南西寄りのD2グリッドで検出した。標高29.6m付近に位置し、堀形は認められなかったが、55cm×50cmの範囲に陶器と瓦が分布しており、被熱した礫や炭化物も認められる。

遺物は、備前焼と軒棧瓦が出土した。このうち、4点を図示する。

56～58は備前焼である。56は壺で、口縁部が僅かに外傾し、口縁端部外面を僅かに肥厚させている。また、肩部には粘土紐の耳を貼り付けている。乗岡編年の中世6a期に比定される。57は甕で、口縁部は僅かに外傾し、口縁帯下角には強いヨコナデが施されている。肩部には3条の波状文と3条の沈線が巡り、外面には自然釉がかかっている。乗岡編年の中世5b期に比定される。58は底部で、57と同一個体である可能性がある。

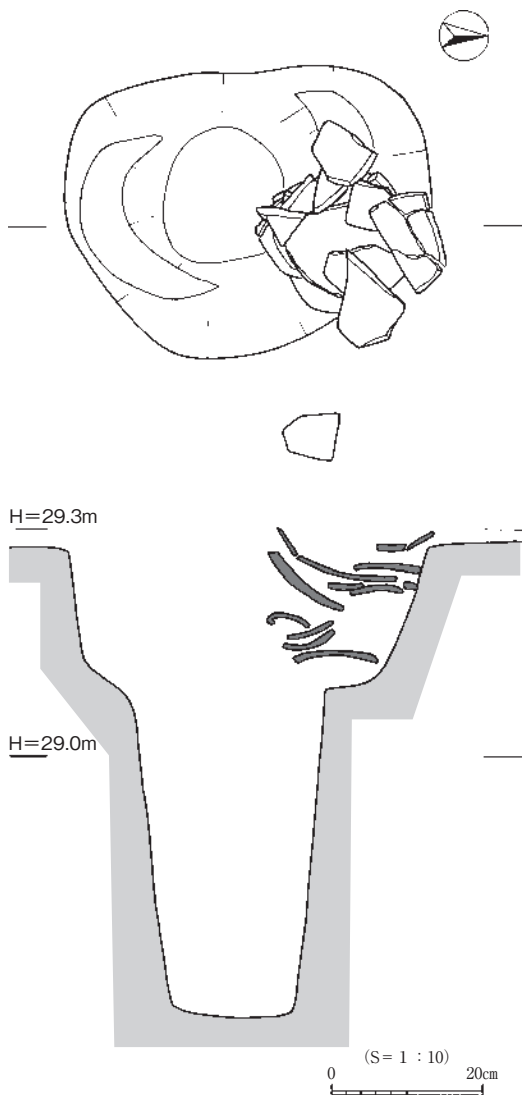
59は軒棧瓦で、八幡神社の屋根に葺かれていたものと考えられる。雀口は欠損し、瓦当部の左半部



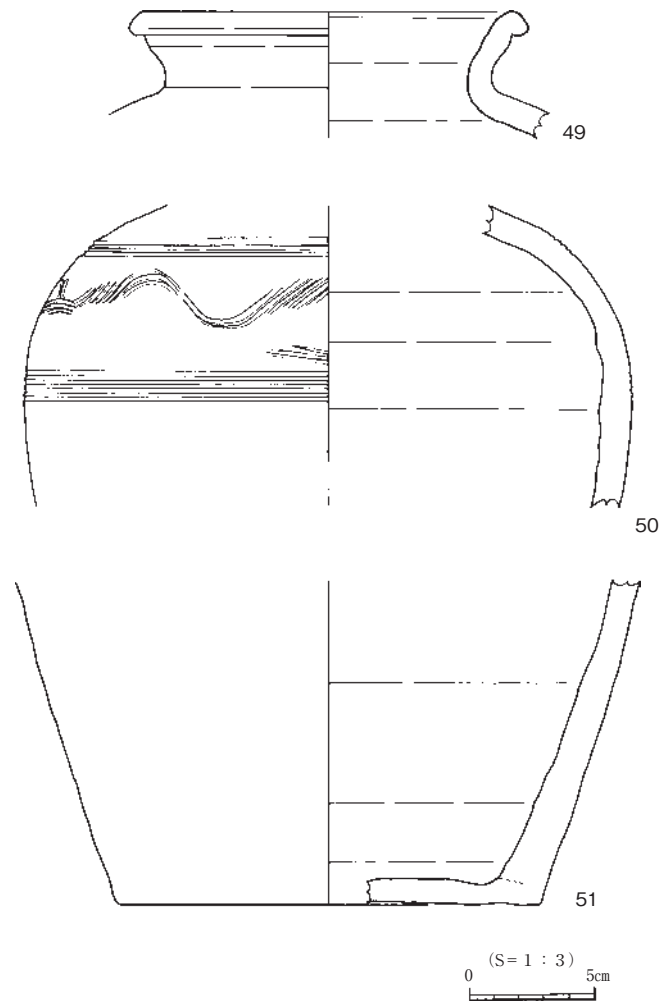
第15図 集石遺構出土遺物

が残存するのみである。

本遺構の帰属時期は、出土した軒棧瓦から近世以降と考えられ、放射性炭素年代測定（第4章 第1節参照）では、16世紀前半～18世紀末の結果を得た。



第16図 柱穴列1 (P27) 遺物出土状況図



第17図 柱穴列1 (P27) 出土遺物

2. 出丸の南西側斜面の調査

(1) 層序 (第6・24図)

腰郭は丘陵の南西側斜面の中腹に位置し、畑地として利用されていたところで、ほとんど改変を受けていない。

層序(第24図 T1)は、現地表面から表土(1層、層厚:10~25cm)、腰郭2の埋土である淡褐灰色土(2層、層厚:10~20cm)となっており、調査区の北東側では、1層及び2層直下が軟岩質の地山となっている。調査区の中央北東寄りから南西側にかけては、地山を掘り込んで古い時期の腰郭1が構築されているが、新しい時期の腰郭2を拡張、造成するにあたって、古い時期の腰郭1を埋め立てている。埋め立て造成土は硬く締まっており、版築状となっている。

腰郭の上下に位置する切岸には各1ヶ所のトレンチを設定して層序を確認した。

腰郭よりも上部に位置する切岸(第6図 T13)は、上部については地山まで掘り下げることができなかったが、現地表面から表土(1層、層厚:10~20cm)、地山粒を含む黄赤褐色土(2層、層厚:20~40cm)、黒色土と地山ブロックを含む黒褐色土(3層、層厚:15cm)となっており、中央部では

現地表面から表土（1層、層厚：15～20cm）、地山粒を含む黄赤褐色土（2層、層厚：15～30cm）、褐色土と地山粒を含む暗褐色土（4層、層厚：15～20cm）、軟岩質の地山となっている。2～4層は頂部の新しい時期の郭の拡張、造成に伴う埋め立て土と考えられる。下部では地山が急に落ち込んでおり、表土直下が軟岩質の地山となっている。

腰郭よりも下部に位置する切岸（第24図 T1）は、上部は現地表面から表土（1層、層厚：10～20cm）、暗褐色土（8層、層厚：15～40cm）、淡灰褐色土（9層、層厚：15cm）、軟岩質の地山となっているが、下部は表土直下が軟岩質の地山となっている。

(2) I 期

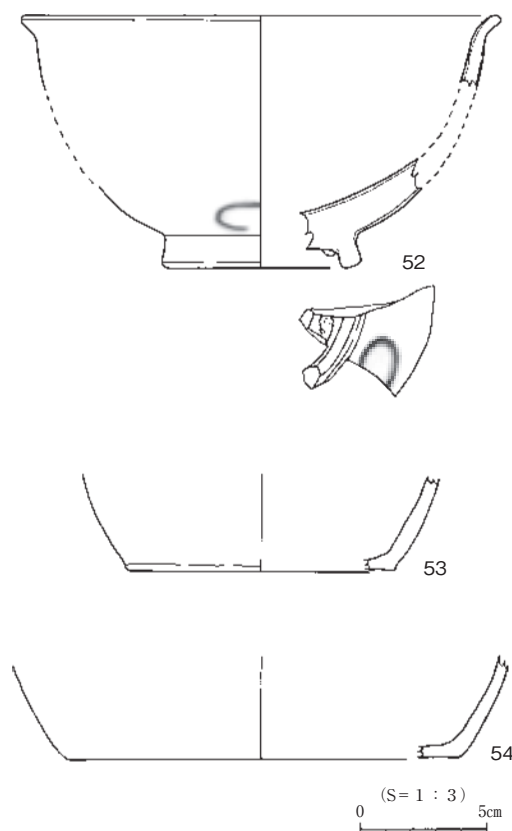
腰郭1（第23図）

腰郭1は、丘陵の南西側斜面の標高19.0～19.4mに位置する。工事掘削傾斜保全のため、トレンチで確認した。腰郭1は地山を掘り込んで構築しており、平坦面は地山を削り出し、整地土は認められない。北西側は調査区外へ広がるが、平面形態は三日月状を呈すると考えられる。規模は検出した範囲で長さ20.1m、最大幅7.9m、丘陵裾部の畑地との比高差7m、頂部の腰郭3との比高差9mを測る。

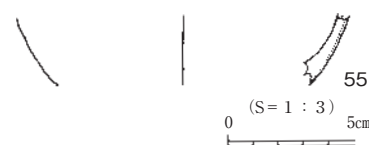
T1拡張区とT2では壁際に幅20～40cm、深さ10cmの排水用と考えられる溝が認められ、さらにT2の溝の南側の肩には幅15～20cm、高さ10cmの土手が築かれている。また、調査区の北西側には地山を掘り残して構築した土手状遺構が南西方向へのびる。腰郭1の中央やや北西寄りから東側にかけては空堀1が湾曲してのびる。さらに腰郭1の東側には障壁を設置したと考えられる遺構が3ヶ所ある。

土手状遺構（第25図）

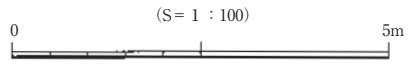
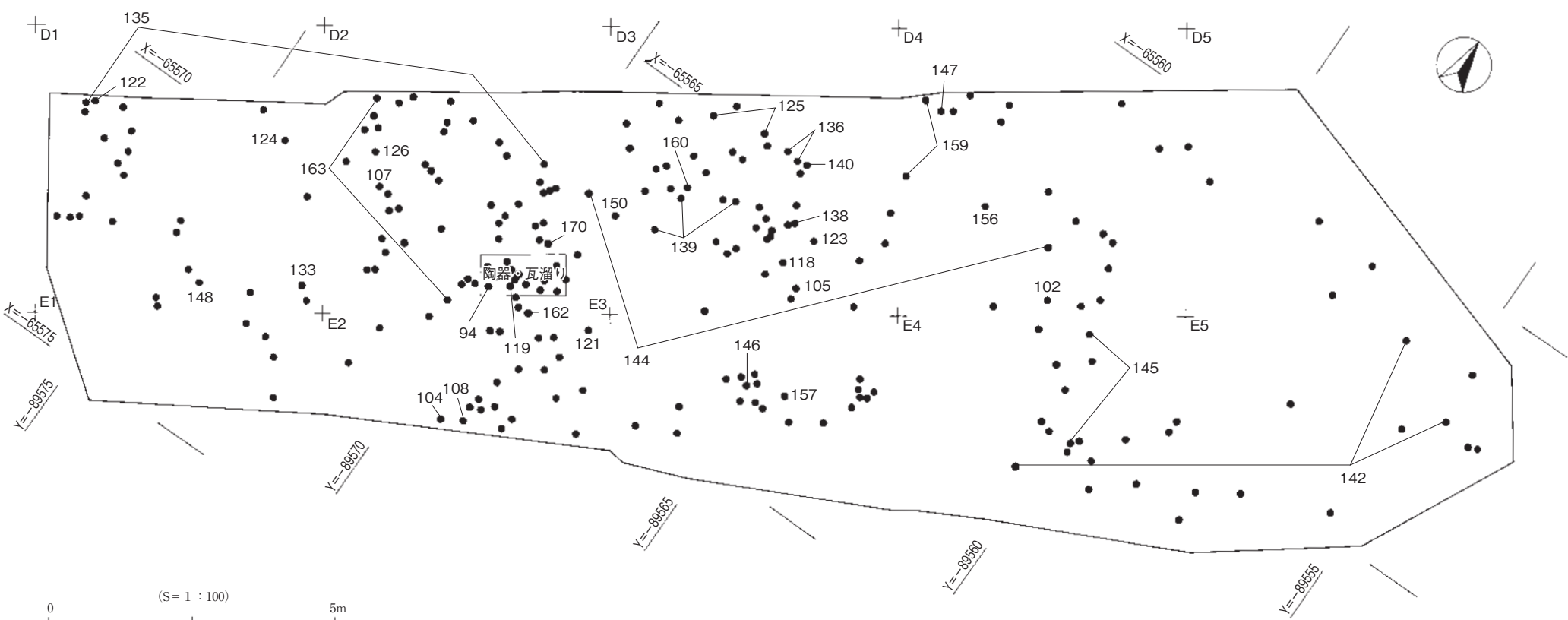
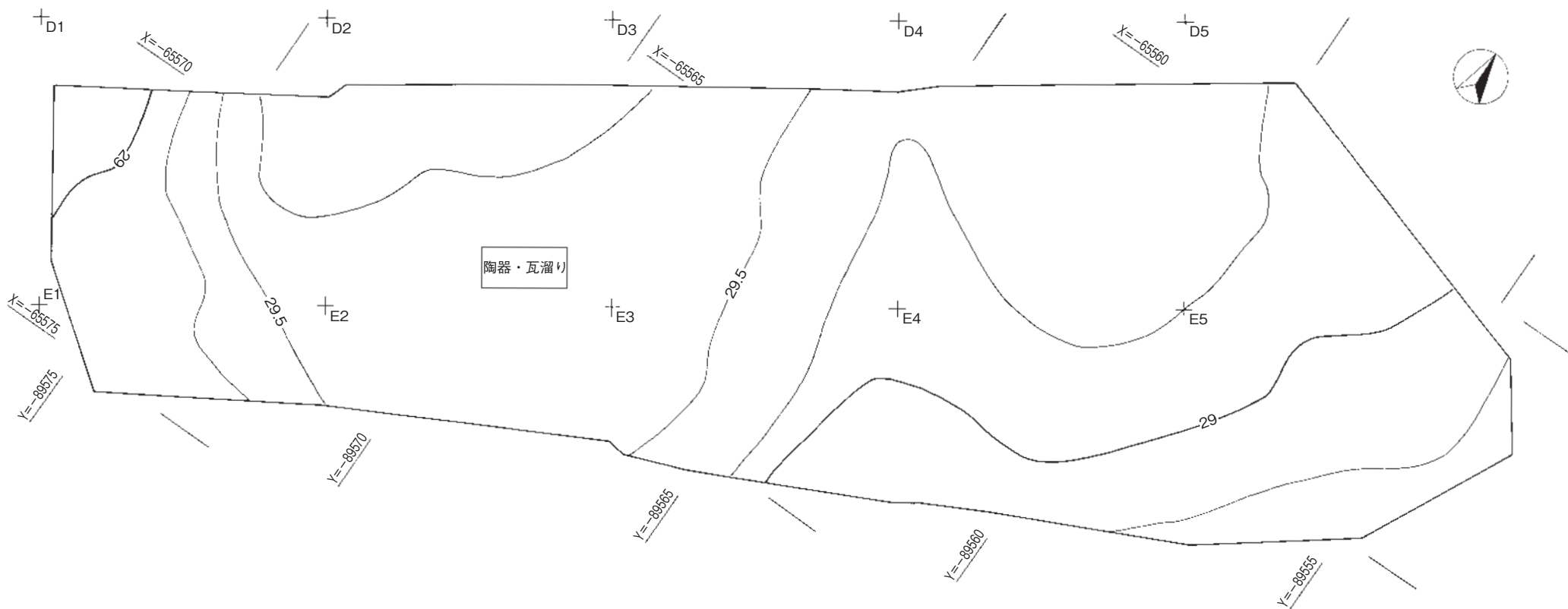
土手状遺構は、調査区北西側のT1拡張区で検出した。南東側は南北方向にのびる断面V字状の溝を掘り込み、北西側は地山を掘り込むことによって、地山を掘り残して土手状遺構を構築している。北東から南西方向へのび、検出した長さ4.1m、上部幅1.1～1.4m、基底部幅1.3～2.5m、高さは最大で1.0mを測る。北東端から2.6mは平坦となっているが、それよりも南西側は下降傾斜する傾斜面となっており、調査区の壁際にはステップ状の平坦面が認められる。このことから傾斜面は階段状になっていた可能性がある。また、平坦面のほぼ中央で一辺52cm、深さ7cmの方形を呈する穴を検出し



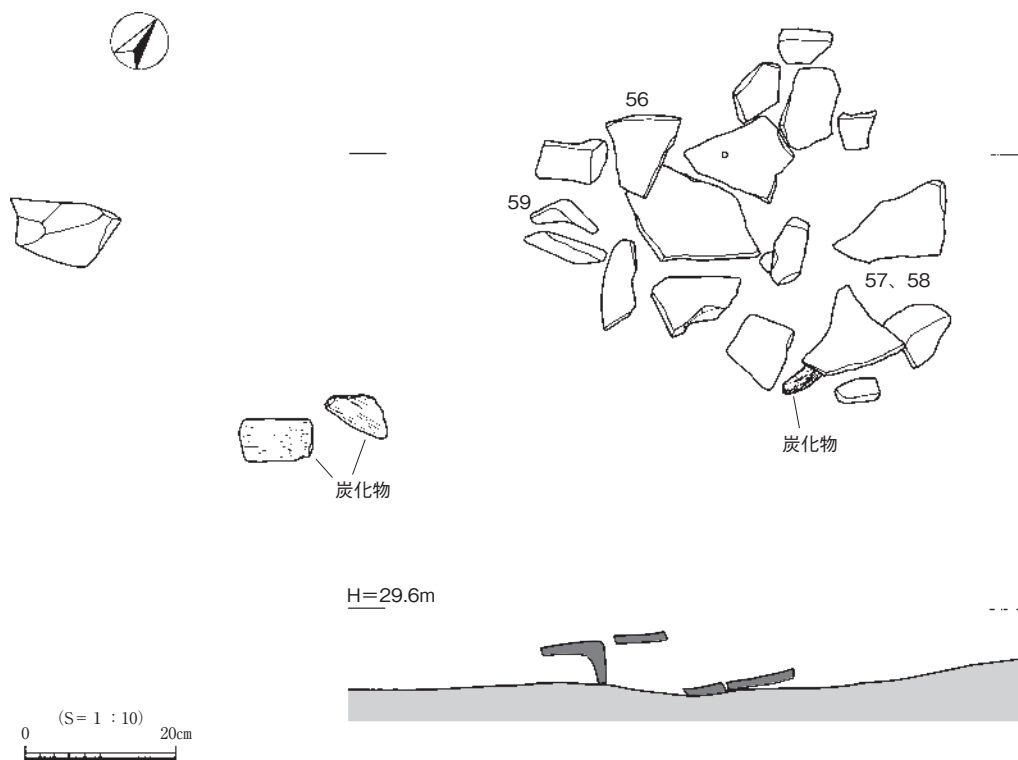
第18図 柱穴列2（P15）出土遺物



第19図 柱穴列3（P36）出土遺物



第20図 頂部平坦面 第1遺構面遺構分布図及び出土遺物分布図



第21図 陶器・瓦溜り

た。何らかの構造物を設置したと推察されるが、性格については不明である。

溝状遺構（第25図）

溝状遺構は、調査区北西側のT1拡張区で検出した。ハ字状に広がりながら北から南方向へのびる。断面形態はV字状を呈し、検出した長さ3.9m、最大幅2.9m、深さは最大で0.7mを測る。

遺物は出土しなかった。

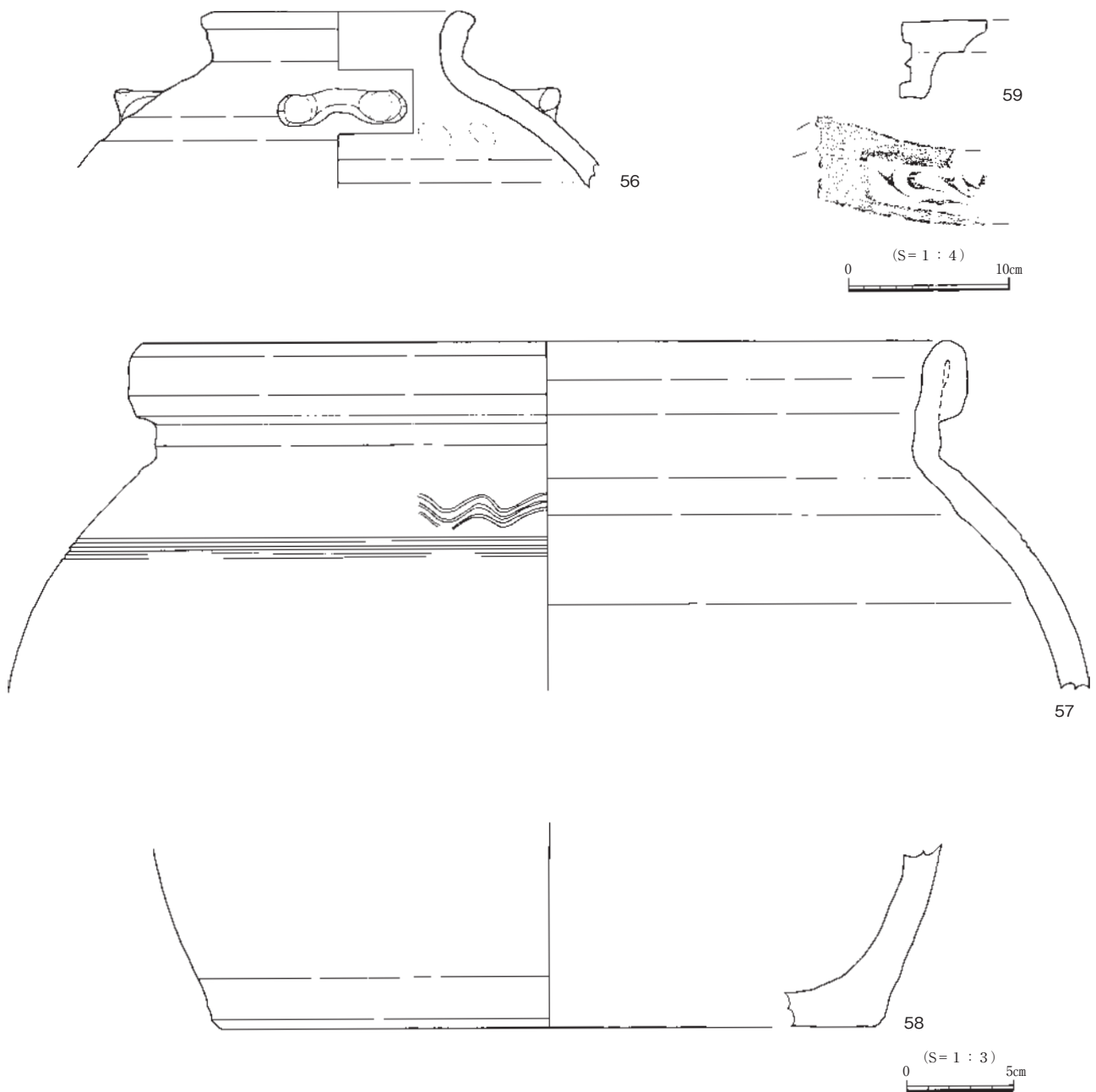
柵列1（第25・26図）

柵列1は、調査区北西側のT1拡張区で検出した。腰郭1の壁際にある排水用の溝に接するように位置し、P6、P5、P4の2間分を検出したが、さらに南東側に1間、北西側に数間のびる可能性もある。柱間距離は、P6—P5間が1.9m、P5—P4間が1.6mで、主軸はN-46°-Wである。柱穴の埋土はいずれも灰褐色土の単層で、柱痕跡は認められなかった。なお、各ピットの規模は第3表のピット計測表を参照されたい。

P4からは土師質土器、陶器、砥石が出土した。80は細粒花崗岩製の仕上砥の砥石で、長方形に加工した素材の表裏面及び左右両側面の4面を使用している。また、左側面には鋭利な刃物による使用痕が認められる。

空堀1（第23図）

空堀1は調査区の中央やや北西寄りから東側にかけて、腰郭1の壁に沿うように湾曲してのびる。北東側の端については、T1では確認されていないことから、T1とT6との間で完結すると考えられ



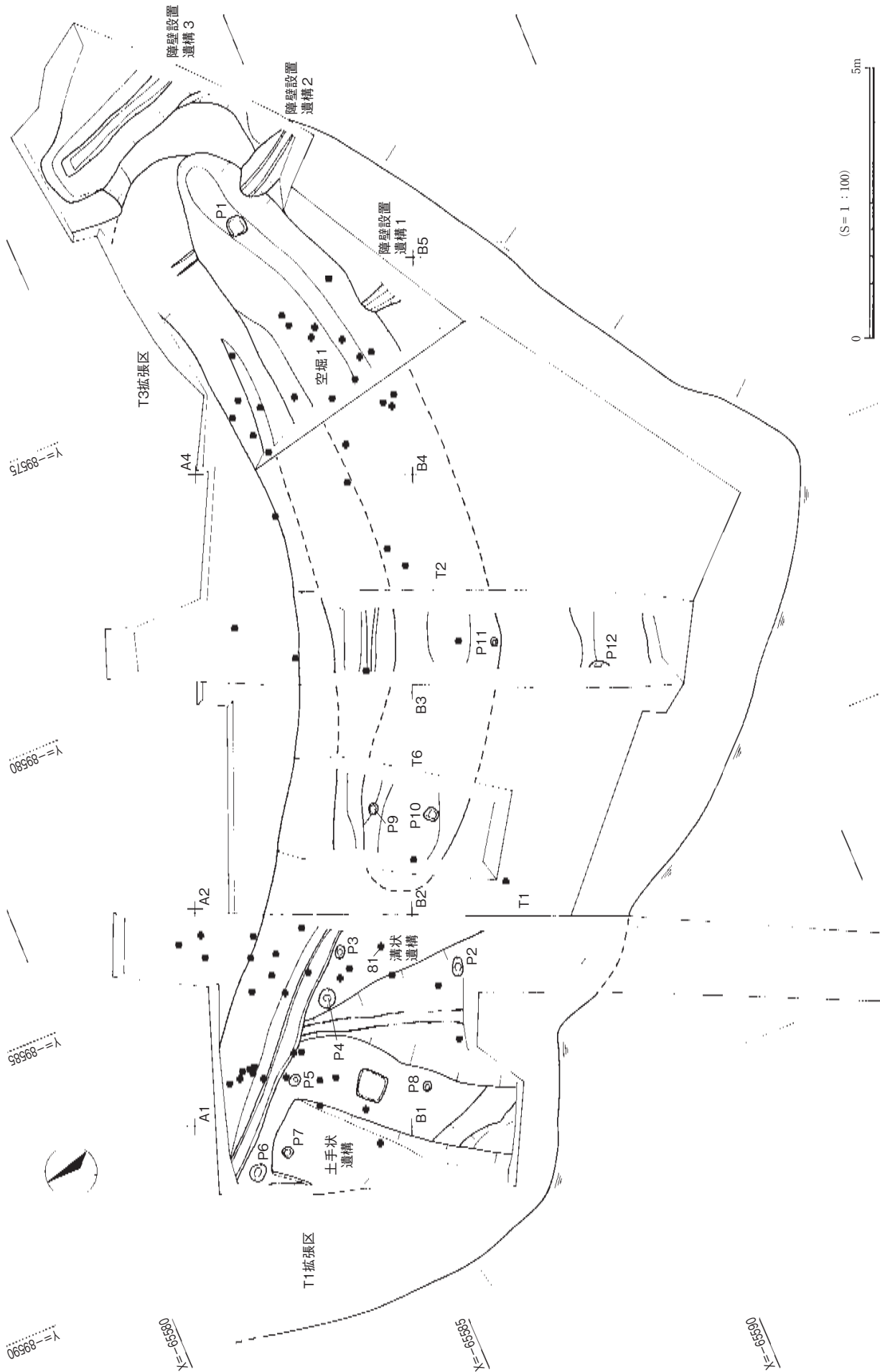
第22図 陶器・瓦溜り出土遺物

る。検出した長さ12.5m、幅1.7~2.0m、深さは最大で0.6mを測る。断面形態はU字状を呈し、埋土は締まりのない淡褐色土の単層である。底面の標高は、T6では19.2m、T2では18.8m、T3の東端では18.4mとなっており、北西から東へ下降している。また、東側では空堀1と直交するようにその肩部に障壁設置遺構がある。

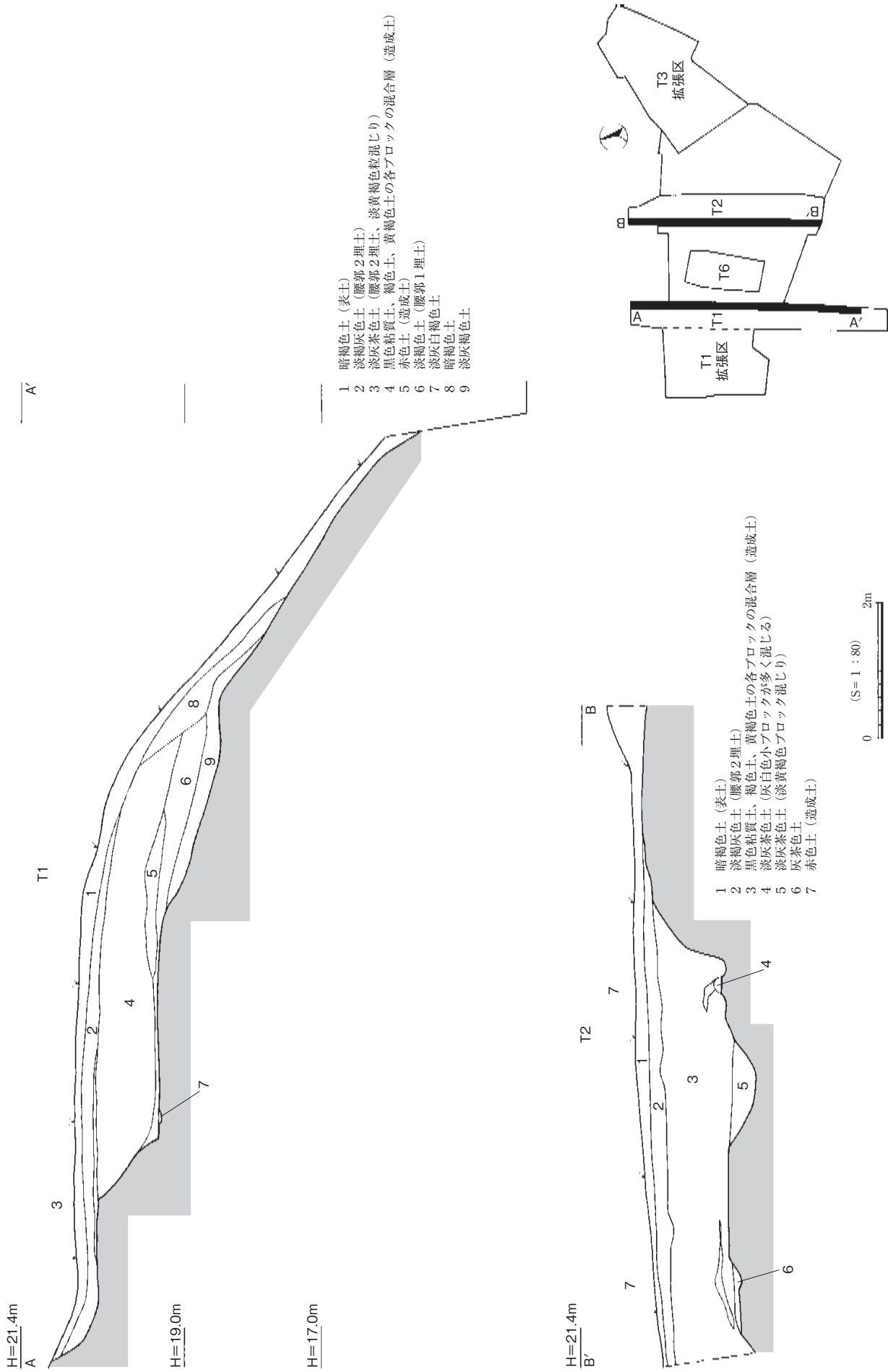
遺物は、T6で検出した空堀1から土師質土器の細片が1点出土したのみである。

障壁設置遺構1（第27図）

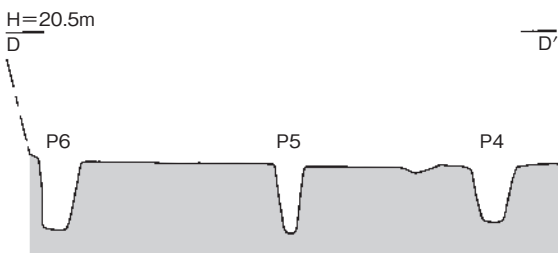
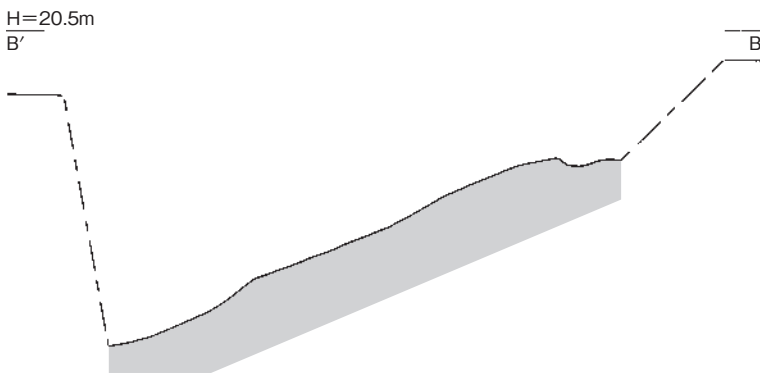
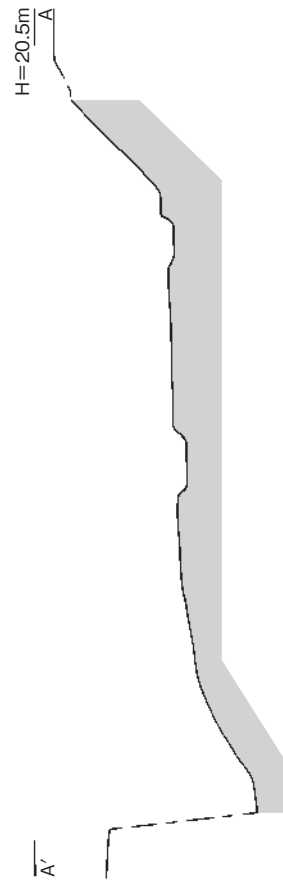
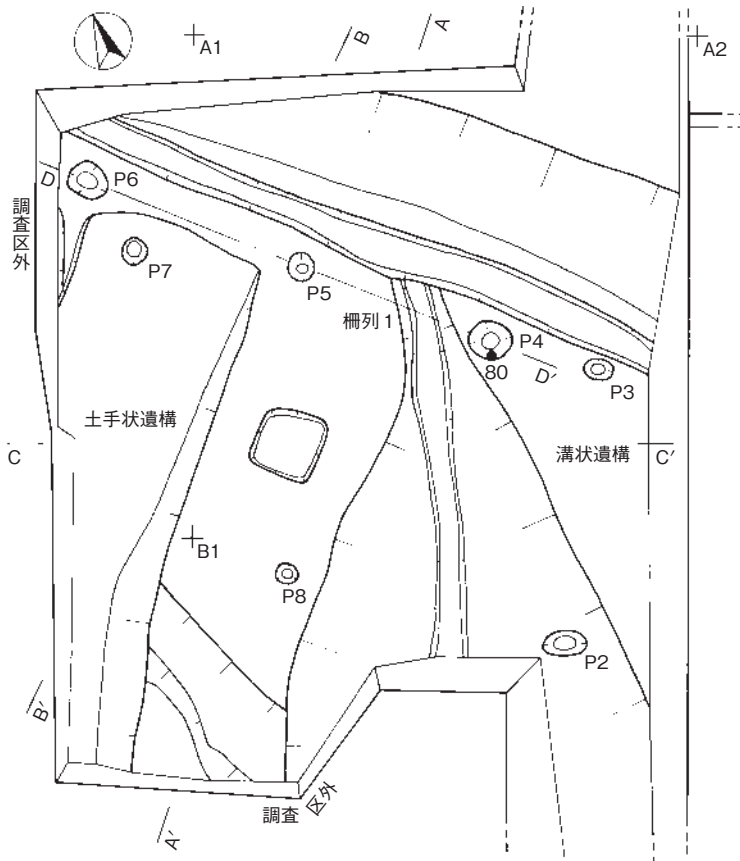
障壁設置遺構1は、調査区の東側のT3拡張区で検出した。A4グリッドの空堀1の南側の肩部に位置し、空堀1とは直交し、南北方向にのびる。検出した長さ54cm、上部幅30~40cm、底面幅10~18



第23図 腰郭1

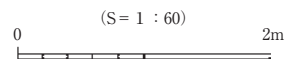


第24図 南西側斜面腰郭土層図



第3表 腰郭1ピット計測表(単位: cm)

P	長径	短径	深さ
1	41	39	34
2	35	26	45
3	23	19	32
4	36	31	44
5	26	19	54
6	34	29	52
7	23	20	59
8	20	19	27
9	21	17	64
10	25	25	41
11	16	14	28
12	(40)	(6)	34



第25図 土手状遺構・溝状遺構・柵列1

cm、深さ15cmを測り、断面形態は方形を呈する。断面形態と規模から、板材などを障壁状に設置したと考えられる。

遺物は出土しなかった。

障壁設置遺構 2 (第27図)

障壁設置遺構 2 は、調査区の東側のT3拡張区で検出した。-A4グリッドの空堀 1 の北西側の肩部とA5グリッドの空堀 1 の南東側の肩部に位置し、空堀 1 とは直交し、中央

は空堀 1 により途切れているが、北西—南東方向にのびる。検出した長さ3.3m、上部幅19~22cm、底面幅12~18cm、深さ20cmを測り、断面形態は方形を呈する。南東側では堀形が2段掘りとなっており、堀形の上段部分の幅は70cmを測る。また、P1は長径41cm、短径39cm、深さ34cmを測り、障壁を支持するための支柱を据えたものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

障壁設置遺構 3 (第27図)

障壁設置遺構 3 は、調査区の東側のT3拡張区で検出した。-A5グリッドの腰郭 1 の東端に位置し、北西—南東方向にのびる。堀形は2段掘りとなっており、検出した長さ3.0m、幅1.3m、深さ0.4mを測る隅丸長方形の堀形の底面に、検出した長さ2.6m、上部幅28~38cm、底面幅14~18cm、深さ20cmを測る断面方形の掘り込みがある。

遺物は出土しなかった。

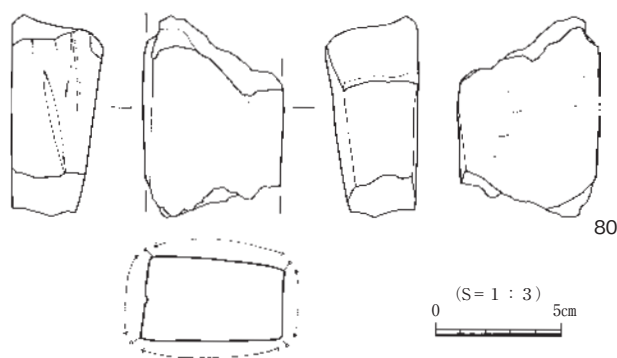
(2) II 期

腰郭 2 (第28~31図)

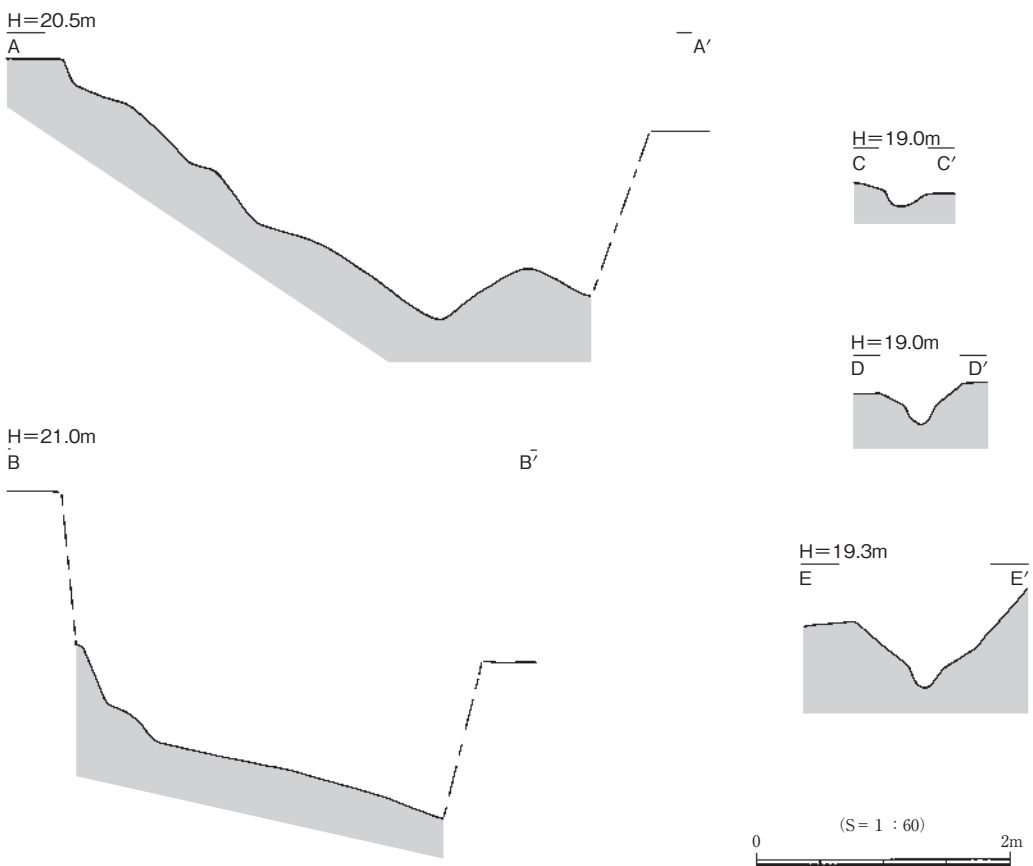
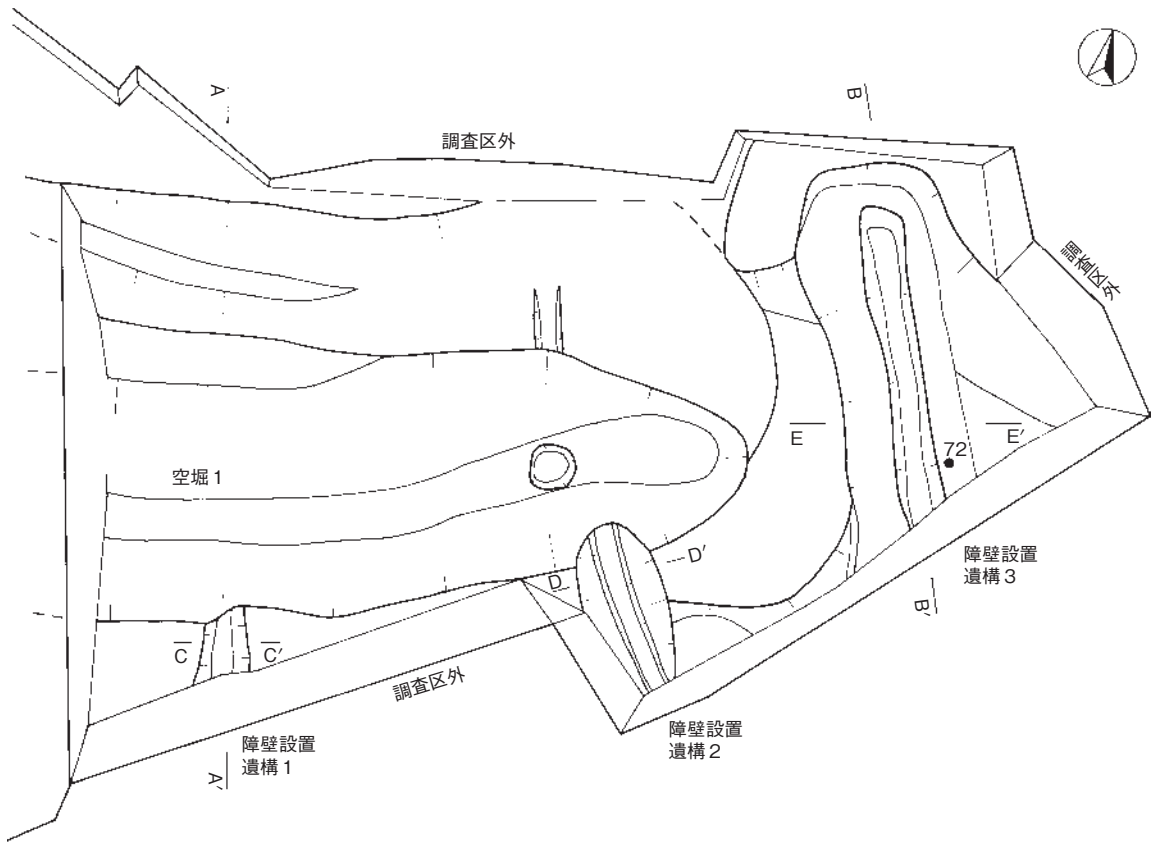
腰郭 2 は、丘陵の南西側斜面の標高19.5~20.5mに位置する。I期の腰郭 1 を埋め立てて、造成するとともに、腰郭 1 の北東側の斜面裾部を幅1.4~3.0m削平して平坦面を構築している。腰郭 1 を埋め立てて、造成するにあたっては、まず、腰郭 1 の平坦面の上に頂部平坦面の北西側にみられる赤色土を敷きならし、さらにその上に中央付近から北西側にかけては黒色粘質土、褐色土、黄褐色土のブロックが混じる混合土、東側では黄褐色ブロックが多く混じる灰茶色土で埋め立てている。造成土は非常に硬く締まっており、版築状となっている。

北西側は調査区外へ広がるが、平面形態は半月状を呈すると考えられ、規模は検出した範囲で長さ18.7m、最大幅11.0m、丘陵裾部の畑地との比高差8m、頂部平坦面の郭 1 との比高差10mを測る。埋土は淡褐灰色土の単層である。平坦面は調査区中央から南へ緩やかに傾斜し、平坦面では遺構は検出されなかった。

第30図の60~79は、腰郭 2 の拡張に伴う埋め立て造成土から出土したものである。60~64は土師器である。60は複合口縁を有する甕で、口縁部は外傾し、口縁下端部の突出は鈍い。また、口縁部外面には煤が付着している。61、62は低脚坏、63、64は器台である。



第26図 柵列 1 (P4) 出土遺物



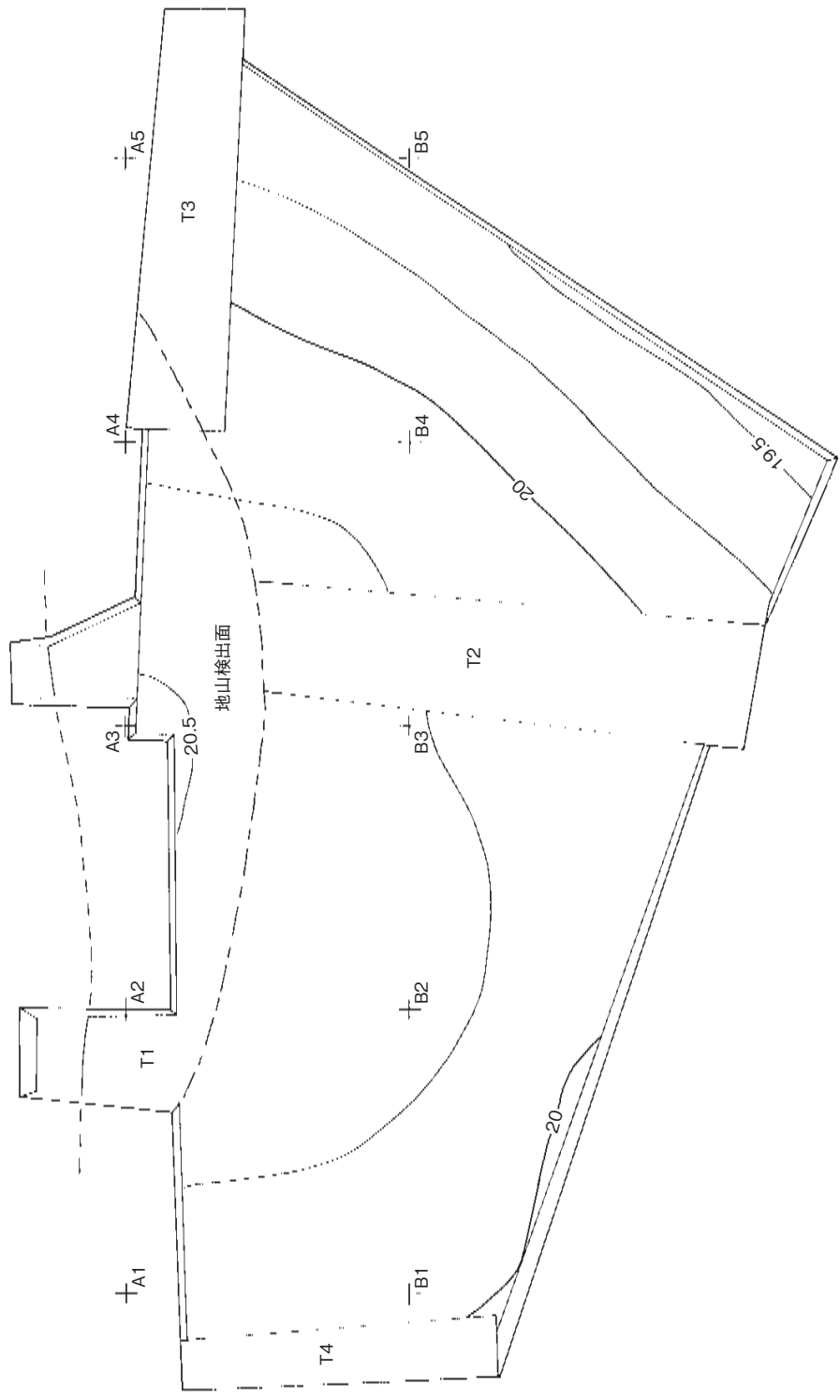
第27図 障壁設置遺構1～3

Y=-89590

Y=-89585

Y=-89580

Y=-89575



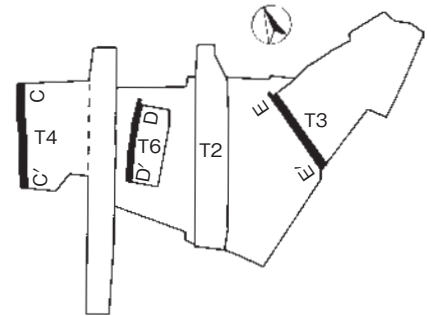
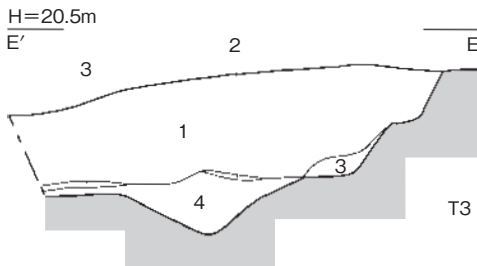
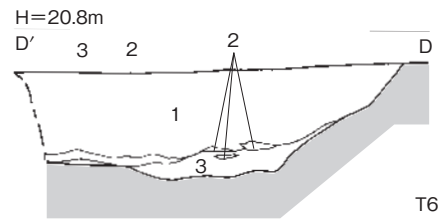
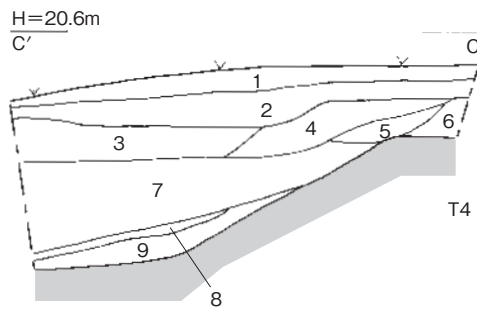
(S=1:100)
0 5m

063639-K

063639-K

063639-K

第28図 腰郭2



(S = 1 : 80)
0 2m

C-C'

- 1 暗褐色土 (表土)
- 2 褐灰色土 (地山礫が多く混じる、造成土)
- 3 灰茶色土 (黄色粒混じり、造成土)
- 4 明褐色土 (地山ブロック混じり、造成土)
- 5 淡灰褐色土 (黄色粒が多く混じる、造成土)
- 6 黄褐色土 (造成土)
- 7 淡灰褐色土 (黄色粒、地山ブロック混じり、造成土)
- 8 黒茶色土 (褐色小ブロック混じり、造成土)
- 9 灰茶色土

D-D'

- 1 黒色粘質土、褐色土、黄褐色土の各ブロックの混合層 (造成土)
- 2 赤色土 (造成土)
- 3 淡褐色土 (空堀1埋土、締めりなし)

E-E'

- 1 灰茶色土 (黄褐色ブロックが多く混じる、造成土)
- 2 赤色土 (造成土)
- 3 淡褐灰色土 (黄褐色ブロック混じり、造成土)
- 4 淡褐色土 (空堀1埋土)

第29図 腰郭2土層図

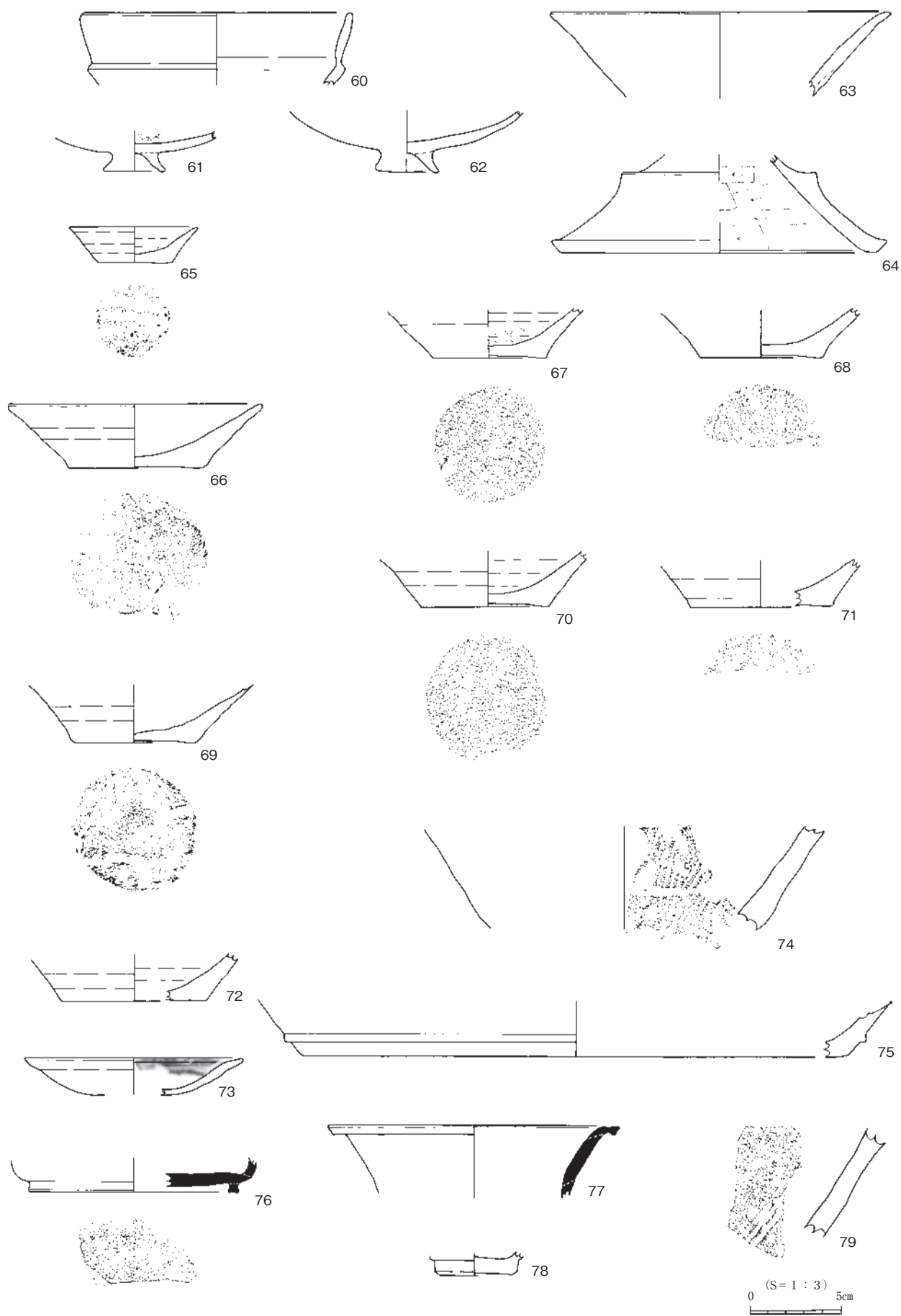
65～75は土師質土器である。65～72は坏身で、いずれも外傾しながら立ち上がる。65と72の底部外面は摩滅のため調整は不明であるが、66～71の底部外面には静止糸切りが施されている。73は京都系の皿で、口縁端部が僅かに外反する。また、内面には煤が付着していることから、灯明皿として使用されたと考えられる。74は播鉢の胴部下半部で、内面には6条1単位の播り目がある。75は火鉢で、外面には1条の突帯が巡る。

76、77は須恵器である。76は高台付きの坏身で、底部外面には回転糸切りが施されている。77は壺の口縁部で、口縁端部は外反し、さらに上方へつまみ上げている。

78は中国産の天目茶碗の底部である。79は備前焼の播鉢の胴部で、内面には4条1単位の播り目がある。

第31図の81、82は腰郭2の埋土である淡褐灰色土層から出土したものである。

81は朝鮮半島産の陶器で、徳利の口縁部である。82は鉄小札で、残存札足(長さ)3.5cm、残存札幅(横幅)4.1cm、厚さ1.0mmを測る。横に1.1cm間隔で直径7mmの孔が3つ穿たれている。



第30图 腰郭2造成土出土遺物

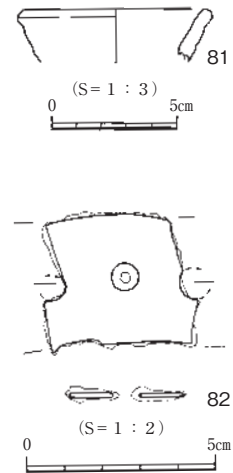
第4節 遺構外出土遺物

1. 古代以前の遺物（第32図）

83～87は土師器である。83、84は甕の口縁部で、83は複合口縁を有し、口縁端部が僅かに外反し、口縁下端部の突出は鈍い。84は口縁部が外傾するもので、口縁端部は内側に僅かに肥厚する。85、86は高坏である。87は移動式竈の底部分で、南西側斜面の腰郭の北西にある住宅の裏側の斜面から表採されたものである。

88～96は須恵器である。88～91は坏蓋で、南東側斜面の工事中に斜面の中腹付近で発見されたものである。いずれも天井部と口縁部との境界に2条の沈線が巡り、口縁端部は丸くおさまり、口縁部内面には1条の沈線が巡る。92は横瓶の胴部で、工事中に発見されたものである。外面には平行叩きとカキ目調整が施され、内面には同心円状の当て具痕がある。93、94は坏身である。93は受け部を有するもので、口縁部の立ち上がりは短い。94は底部で、外面はヘラ起こし後ケズリ調整を行っている。また、外面には少量の煤が付着している。95、96は甕の胴部で、いずれも外面には平行叩きが施され、内面には同心円状の当て具痕がある。

97は安山岩製の石鋏の基部である。



第31図 腰郭2出土遺物

2. 中世の遺物（第33～35図）

98～101は青磁で、98、99は碗である。98は上田分類の青磁碗D類で、口縁端部が外反する。99は上田分類の青磁碗E類である。100は盤、101は香炉である。

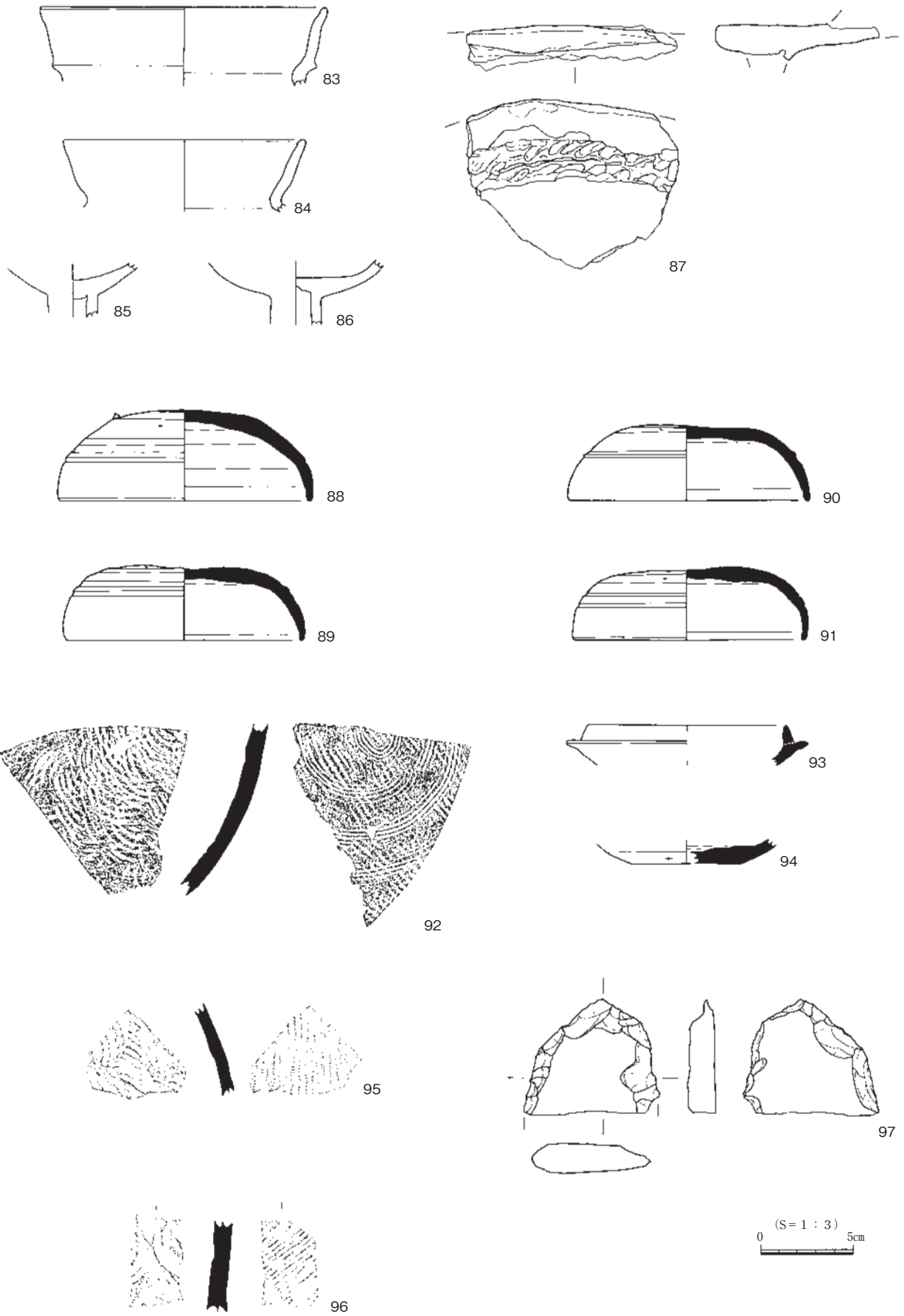
102は白磁である。森田分類D群の皿で、口縁部は内湾する。

103～107は青花である。103は小野分類の染付碗C群で、外面には唐草文と四重圏線が施文され、見込みにも施文があるが意匠は不明である。104、105は皿である。104は小野分類の染付皿B1群で、外面には牡丹唐草文と二重圏線、内面には二重圏線が施文されている。105は分類不明の皿で、見込みには唐草文が施文されている。106は小坏で、底部は碁笥底となっており、見込みには環状に釉薬が剥ぎ取られ、その部分に砂が付着している。外面には放射状に線彫りが施されている。107は鉢か。外面には三重圏線が施文され、その上には円形浮文がある。

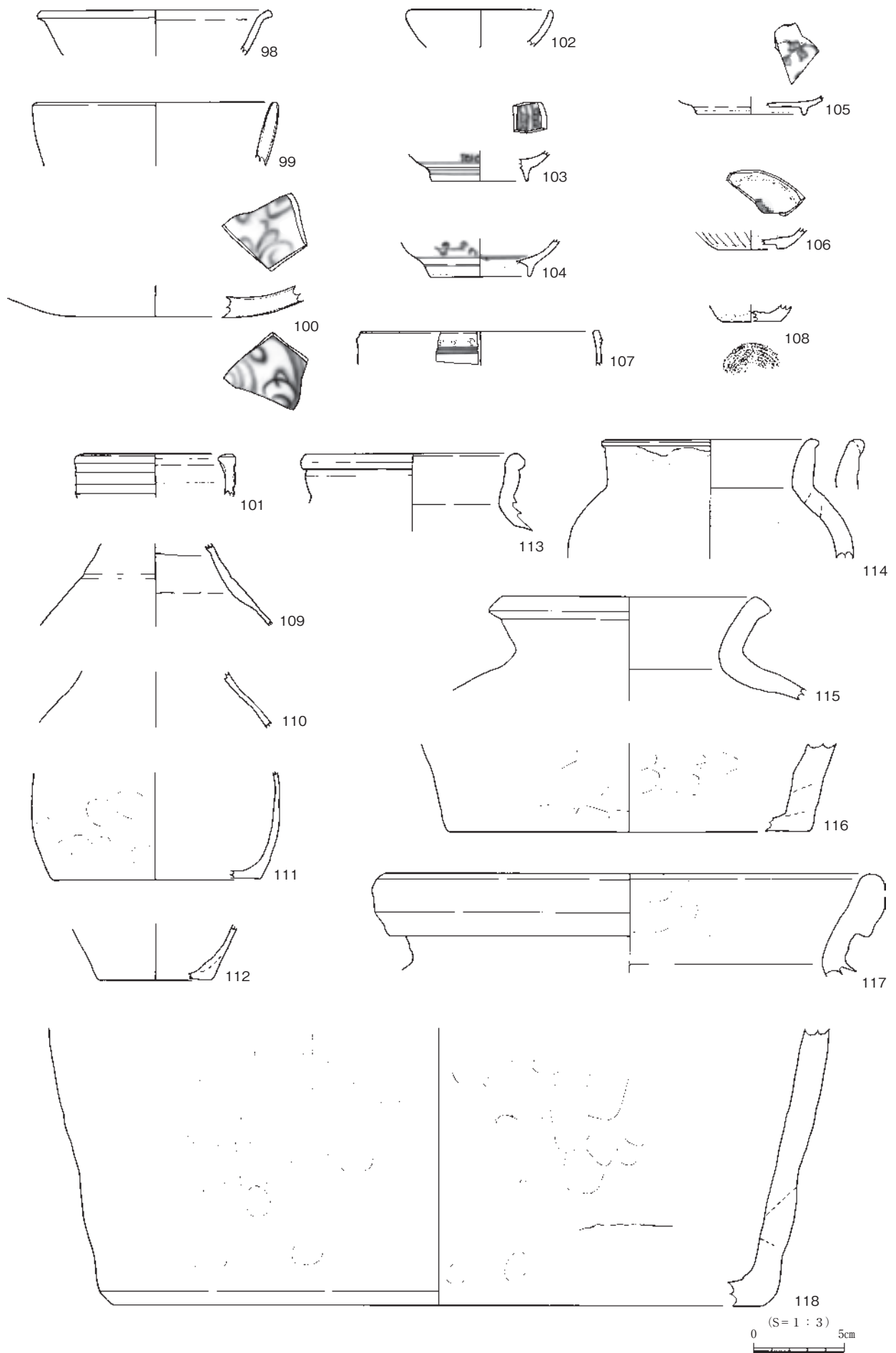
108は茶入と考えられる底部で、外面には回転糸切りが施されている。産地は中国か。

109～112は朝鮮半島産の陶器で、舟徳利形をした瓶である。

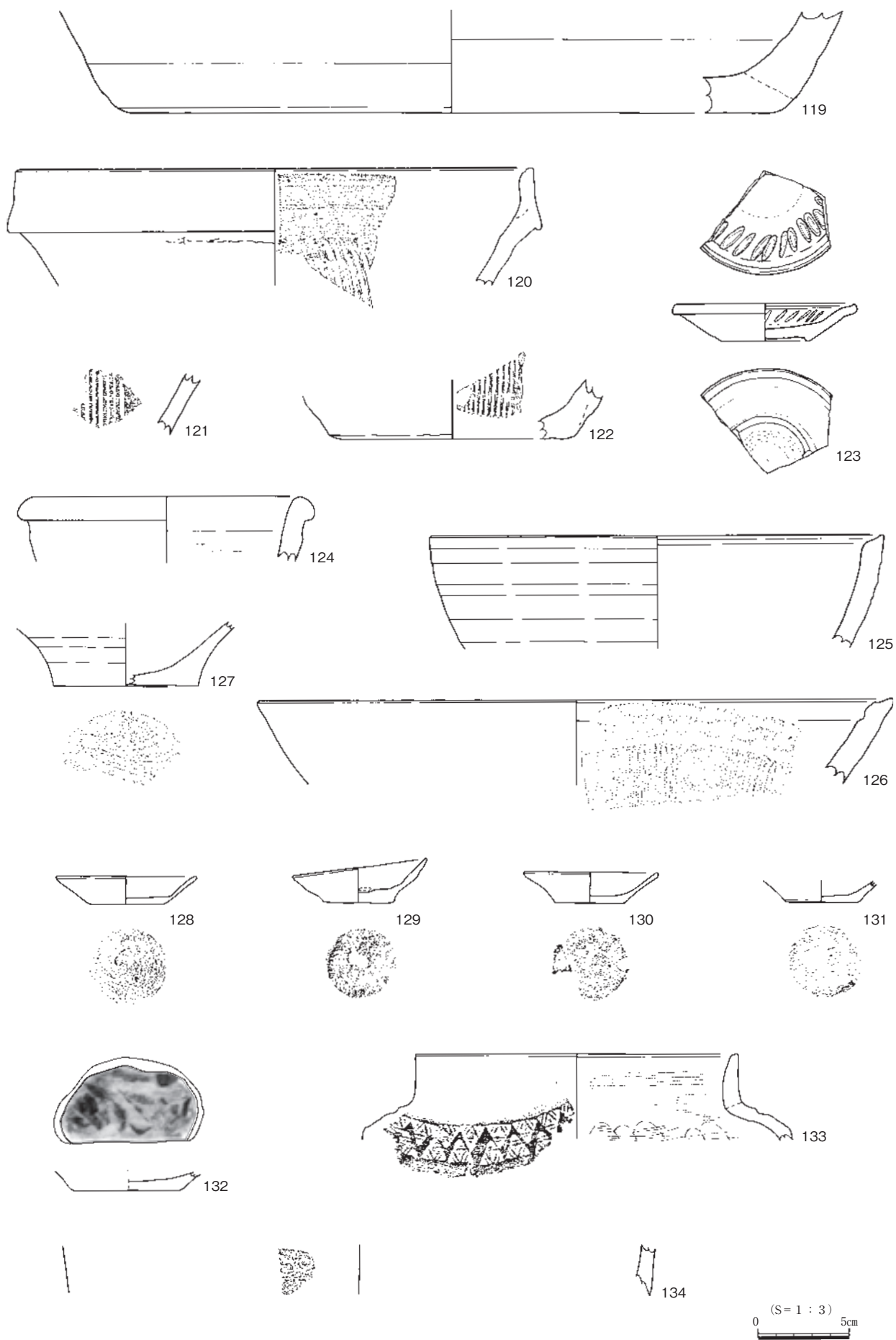
113～122は備前焼である。113～116は壺で、113～115は口縁部である。113、114は口縁部が僅かに外傾し、113は口縁端部を外側に肥厚させて玉縁状としている。乗岡編年の中世6a期に比定される。114は口縁端部に粘土を継ぎ足して玉縁状としている。乗岡編年の中世5b期に比定される。115は口縁部が大きく外傾し、口縁端部を外側に肥厚させて玉縁状としている。116は底部である。117～119は甕である。117は口縁部で、口縁部は外傾し、口縁帯下角には強いヨコナデが施されている。乗岡編年の中世6a期に比定される。118、119は底部である。120～122は播鉢である。120は口縁部で、口縁部は内傾し、口縁端部は外角をややつまみ上げ、口縁帯下角は垂下する。内面には5条1単位の播



第32図 遺構外出土の古代以前遺物



第33図 遺構外出土の中世遺物（1）



第34図 遺構外出土の中世遺物 (2)

り目がある。乗岡編年の中世6a期に比定される。121は胴部下
部、122は胴部から底部にかけ
ての部分である。

123は瀬戸・美濃焼の折縁菊
皿で、内面には丸ノミによる菊
花状の削ぎが施され、高台内
には環状の砂目がある。

124は茶壺で、口縁端部が大
きく外側へ肥厚する。産地は信
楽焼か。

125、126は越前焼の播鉢であ
る。125は内湾気味に立ち上が
り、口縁端部には外傾する面を
持つ。126は外傾して立ち上が
り、口縁端部には水平に近い面
を持つ。口縁部内面には1条の凹線が巡り、胴部内面には10条1単位の播り目がある。

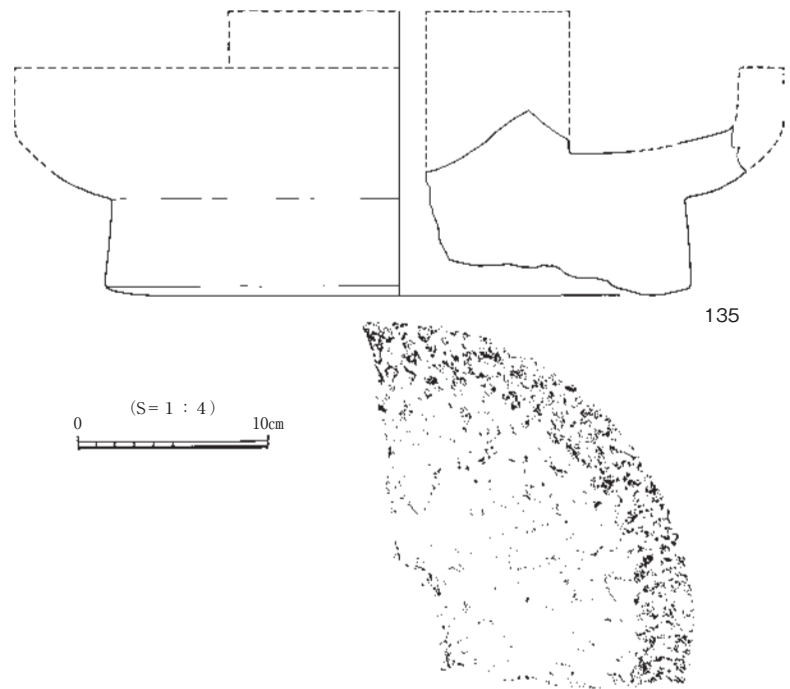
127～134は土師質土器である。127は坏身で、器壁が厚く、外傾して立ち上がり、底部外面には静止糸切りが施されている。128～132は皿である。128～130は外傾して立ち上がるもので、底部外面には128は回転糸切り、129、130は静止糸切りが施されている。131、132は底部で、131の外面には静止糸切りが施されている。132の内面には煤がタール状に付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。133は風炉である。口縁部は直立し、肩部には三角形のスタンプ文が施されている。134は火鉢で、外面には渦巻状のスタンプ文が施されている。

135は石製品である。安山岩製の茶臼の下臼の台座から受け皿にかけての部分で、白面は欠損しているが、台座から受け皿にかけての外面と受け皿の内面、臼部の外面は平滑に磨かれている。台座の底部は鑿状の工具で削り出したまま未調整となっており、接地面のみ水平に成形されている。

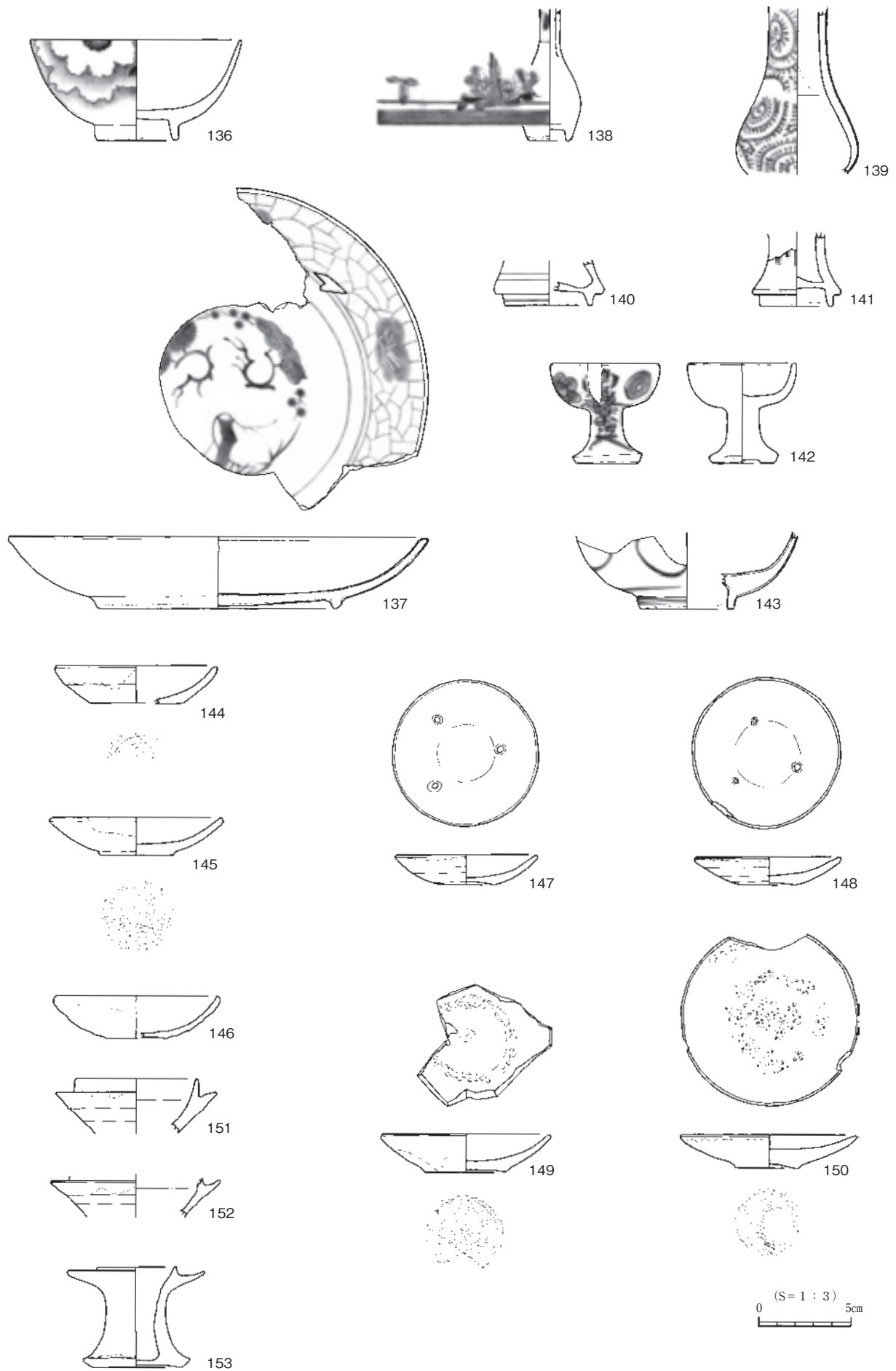
3. 近世以降の遺物（第36～38図）

136～142は磁器である。136は新製焼の碗で、外面には牡丹花文が描かれている。137は伊万里焼の皿で、見込みには松竹梅、体部内面には氷裂と梅花文が描かれ、口縁端部には口鑄が施されている。底部には針支えがある。138～141は御神酒徳利である。138、139はラッキョウ形を呈するもので、138の外面には五彩で植物文、139の外面には蛸唐草文が描かれている。138は産地不明、139は伊万里焼である。140、141は胴上部が張り、胴下部が狭くなる瓶子形を呈するものである。いずれも伊万里焼である。142は仏飯器で、外面には正面に縦書きで「南無妙法蓮華経」の文字が書かれ、その左側には花文、右側には丸文が描かれている。産地は不明である。143は肥前産の陶胎染付の碗である。

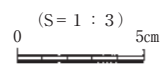
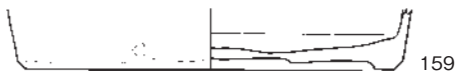
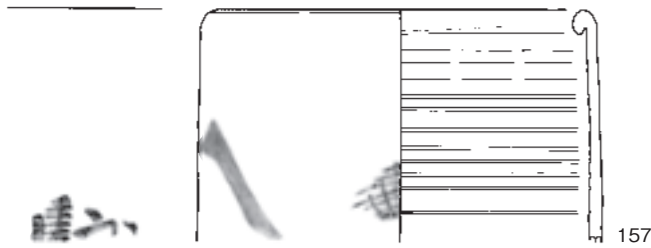
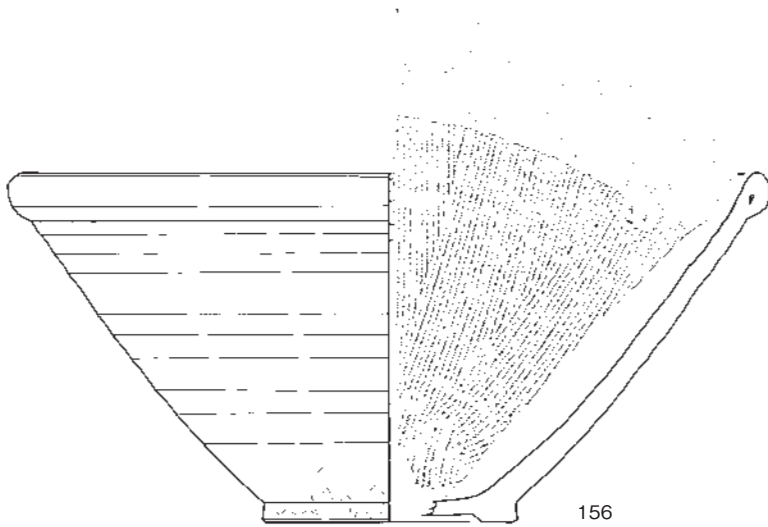
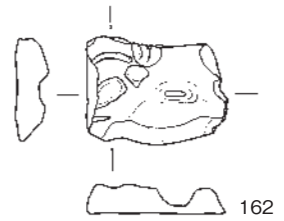
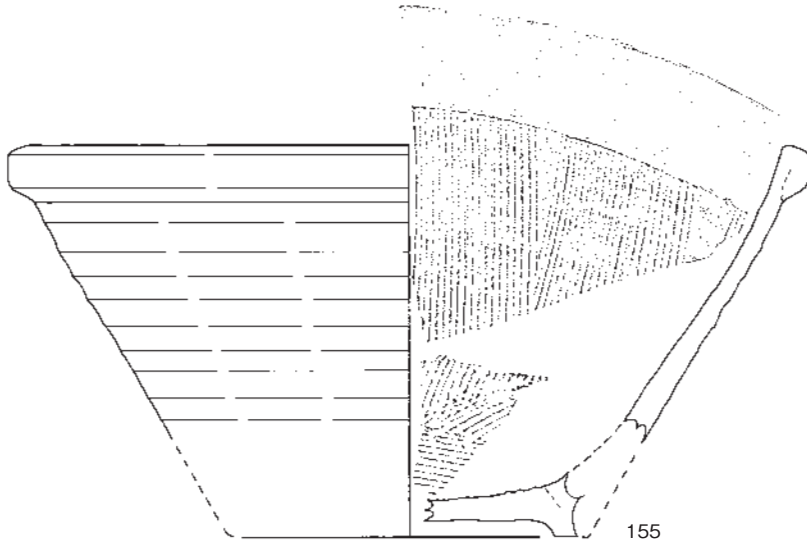
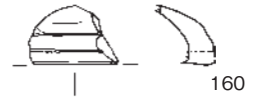
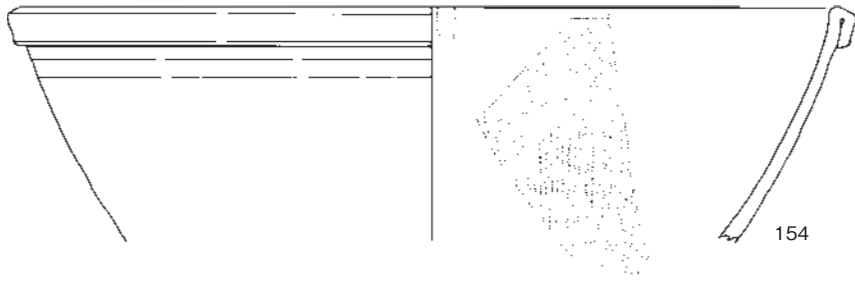
144～159は陶器である。144～152は在地産の灯明皿で、147、148の見込みには3つの焼台跡があり、149、150の見込みには環状の砂目がある。144、145、149、150の底部外面には回転糸切りが施されている。145の外面にはタールが付着し、147、148、150の外面には煤が付着している。151、152は



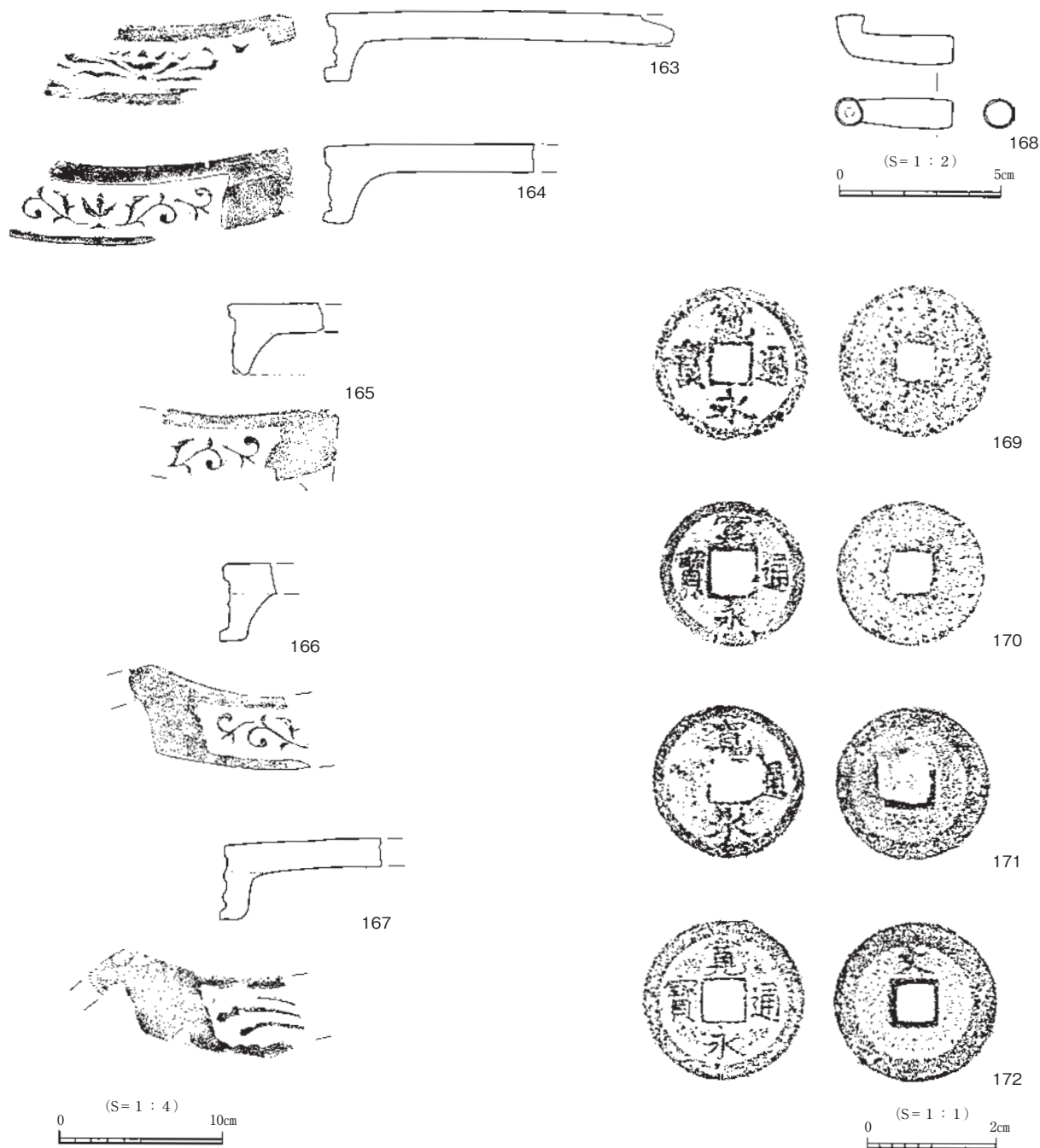
第35図 遺構外出土の中世遺物（3）



第36図 遺構外出土の近世以降遺物 (1)



第37図 遺構外出土の近世以降遺物 (2)



第38図 遺構外出土の近世以降遺物（3）

受け部を有するもので、151は口縁部、152は受け部に煤が付着している。153は在地産の灯明具で、筒部が中空となっており、受け部を有する。また、底部内面に煤が付着する。154～156は在地産の播鉢で、いずれも口縁端部を折り下げて肥厚させている。体部内面には154は11条1単位、155は21条1単位、156は23条1単位の播り目がある。157～159は在地産の火入れで、157、158は貫入が認められる。159は底部で、外面が蛇の目凹形高台となっている。

160～162は土製品である。160は型作りによるもので、外面には2条の沈線が巡る。161は突起状を呈するものである。162は型作りによるもので、表面には目、鼻、口、髪の毛が表現され、裏面は平

坦となっている。

163～167は軒棧瓦で、これらは八幡神社の屋根に葺かれていたものと考えられる。165、166は瓦当部外縁の上端に面取りが施され、166の雀口には円形のスタンプ文がある。167の凹面と瓦当部には黒色の釉薬が施されている。

168～172は金属製品である。168は煙管の雁首、169～172は寛永通寶で、172は文銭である。

第4章 自然科学分析

第1節 陶器・瓦溜り出土炭化物の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌さらには土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である (中村、2003)。

ここでは、中世の城館である石井要害跡で検出された遺構の年代を明らかにする目的で、放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、木炭2点(試料1、試料2)である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 $1\text{ mol}/\ell$ (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

測定方法は、加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。 $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である。

^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach, 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される

値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal3データベース (Reimer et al., 2013) を用い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey, 2009) を使用する。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

3. 結 果

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。第4表にこれらの結果を示し、第39図に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

今回年代測定を実施した炭化物の年代値 (補正年代) は、 $260 \pm 20\text{yrBP}$ (試料1) ~ $250 \pm 20\text{yrBP}$ (試料2) であり、誤差も含めて考えれば、ほぼ同時期と考えられる。

第4表 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料	方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	年代値 yrBP	暦年較正用 yrBP	暦年較正結果		測定番号 Code No.
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
試料1	AAA	-25.40 \pm 0.49	260 \pm 20	260 \pm 21	1636calAD—1664calAD (68.2%)*	1527calAD—1553calAD (11.6%)* 1633calAD—1668calAD (75.0%)* 1782calAD—1797calAD (8.8%)*	IAAA-180684
試料2	AAA	-25.82 \pm 0.47	250 \pm 20	240 \pm 22	1644calAD—1665calAD (60.4%)* 1787calAD—1792calAD (7.8%)*	1529calAD—1542calAD (2.3%)* 1634calAD—1670calAD (71.6%)* 1780calAD—1800calAD (21.6%)*	IAAA-180685

*Warning! Date may extend out of range

(この警告は較正プログラムOxcalが発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

4. 所 見

石井要害跡で検出された遺構の年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。その結果、試料1は、2 σ の暦年代で1527—1553cal AD (11.6%)、1633—1668cal AD (75.0%)、1782—1797cal AD (8.8%)、試料2は、2 σ の暦年代で1529—1542cal AD (2.3%)、1634—1670cal AD (71.6%)、1780—1800cal AD (21.6%) であり、いずれも16世紀前半~18世紀末の暦年代を示した。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.

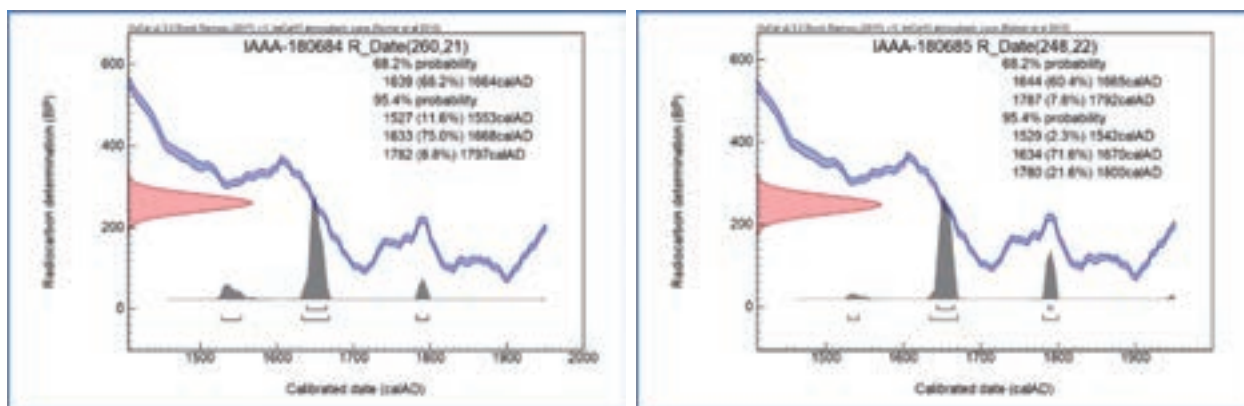
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」. 日本第四紀学会, p. 3-20.

中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p. 301-322.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.

M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.

Stuiver, M. and Polach, H.A., 1977, Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355–363.



第39图 曆年較正結果

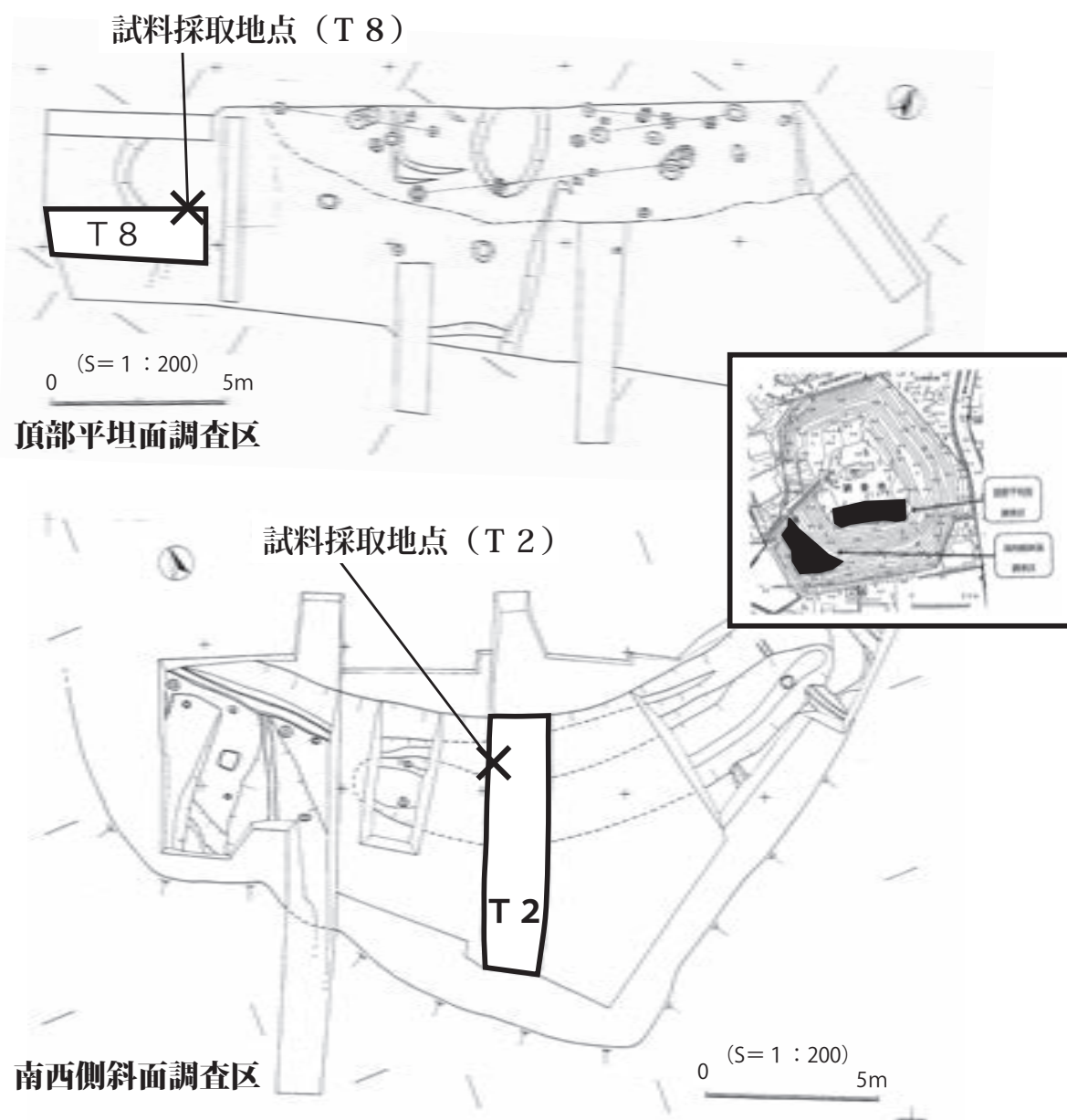
第2節 石井要害跡における軟X線写真観察

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

1. はじめに

石井要害跡は、鳥取県西部、米子市石井に位置し、加茂川、法勝寺川の成す沖積平野を望む丘陵上に位置する中世城館跡である。その大半は宅地造成によって破壊されたものの、八幡神社の境内地と腰郭一か所が残されている。

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が一般財団法人 米子市文化財団より、石井要害跡発掘調査によって検出された腰郭2と郭1の埋立て（造成）状況を把握する目的で委託を受け実施・報告した軟X線写真観察結果について、再編集したものである。



第40図 調査区平面図（試料採取地点）

2. 採取試料について

観察試料は、一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室との協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社がトレンチ断面より切り出した。

以下の図面は、一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室より御提供を受けた平面図、断面図をもとに作成したものである。

調査区平面図（第40図）中に、試料採取地点（T2、T8）を示す。さらに、第41、42図に試料採取地点の断面図及び軟X線写真観察用のブロック試料採取位置を示した。ただし、試料は断面図作成の後に壁面を整形して採取している。このため、後に示す観察試料の画像（地層境界）と本断面図との間でズレが生じている。

3. 軟X線観察方法

(1) 試料採取・調整方法

試験室内にて、20cm×15cm×1cmの透明アクリルケースに入るよう、試料調整を行う。

軟X線写真撮影では撮影用ケースに入れた印画紙に、40kVp・30mAの電流をかけた軟X線を照射し感光させる。撮影された写真はネガであり、軟X線の透過しやすい粘土、植物片は黒く、透過しにくい砂粒は白く表現されている。

撮影写真を基にスケッチを行うとともに、「土壌記載薄片ハンドブック（久馬・八木：訳監修、1989）」に準じて記載を行う。

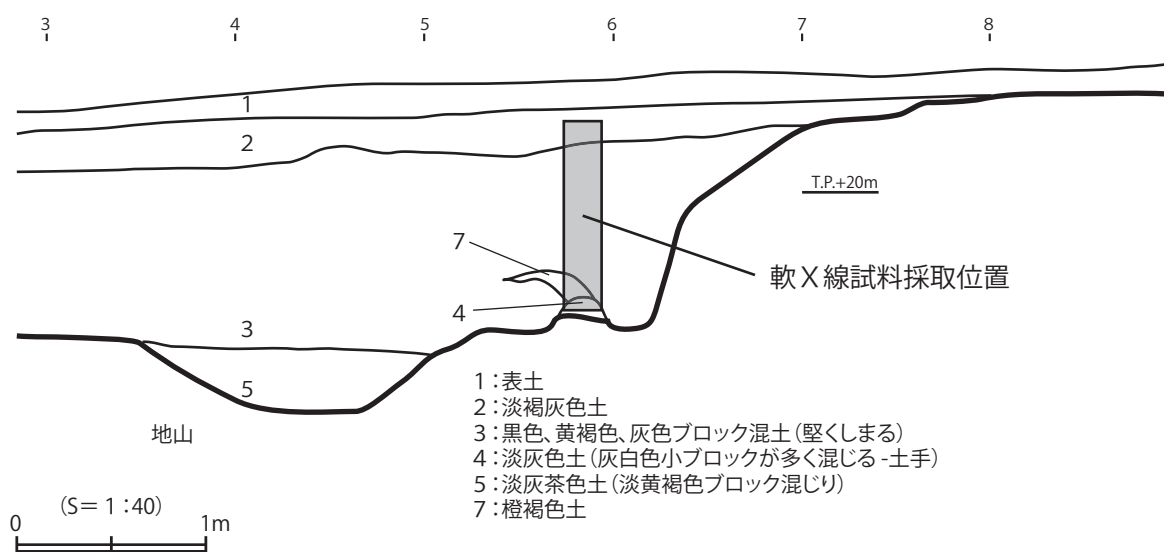
4. 軟X線写真観察結果

第43～47図に、軟X線写真観察結果を示すとともに、以下に試料ごとの記載を行う。

(1) T2：南西側斜面調査区

① 2層

3層上部に特徴的な腐植質粘土のブロックを含まず、シルト質粗砂のφ1cm程度のブロック（礫）から成る。根跡を粗粒堆積物が充填したと考えられる「擾乱帯」が認められる。軟X線写真では下位



第41図 試料採取地点断面図 (T2)

の3層(1)に比べ暗い色調を示す。特に「擾乱帯」の色調が暗く、空隙が多いことが示唆される。

② 3層(1)

φ1～2cmの腐植質粘土ブロックを特徴的に含む。根跡を粗粒堆積物が充填したと考えられる「擾乱帯」が認められるが、断続的である。軟X線写真では上位の2層に比べ明るい色調を示し、空隙が少なく締まりが良いことが示唆される。

③ 3層(2)

φ5cm以上の腐植質粘土ブロックを特徴的に含む。粗粒堆積物から成る「擾乱帯」が認められるが、試料採取時(あるいは成形時)に崩れた部分の可能性もある。軟X線写真では、ブロック自体の色調が上位の3層(1)に比べ明るく、ブロックが受けた変形が少ないことが分かる。

④ 3層(3)

腐植質粘土ブロックを含まず、2～3cmほどのシルト質砂礫ブロックを含む。堆積物の締まりが極めて悪く、試料採取時(あるいは成形時)に崩れた可能性が高い。このため、軟X線写真では砂・礫粒間の空隙が多く、暗い色調を呈す。

⑤ 3層(4)、(4')

塊状であり、上位の3層(3)に比べ堆積物の締まりは良い。一部は試料採取時(あるいは成形時)に崩壊し、φ1cmほど以下のブロックに成る。(4')層では地山由来(灰褐色)のφ1cmほどのブロックを含む。軟X線写真の色調は明るく、空隙が少なく締まりが良いことが示唆される。

⑥ 3層(5)

φ数mmの地山由来(灰褐色)及び焼土のブロックを含む。軟X線写真の色調は明るく、空隙が少なく良く締まっていることが分かる。

⑦ 7層

φ数cm以上の焼土ブロックが多く含まれる。焼土ブロック間には根跡と考えられる「擾乱帯」が存在し、全体には短い直線的なチャンネルも存在することから、焼土ブロックが根により細分されている可能性も示唆される。

⑧ 4層

1～3cmほどの地山由来(灰褐色)のブロックが多く含まれる。ブロックに配列傾向は認めにくい。ブロックの分布は上部に多い。根跡と考えられる「擾乱帯」や直線的なチャンネルが目立つ。チャンネルなどによる空隙が多いことから、軟X線写真の色調が暗い。

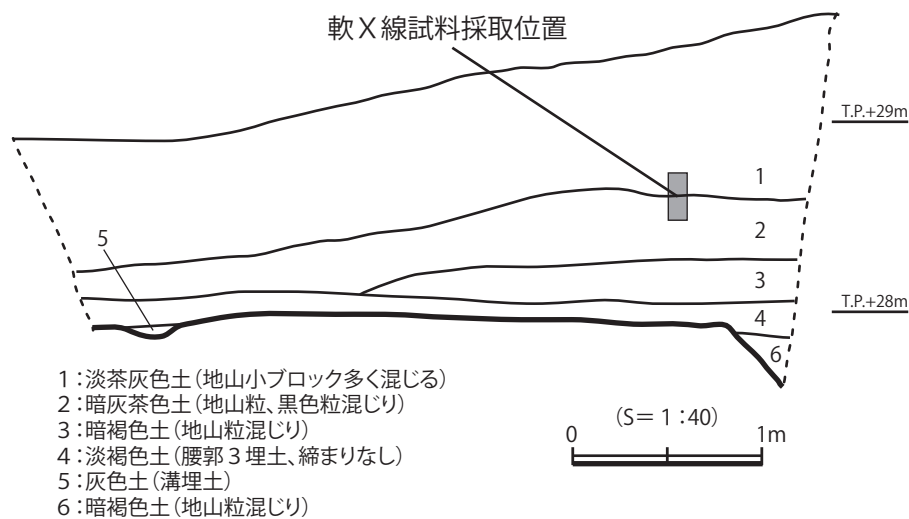
(2) T8: 頂部平坦面調査区

① 1層

φ数mm、φ1～2cmのシルト質砂ブロックが多く含まれ、ブロック間に「擾乱帯」が伸びる。ブロックに、配列傾向は認めにくい。

② 2層

厚さ1cm程度、長さ5cm程度までのシルト質砂ブロックが、層境界に沿って3段に並ぶ傾向が認められる。軟X線写真では、ブロック配列の間はやや暗色を呈すことから、空隙が多い(締まりが悪い)ことが分かる。また、充填する堆積物もやや粗粒である。



第42図 試料採取地点断面図 (T8)

5. まとめ

石井要害跡における腰郭2と郭1の埋立て（造成）状況把握のために、軟X線写真観察を実施した結果、以下の事柄が明らかになった。

- (1) T2での厚さ1mにも及ぶ埋土（3層）を、3層（1）～3層（5）に細分した。3層（1）では腐植質粘土から成る小ブロックの存在、3層（2）では腐植質粘土から成る大ブロックの存在、3層（3）では締まりの悪さが特徴であった。造成土の母材や突き固めの程度に違いが認められることから、腰郭2の埋立て（造成）が一挙に行われたものではないことが示唆される。
- (2) T8での2層では、版築の可能性を示唆する構造が観察できた。一方、上位の1層では同様の構造を認めることができなかった。ただし、1層では生物擾乱（根による）が激しく、構造が破壊された可能性も指摘できる。

参考文献

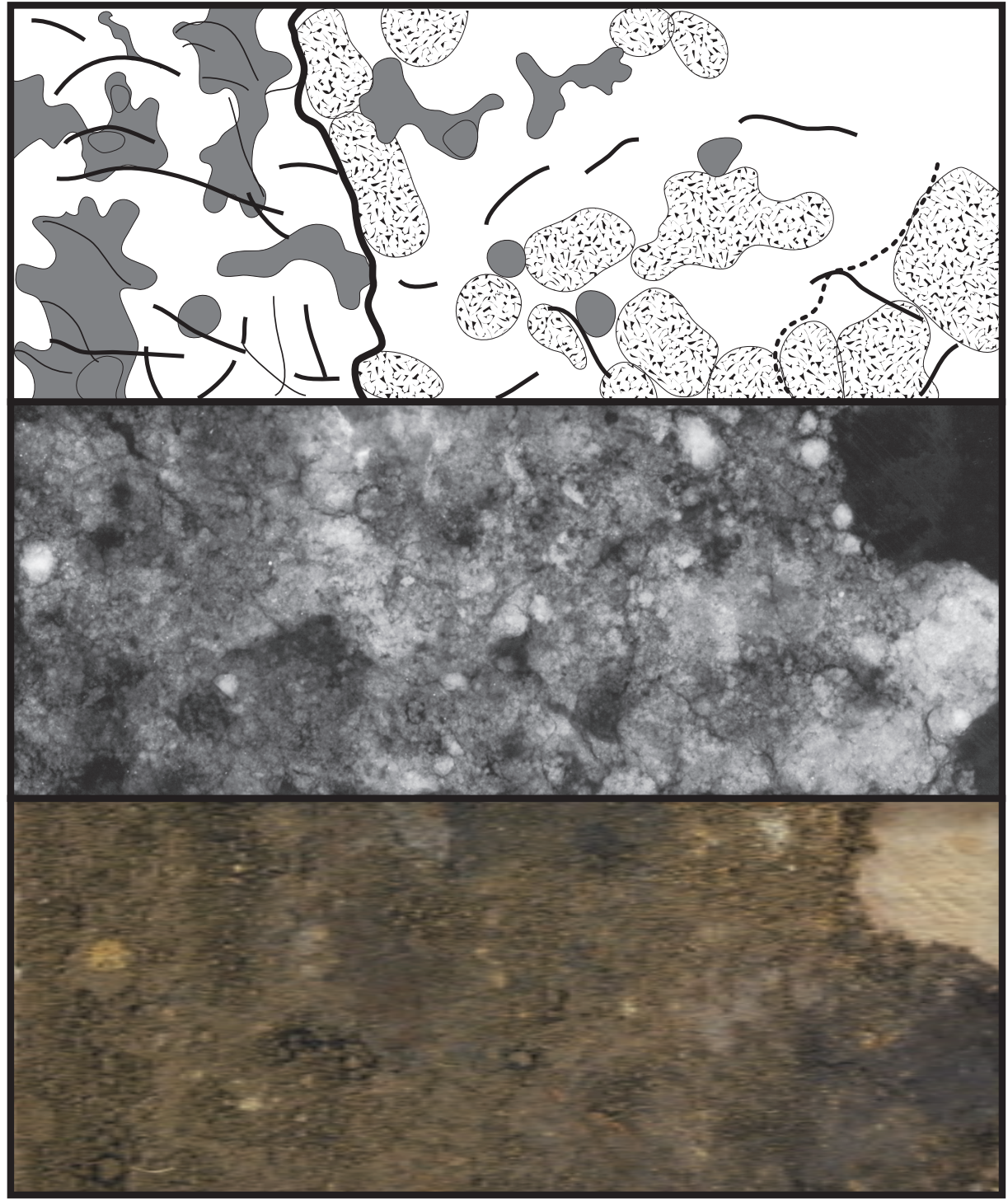
久馬一剛・八木久義訳監修（1989）土壌記載薄片ハンドブック．p.176，博友社，東京。

(GL-m)

0

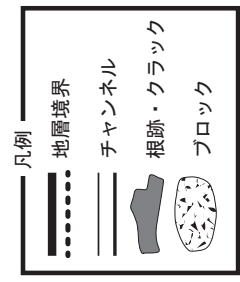
1

2



2層
空隙が多く、締まり悪い
シルト質粗砂のブロック（礫）
を含む

3層(1)
締まりやや悪い
腐植質粘土の小ブロック（礫）
シルト質粗砂のブロック（礫）
を含む



3層(2)
締まり悪い
腐植質粘土のブロック
シルト質粗砂のブロック（礫）
を含む

第43図 軟X線写真観察結果：T2（最上部）

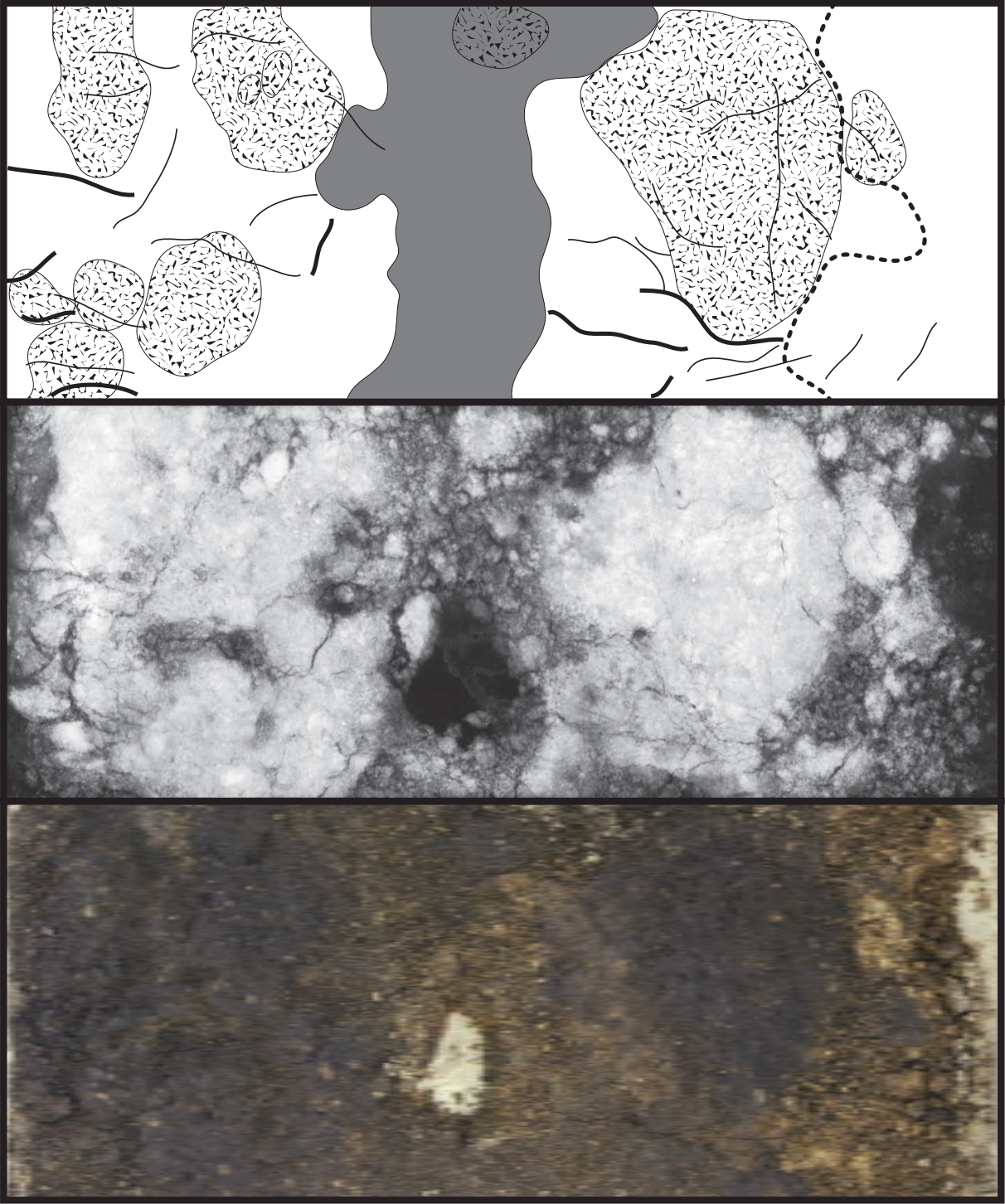
（左：実視 中：軟X線 右：解析結果）

(GL-m)

0

.1

.2



第44図 軟X線写真観察結果：T2 (上部)

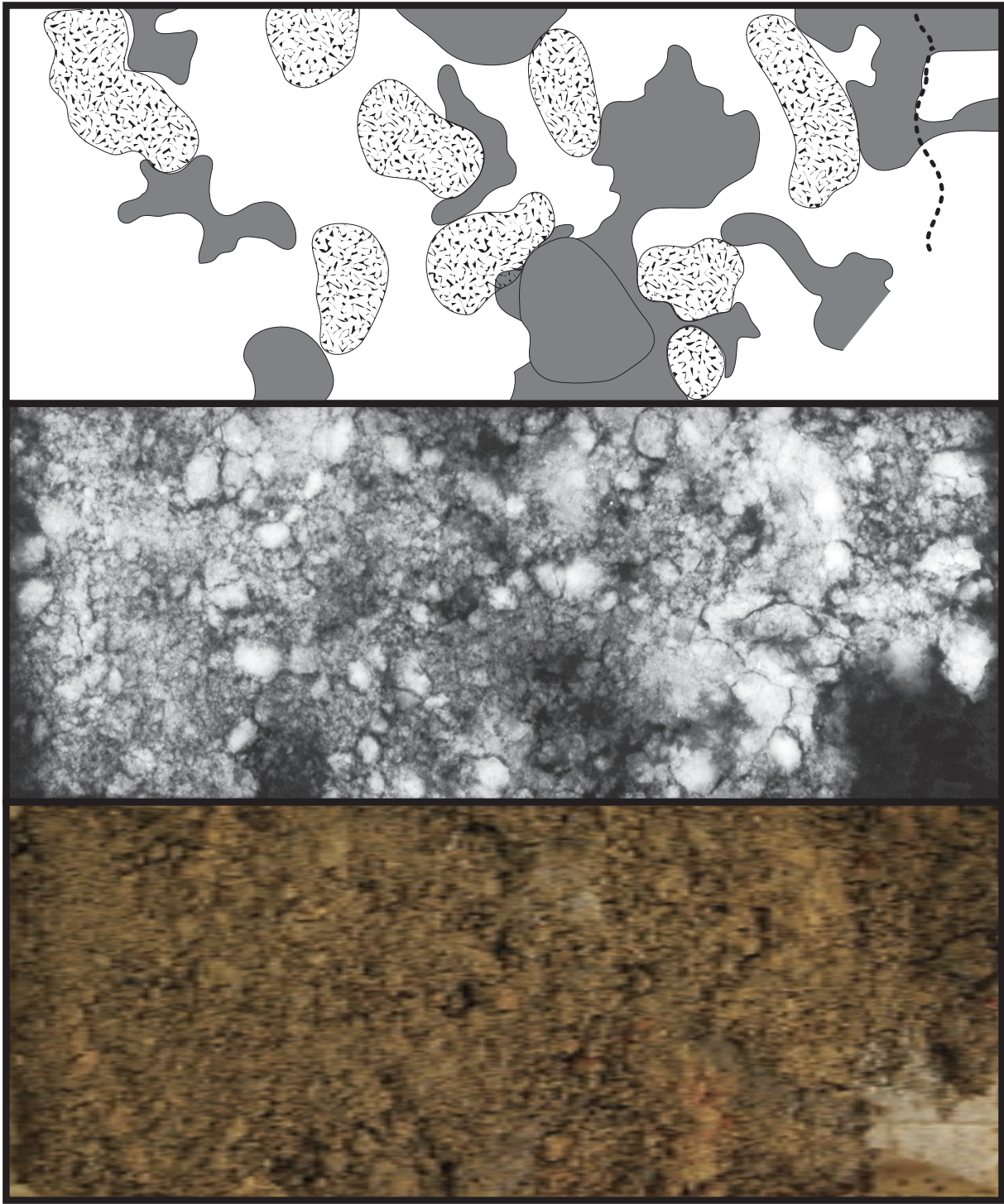
(左：実視 中：軟X線 右：解析結果)

(GL-m)

0

1

2



第45図 軟X線写真観察結果：T2 (下部)

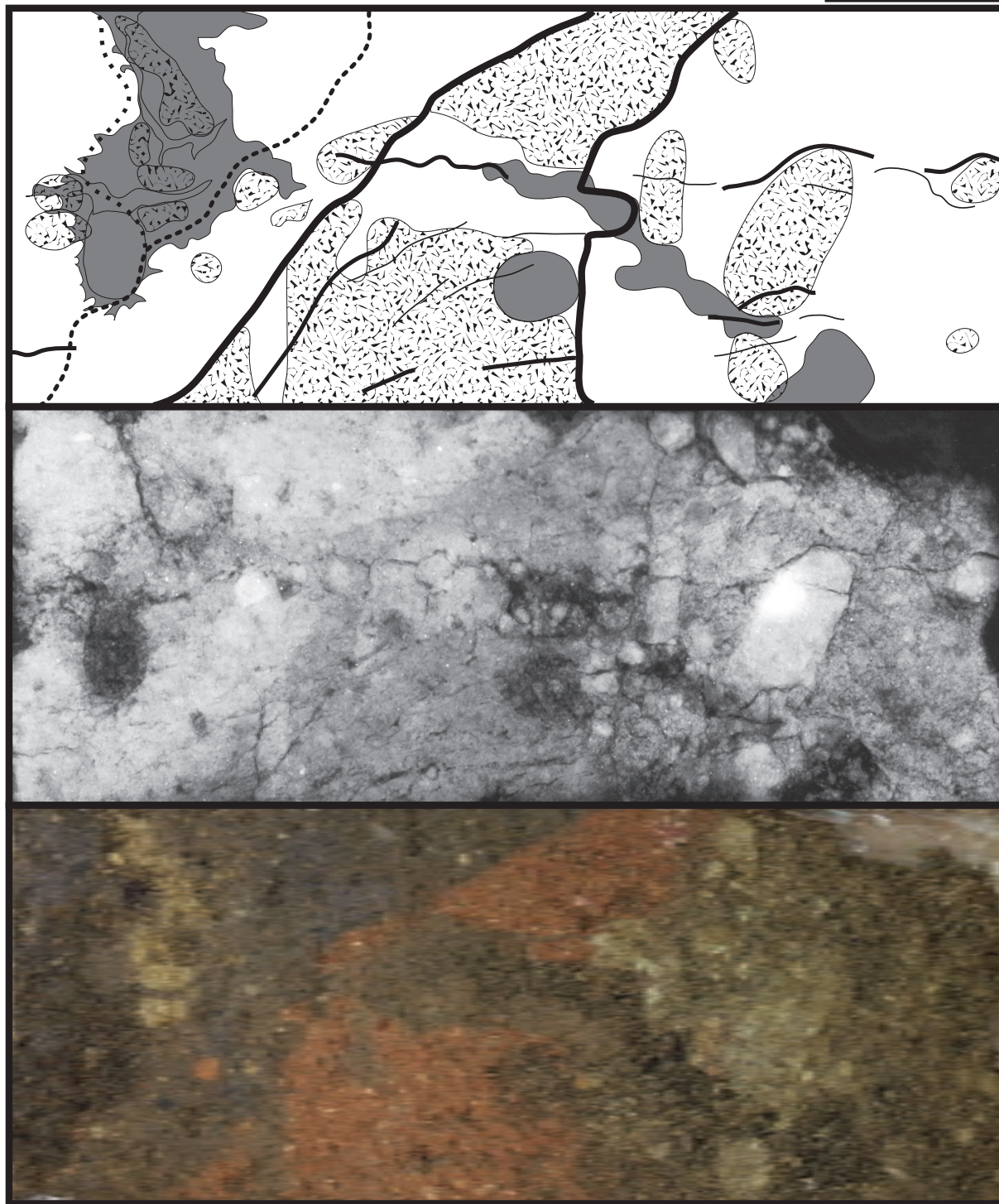
(左：実視 中：軟X線 右：解析結果)

(GL-m)

0

1

2



3層(4)
織まり良い塊状

3層(4')
地山(灰褐色)のブロックを含む

3層(5)
焼土・地山(灰褐色)の小礫(ブロック)を多く含む

7層
焼土層
ブロック?
生物擾乱に起因?

4層
砂礫層
地山(灰褐色)の小礫(ブロック)を多く含む
生物擾乱激しい

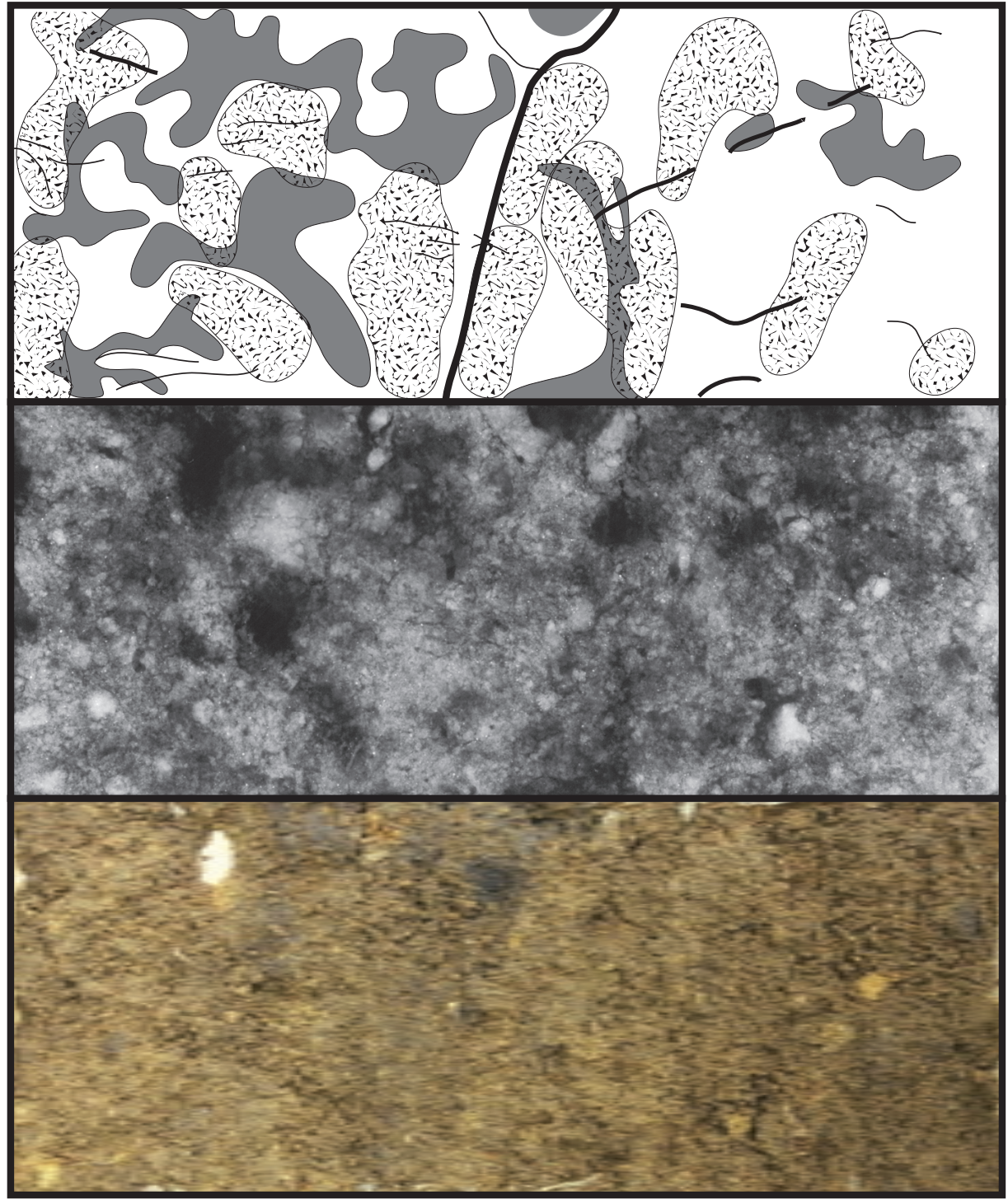
凡例

- 地層境界
- チャンネル
- 根跡・クラック
- ブロック

第46図 軟X線写真観察結果：T2（最下部）

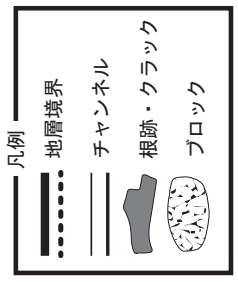
（左：実視 中：軟X線 右：解析結果）

(GL-m)



1層
根跡が顕著
シルト質砂のブロックが
1-2層境界にやや平行に
配列

2層
根跡少ない
シルト質砂のブロックが
1-2層境界に平行に配列



第47図 軟X線写真観察結果：T8

(左：実視 中：軟X線 右：解析結果)

第5章 総括

第1節 石井要害跡をめぐる諸問題

1. 位置

石井要害は米子平野の西部にあり、島根県境から約2kmに位置する。西には備後に抜ける法勝寺街道、南には出雲に抜ける街道が通る交通の要衝地でもある。また、独立丘陵に立地し、南には西から東へ加茂川が流れ、南から東にかけては法勝寺平野が開け、遠くは大山も望め、非常に見晴らしが良く、橋本七尾城とともに街道の往来を監視し、有事の際には、橋本七尾城とともに出雲勢力に対する西伯耆の最前線として防御を担ったと考えられる。

2. 縄張り

縄張りについては、昭和44年の住宅造成工事によって要害の大部分が削平されているために、現在となっては現況を確認することができないが、明治2年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』（巻頭図版1参照。以下、地籍図と呼称する）や古い地名によってある程度窺い知ることができる。なお、この地籍図は、今回調査のⅡ期の縄張りを示しているものと考えられる。

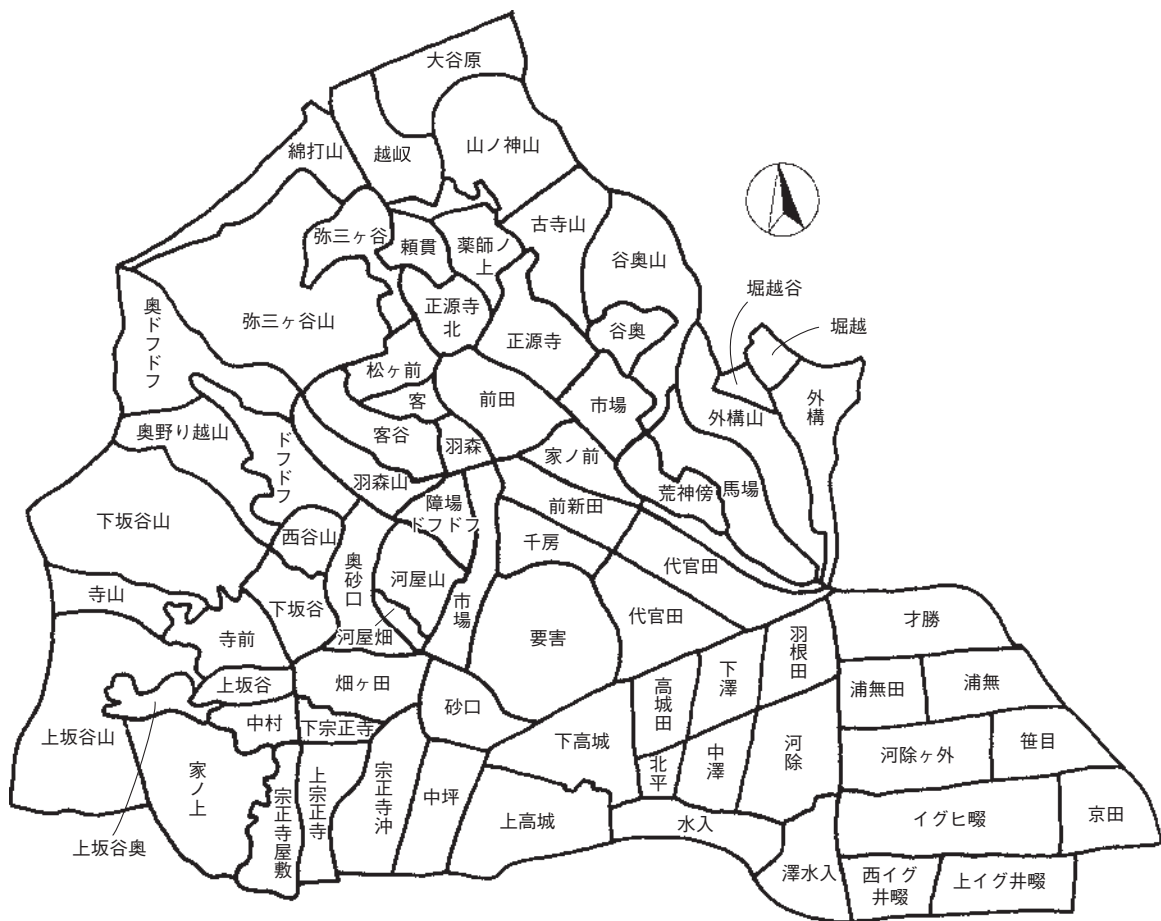
地籍図からみると、楕円形を呈する独立丘陵に築かれた城郭で、東から北、西にかけては丘陵を3段に削平して平場を設け、南側は頂部から丘陵裾部まで切岸となっている。

北側は本丸、南側は出丸（八幡丸）と呼ばれ、地籍図によると両者の間が切通状になった部分があり、その場所に赤道が通っていることから、堀切が存在したものと推察される。また、『延宝六歳石井村水長写』によると、「八まん六畝貳拾参歩（約670㎡）、本丸壹反参畝拾歩（約1,320㎡）、デ丸五畝廿六歩（約581㎡）」とあり、『延宝六歳石井村水長写』の「八まん」は八幡神社が鎮座する部分、「デ丸」はその北西側の部分に相当すると考えられ、本来の出丸の面積は、「八まん」と「デ丸」を合わせた約1,251㎡になると考えられ、現存する頂部平坦面の面積とほぼ一致する。また、本丸には、上段の西側に井戸があり、上段の南東側を「マス形」、中段の東側を「昇りの段」と呼んでいたようである。地籍図によると、本丸の上段の南東側には切岸が途切れたところがあり、後世の畑の耕作による削平も考えられるが、本丸の上段の南東側の「マス形」の位置からも、ここに虎口が存在したと推察される。また、地籍図の赤道が登城路あるいは堀切を踏襲したものとするならば、中段の東側と西側にはこれに沿うように突出した部分があり、横矢としての性格が考えられるのではないだろうか。

丘陵の周囲には堀跡と考えられる水田が囲んでおり、延宝6年（1678）の『石井村小帖』や元禄2年（1689）の『石井村名寄帳』によると、「内ぼり」、「外ぼり」という字名がある。また、堀は丘陵の周囲に巡る水田の形態から推測して狭いところで20m程度であったといわれ、『石井村名寄帳』によると、「外ぼり中田1畝20歩、内ぼり下田2畝9歩、堀開下田3歩」とある。なお、調査地の南側には西から東へ加茂川が流れており、加茂川から堀へ水を引き入れていたと考えられる。

3. 外構

調査地の南約600mには橋本七尾城があり、調査地の北西約500mにある西谷山と、北東約500mに



第48図 石井地区の小字図 (『鳥取縣成實村大字石井地圖』明治24年よりトレース)

ある奥谷の外構山(船上山)と呼ばれる丘陵には砦が築かれている(第4図参照)。外構山には「外構」、「外構山」、「堀越」、「堀越谷」という字名があり(第48図参照)、堀切と考えられる地形も確認されている。さらに、外構山には「馬場」という字名もあり、馬の調練を行っていたと考えられる。

また、的場が奥谷の前新田と石井のドウドウ谷の2ヶ所にあったという伝承があり、『石井村小帖』の字名を見ると、「本丸、出丸、八まん、ほり、内ほり、外ほり、堀の内、外構、ます形、よう害、陣場ドウドウ、馬場、的場」とあり、周辺に練兵場や馬の調練場があったことが推測される。

なお、周辺の水田は構造改善が行われる以前は、膝まで埋まるような湿田であったようで、当時は湿地状となっていたことが推測され、外構として利用された可能性がある。

以上のことから、外構を含めると堅い守りの城郭であったことが窺える。

4. 出丸の構造と機能

石井要害跡のある丘陵は水田との比高19mと決して高くなく、防御に対しては不向きな地形のように思われ、従来は、石井要害は居館として考えられ、戦時ともなれば橋本七尾城(標高108m)を詰めの城としていたと考えられてきた。

出丸のⅠ期には頂部平坦面では南西側に腰郭3があり、T11では地山を2m以上ほぼ垂直に掘り込んだ切岸があり、腰郭の存在が窺える。

一方、南西側斜面の中腹には腰郭1があり、腰郭1の中央やや北西寄りから東側にかけては空堀1

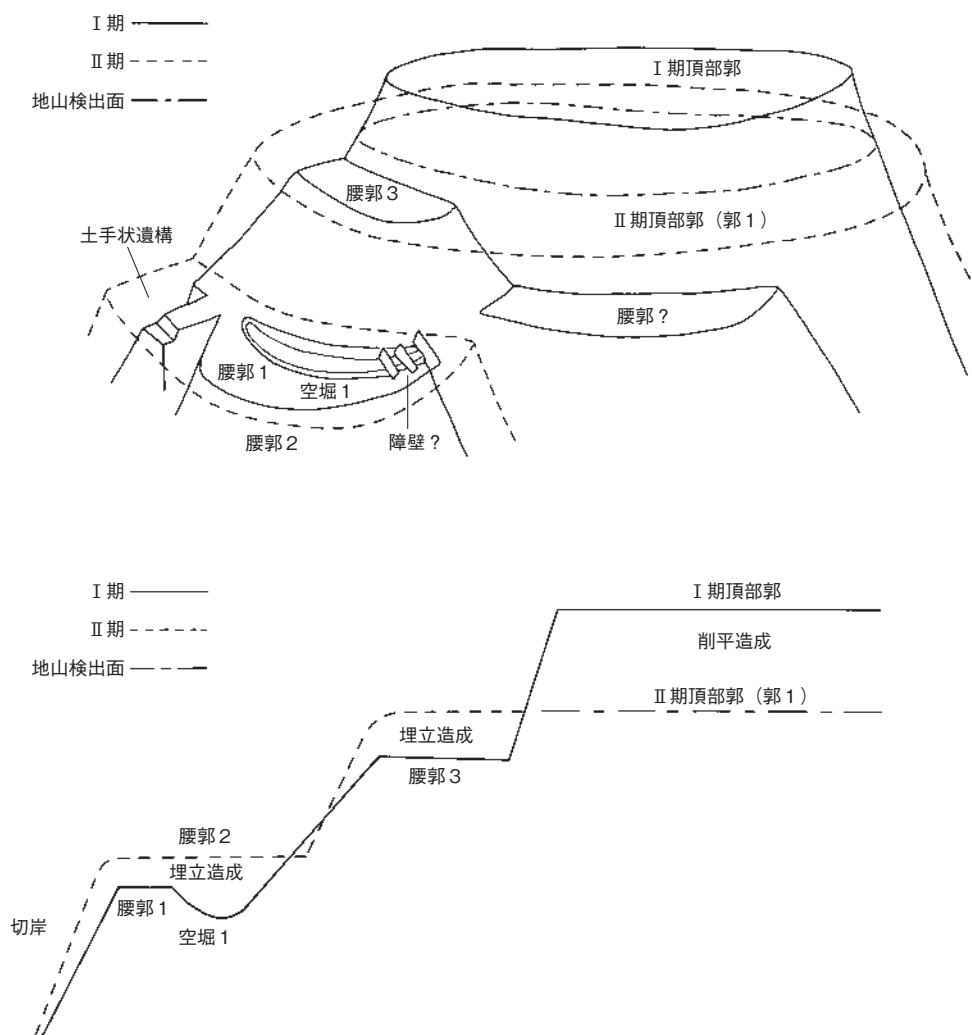
が巡る。また、腰郭1の東側には障壁設置遺構が3カ所あり、北西側には土手状遺構があり、腰郭1の両側の防御を固めている。

また、発掘調査後に行われた工事の法面では、南東側斜面の北東端で頂部との比高差約2.5mの腰郭の断面が観察され、南東側斜面にも腰郭が存在したと推察される。さらに、南西側斜面の工事中の法面では腰郭3と腰郭1との間に腰郭の断面が観察され、南西側斜面には3段の腰郭が存在したと考えられる。

このようにみても、出丸のI期にはかなりの防御機能を有していることから軍事的性格が強いと考えられる。

II期になると、I期の腰郭を大規模に埋め立てて造成し、郭の拡張を行っている。造成土は非常に硬く締まっており、版築状を呈する。I期の腰郭を埋め立てて造成するにあたっては、頂部平坦面にはI期にさらに標高の高い郭が存在していた可能性があり、これを削平してI期の腰郭を埋め立てたと推察される（第49図参照）。

一方、南西側斜面の腰郭2は、腰郭1の平坦面の上に出丸の頂部平坦面の北西側に見られる地山に由来する赤色土を用いて敷きならすという共通点はあるが、T1・2・6は黒色粘質土、褐色土、黄褐



第49図 I・II期の郭・腰郭の推定模式図

色土の各ブロックの混合層で埋め立てているのに対して、調査区東側のT3では黄褐色ブロックが多く混じる灰茶色土で埋め立てている。また、T2では造成土をほぼ水平に埋め立てているのに対して、T1とT6では造成土を南西から北東へ傾斜するように埋め立てており、場所により造成を行う作業単位、方法が異なっていたものと考えられる。

郭が拡張された郭1では、土坑3基、集石遺構1基、ピット30基を検出した。

ピットはその多くが深く掘り込まれており、柱穴と想定される。このうち、4条の柱穴列を想定したが、調査区の制約もあり、建物あるいは柵列として断定できなかった。しかし、貿易陶磁をはじめとする多量の遺物が出土していることから、日常的な居住が窺え、さらに、風炉、茶臼、建水、天目茶碗、茶壺などの茶道具が出土していることから、茶の湯を行う会所的な施設も存在したと推察される。

5. 城主

幕末頃成立の地誌である『伯耆志』には、「石井村 高四百七十一石六斗 家六十六戸 人三百口 要害 村の東北田中の山なり 八幡の小祠あり 片山小四郎といふ人の城なりと云へり 伝承かならず」とあり、『伯耆民談記』には「宗像庄石井村にあり 古城主片山小四郎領地なり」とある。また、天明6年（1786）の『御巡見様御案内帳』や文政11年（1828）の『伯州六郡郷村帳』にも片山小四郎の名が見られる。これらは二次的な史料で、その信憑性は定かではないが、片山氏については、永正5～18年頃（1508～1521）に成立したといわれる『大館常興書礼抄』に「伯耆衆」のうちの国人として片山平左衛門尉が記されている。片山氏は当初、南部町篠相に築城したが、後に石井に移ったといわれ、國田俊雄氏によると、「片山氏は元来伯耆国宗方庄や榎原庄などの開発領主ではなかろうか。」とし、「『文政11年郷村帳』に出てくる片山小四郎と同一人物ではなかろうか。」と指摘している（國田 2018）。

片山平左衛門尉が史料として認められるのは、『萩藩閥閥録』に所収してある『山田吉兵衛家譜』の毛利元就と小早川隆景から山田民部丞（満重）宛ての書状の中からである。書状によると、永禄6年（1563）に出雲国境にある新山要害（長台寺城）を攻めており、「片山一所進藤源次郎、深田共敵討捕」とある。また、永禄7年（1564）には山田民部丞（満重）に従い、南部町柏尾の丸山固屋（小鷹城）と伯耆町岸本の丸山固屋を攻め、その戦功に対して毛利元就から褒美として具足と兜を拝領し、さらに、同年、天満固屋（手間山）の焼き崩しに功績があったとして山田民部丞（満重）を介して感状が下付されていることが記されている。また、永禄9年（1566）5月には山田出雲守満重が体調不良の時、片山平左衛門尉と河岡山城守にあとを任せることについての毛利元就の同意の書状がある。以上の史料から、少なくとも永禄6年（1563）から永禄9年（1566）までは片山平左衛門尉が石井要害に在城した可能性が考えられる。

永禄10年（1567）以降の片山平左衛門尉に関する史料は存在せず、その動向は不明であるが、永禄9年（1566）の杉原盛重の書状によると、片山平左衛門尉の所領である中馬場（米子市吉谷）25石を毛利元就から山田民部丞（満重）へ給地として与えることとなり、これに対して片山平左衛門尉からの訴えがあり、裁判が行われることになったが、裁定の結果、山田氏の地行が認められている。永禄9年（1566）11月には尼子義久が毛利氏の軍門に降っており、國田氏は「この時点で片山平左衛門尉の役割は終焉を迎え、その存在意義がなくなり、そのことが中馬場25石の所領没収として表れているのではないだろうか。」と指摘している（國田 2018）。

伯耆国人の去就について、國田氏は「毛利氏においては支配地における小国人の伝来所有していた所領を、知行地として毛利氏の一門、譜代、国衆、外様へと安堵していくことにより、毛利氏の権力を強化していったと思われる。」とし、「一方所領を失いつつあった片山平左衛門尉などの国人については、史料や軍記物で瞥見出来ない。天正19年（1591）西伯耆の支配を安堵された吉川広家の家臣になったであろうか。それとも元来は開発領主である地侍の系譜につながるものであるから、帰農したであろうか。その後の去就については不明である。」としている（國田 2018）。

その後の城主については、二次的な史料しか存在しないが、文政11年（1828）の『伯州六郡郷村帳』には、「石井村 高四百六十石余 八幡宮 禪石井妙喜寺 村より東北にあたって木引因幡守古城跡あり」とある。

6. 城の存続時期

石井要害に関する文献史料は二次的な史料しか存在せず、石井要害の存続時期に関しては発掘調査による出丸の出土遺物が重要な手掛かりとなる。

遺跡の年代観について検討を行う場合は、本来は消費時間幅が小さい土師質土器をもって特定を行うのが最善であるが、当地域の土師質土器の編年が未確立であるため、陶磁器の編年を用いた。

築城時期については、貿易陶磁の古いものでは青磁碗B3・E類、白磁皿D群、青花碗B群が出土しており、15世紀中頃まで遡る。これらは耐久消費材として伝世して使用される財産的価値があるものであるということを考慮しなければならないが、現時点では、築城時期は15世紀中頃よりも遡らないと考えられる。

Ⅱ期になるとⅠ期の腰郭を埋め立てて造成し、郭の拡張を行っており、出土遺物には青磁や白磁、青花などの貿易陶磁や備前焼などの国産陶器、土師質土器などがある。

貿易陶磁には青磁碗B2・B3・B4・D・E類、白磁皿D・E群、青花碗B・C群、青花皿B1群があり、いずれも15世紀中頃から16世紀中頃の範疇におさまるものであるが、消耗を前提とする播鉢がより年代を示していると考えられる。本遺跡からは備前焼の播鉢の出土はごく僅かであり、しかも時期が特定できる資料が2点と数が少ないため、年代を特定するには慎重にならざるを得ないが、乗岡編年の中世5b～6a期に比定され、15世紀末～16世紀前半に帰属するものである。これを補完する資料として多量に出土した備前焼の壺と甕の年代観を援用すると、これらの年代観は乗岡編年の中世5b～6a期に比定されるが、中世6a期が主体で、16世紀の第1四半期～第2四半期に帰属するものである。以上のことから、15世紀中頃を上限として築城され、16世紀中頃まで城が存続したと考えられ、先述した片山平左衛門尉の動向とも一致する。

続く16世紀後半になると遺物が認められないことから、この時期には、城主が不在、あるいは廃城となったと考えられる。

その後、量的には少ないが、大窯Ⅳ期末の瀬戸・美濃焼や見込みに胎土目のある唐津焼などが出土していることから、16世紀末～17世紀初頭に城が再興、存続した可能性がある。二次史料ではあるが、古曳長門守吉種が石井要害に在城したとあり、出土遺物からもこの時期に古曳氏が在城した可能性も否定できなくもないが、八幡神社の創建年代がどこまで遡るかを含めて今後の検討課題である。

7. 城の改変の契機

石井要害の出丸では、Ⅱ期（16世紀前半～中頃）にⅠ期の防御機能を有する施設（腰郭）を大規模に埋め立て造成し、郭の拡張を行っている。その改変の契機は、時期的にみて尼子氏による伯耆国侵攻及び伯耆国支配と重なる。

ここでは、なぜ大規模な城の改変を行ったのか、その契機について考えてみたい。

まず、当時の社会情勢について概観してみると、伯耆国の戦国動乱は、文明4～5年(1472～1473)の伯耆国守護職である山名教之・豊之の死去を契機に山名家の内部分裂と有力国人層が台頭することにより始まった。

このような状況のなかで隣国の出雲から尼子経久が伯耆へ侵攻する。『伯耆民談記』によれば、「大永の五月崩れ」と称され、大永4年（1524）5月に尼子経久が出雲から伯耆へ侵攻し、伯耆国内の主要な城を短期間に攻め崩し、有力な国人たちを次々と国外へ退去させて、伯耆国一円を支配下に治めたといわれる。しかし、現在においてはそのような実態はなかったことが指摘されており（高橋1986）、尼子経久の伯耆侵攻は天文2年（1533）二月五日の書状（『日御碕神社文書』）の中で「二十数年前に伯耆攻め込み、各地でたびたび合戦を行った」とあるように、山名家の内紛に乗じて永正10年（1513）以前からすでに伯耆国に対する軍事的侵攻が始まっていたと考えられる。時期的にみて、Ⅰ期にはこのような尼子氏の侵攻に対する防御のため、堅固な防御施設を設けたと考えられるが、大永4年（1524）5月の尼子経久の伯耆侵攻に際しては、南条氏、山田氏、行松氏などの伯耆国人らは因幡国へ退去したのに対して、片山平左衛門尉は尼子氏に質を出して服従している。

永禄5年（1562）頃から毛利氏による山陰侵攻が盛んとなり、尼子氏に服従していた片山平左衛門尉は、先述した山田民部丞（満重）宛ての書状に見られるように永禄6年（1563）頃に尼子方を離れ、毛利氏の傘下に加わって尼子方の城を次々と攻め落としている。永禄9年（1566）に尼子義久が毛利氏の軍門に降るまでは尼子氏の支配の下、比較的治安が平穏化し、軍事的脅威もさほどなくなったため、堅固な防御施設は必要なくなり、居住に関わる諸施設を設ける空間を確保するため、郭を拡張したのではないかと推察される

第2節 出土遺物について

石井要害跡第1次調査から出土した土器と陶磁器については、中世に関わるもののみ、全ての出土破片点数を数えグラフ化した。その結果、全出土点数617点の内、土器が190点（31%）、瓦質土器が8点（1%）、国産陶器が325点（53%）、中国・朝鮮の陶磁器が94点（15%）であった。

土器については、土師質土器の坏・皿類が最も多い145点であり、土器の出土点数190点のうち76%を占める。京都系の皿は、可能性のあるものも含めて8点しかなく、土器の中でも4%しか含まれていない。これを陶磁器全体の割合で見ると坏・皿類が24%、京都系の皿が1%と最も少なくなる。

国産陶器は、325点のうち備前焼が288点（89%）で最も多いが、越前や常滑、信楽からの搬入品と見られる瓷器系陶器の壺・甕類が26点（8%）含まれるのが特徴である。更に備前焼のみを器種別で見ると、壺・甕類が97%を占めており、貯蔵具が播鉢などを圧倒している。

貿易陶磁器については、全94点のうち、青磁製品が38点（40%）を占めている。このうち、碗では線描きの蓮弁文碗と無文の碗が多く、威信財と見られる盤は2個体以上存在するようである。白磁は

第5表 石井要害跡 第1次調査出土土器・陶磁器集計表

	土師器				瓦質土器	越前	瀬戸・美濃	備前				瓷器系				青磁碗				青磁その他			白磁碗・皿		青花碗		青花皿・小杯		中国陶器		朝鮮		唐津		小計	備考								
	坏	鍋	火	その他				火	播	播	壺	甕	壺	建	水	壺	壺	信	B ₂	B ₃	B ₄	D	E	不	稜	香	盤	D	E	不	B	C	不	小			天	そ	皿	壺	胎	砂	大	壺
合計	145	32	5	8	8	2	1	4	10	5	263	1	5	1	21	4	1	2	9	2	7	1	2	1	13	2	3	6	1	1	3	6	1	3	4	3	1	22	4	1	1	2	617	
類別合計	190				8	2	1	288				26				22				16			11		5		10		7		23		8		617									

D・E類が中心で11点（12%）。青花は碗・皿類を合わせても15点（16%）と少なく、B群の皿が中心と見られる。朝鮮陶器は、皿が1点しか確認できず、舟徳利と見られる薄手の陶器瓶の破片が22点出土したのみである。全体的な傾向を見ると、備前焼が出土陶器の中で最も多くの割合を占めており、南部町の手間要害跡の様相に類似しているが、瓷器系陶器も1割程度含まれるのが石井要害跡の特徴と考えられる。周辺では、陰田遺跡群をはじめとする、中海沿岸域の中世遺跡から越前焼が出土する事例が多く見られることから、石井要害跡でも同様の傾向が見て取れる。

第3節 まとめ

石井要害跡は、昭和44年の住宅団地造成工事により遺跡の大半が削平され、出丸が残存しているのみである。また、二次史料しか存在せず、これまで様相が明かとなっていなかった。

今回の調査により、築城時期がどこまで遡るかは明らかにできなかったが、15世紀中頃を上限として築城され、16世紀中頃まで存続していることが明かとなった。

構造や機能については、I期（15世紀中頃～後半）には南東側と南西側の斜面に腰郭を構築し、特に南西側斜面の腰郭1には両側に障壁設置遺構と土手状遺構を設け、腰郭の防備を固めている。时期的に尼子氏による伯耆国侵攻に備えてのためと考えられる。

II期（16世紀前半～中頃）には、I期の腰郭を埋め立てて造成し、郭を拡張している。この時期には多くの遺物が見られ、頂部平坦面では柱穴と考えられるピットが多数検出されており、居住施設を整備するにあたって、居住空間を確保するために郭を拡張したと考えられる。

石井要害を立地的にみても、出雲国境や街道の近くに位置し、南側には加茂川があり、国境や水上交通及びその周辺の交通路を見渡せる位置にある。独立丘陵という立地上の特性を活かし、国境やこれらの交通の要所の監視や支配を目的とするために、城がこの位置に築造されたと考えられる。さらに、橋本七尾城とともに出雲勢力に対する戦闘、監視のための西伯耆の最前線の拠点として位置付けられると考えられる。

出土遺物についてみると、少量ではあるが、威信財とみられる盤や風炉、茶臼、建水、天目茶碗、茶壺などの茶道具があることから、ある程度経済力があり、文化的素養を持った城主像が窺える。さらに、このような状況から、II期には一時的な施設ではなく、ある一定期間、居住するために整備された施設であったと考えられる。

今回の調査では、ごく僅かであるが弥生時代から古代の遺物が出土しており、これらの時期の遺跡

が存在していたが、築城により削平されたと考えられる。

また、発掘調査後の法面工事中に、南東側斜面の中央付近の中腹から須恵器坏蓋が4点まとまって発見された。工事関係者によると腰郭の埋め立て造成土と考えられる層を重機で掘削したところ、円形を呈する黒色土の広がりがあり、その黒色土を掘削した際に出土したということである。斜面の中腹という位置と出土遺物から、円形を呈する黒色土の広がりには横穴墓の一部と考えられる。

今回の調査は、石井要害跡のごく一部を調査したのみであるが、城の構造や機能についてある程度明らかにすることができた。築城時期がどこまで遡るかは明らかにできなかったが、その解明は今後の検討課題とし、さらに石井要害の様相が明かとなることを期待したい。

参考・引用文献

内藤 亮 1964「成実村の歴史をたずねて（四）石井要害跡」『旧成実村史』成実公民館

内藤 亮ほか 1971「幻影石井城」『米子市石井要害土地画整理事業記念誌』米子市石井要害土地画整理組合

大川泰広ほか 2004『鳥取県中世城館分布調査報告書』第2集（伯耆編）鳥取県教育委員会

亀尾八州雄 2002『ふるさと歴史散歩2 石井要害』

國田俊雄 2018「戦国期伯耆国人の去就について一片山氏・河岡氏を例として一」『伯耆文化研究』第19号 伯耆文化研究会

高橋正弘 1986『因伯の戦国城郭一通史編一』

鳥取県編 2010『鳥取県史ブックレット4 尼子氏と戦国時代の鳥取』鳥取県

鳥取県編 2015『新鳥取県史 資料編 古代中世1 古文書編下』鳥取県公文書館

乗岡 実 2017「戦国時代の備前焼編年」『東洋陶磁』第四十六号 東洋陶磁学会

米子市編 2003『新修米子市史』第1巻 米子市

米子市編 1997『新修米子市史』第12巻 米子市

『延宝六歳石井村水長写』

『石井村小帖』延宝6年（1678）

『石井村名寄帳』元禄2年（1689）

『御巡見様御案内帳』天明6年（1786）

『伯州六郡郷村帳』文政11年（1828）

『伯耆志』

『伯耆民談記』

第6表 郭1出土陶磁器・土器観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
1	8	青磁 碗	※20.0	—	△ 3.8	外面：ヘラ描き蓮弁文	密	良好	オリーブ灰色	上田B3類
2	8	青磁 碗	※10.7	—	△ 4.7	外面：線描き蓮弁文	密	良好	オリーブ灰色	上田B4類
3	8	青磁 碗	—	—	△ 2.7	外面：線描き蓮弁文	密	良好	オリーブ灰色	上田B4類
4	8	青磁 碗	※13.5	—	△ 1.8		密	良好	オリーブ灰色	上田E類
5	8	青磁 稜花皿	※14.7	—	△ 1.4	内面：2条の波状文	密	良好	オリーブ灰色	貫入あり
6	8	青磁 稜花皿	※15.7	—	△ 2.6	内面：2条の波状文	密	良好	オリーブ灰色	貫入あり
7	8	青磁 盤	※20.8	—	△ 1.8	内面：3条の波状文	密	良好	オリーブ灰色	
8	8	青磁 盤	※20.5	—	△ 3.6	内面：丸ノミによる4条1単位の蓮弁文	密	良好	オリーブ灰色	
9	8	白磁 皿	※12.5	—	△ 2.0		密	良好	白褐色	森田E群
10	8	白磁 皿	※14.4	—	△ 1.8		密	良好	灰白色	
11	8	青花 皿	※10.9	—	△ 1.5	外面：一重圏線、牡丹唐草 内面：一重圏線	密	良好	青白色	小野B1群
12	8	青花 皿	※13.2	—	△ 2.2	外面：一重圏線、牡丹唐草 内面：一重圏線	密	良好	明青灰色	小野B1群
13	8	褐釉陶器 筒形鉢	—	—	△ 2.7	外面：横位の突帯 内面：露胎	密	良好	灰褐色	中国南方系か
14	8	粉青沙器 皿	※11.5	—	△ 2.1		密	良好	にぶい黄橙色	朝鮮半島産
15	8	陶器 壺	※ 9.4	—	△ 2.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	暗赤褐色	備前焼 中世6a期
16	8	陶器 壺	—	—	△ 3.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、指押さえ	密	良	茶色	備前焼
17	8	陶器 壺	—	※17.8	△10.0	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：回転ナデ	密	良	茶色	備前焼
18	8	陶器 壺	—	※17.8	△ 3.3	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：回転ナデ	密	良	茶色	備前焼
19	8	陶器 壺	—	※13.4	△ 5.1	外面：体部回転ナデ後縦方向のハケメ 底部ヘラ起こし後ナデ、下駄痕 内面：ナデ	密	良好	にぶい橙色	備前焼
20	9	陶器 甕	※43.8	—	△ 5.7	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	赤褐色	備前焼 中世5b期
21	9	陶器 播鉢	※32.8	—	△ 5.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	暗赤褐色	備前焼 中世5b～6a期
22	9	陶器 皿	※11.7	—	△ 1.9		密	良好	灰褐色	唐津焼
23	9	陶器 皿	※11.0	※ 4.3	3.0	内面：見込み胎土目	密	良好	灰黄褐色	唐津焼
24	9	陶器 壺	※10.5	—	△ 1.8	外面：自然釉が剥落 内面：自然釉	密	良好	オリーブ灰色	瓷器系
25	9	土師質土器 皿	※12.0	—	△ 2.0	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰白色	京都系
26	9	土師質土器 皿	7.2	1.3	3.8	外面：口縁部～体部回転ナデ後ナデ、底部 回転糸切り 内面：体部回転ナデ後ナデ、底部ナデ	密	やや良	黄橙色	口唇部煤付着

27	9	土師質土器 皿	—	4.0	△ 1.3	外面：体部ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	橙色	
28	9	土師質土器 皿	—	4.0	△ 1.5	外面：体部ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	橙色	
29	9	土師質土器 皿	—	※ 5.3	△ 1.6	外面：体部ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	橙色	
30	9	土師質土器 皿	—	※ 6.2	△ 1.4	外面：体部ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良好	橙色	
31	9	土師質土器 火鉢	※24.3	—	△ 6.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	にぶい黄橙色	丸形
32	9	土師質土器 火鉢	—	—	△ 5.0	外面：ヨコナデ、2条の突帯 内面：ナデ、指押さえ	密	良好	灰褐色	31と同一個体か
33	9	土師質土器 火鉢	—	—	△ 2.2	外面：ナデ、雷文のスタンプ文 内面：ナデ	密	良好	橙褐色	
34	9	瓦質土器 火鉢	—	—	△ 4.8	外面：ナデ、渦巻状のスタンプ文、1条の 突帯の貼付痕 内面：ナデ	密	良好	茶灰色	丸形
35	9	土製品 土人形	残存幅	残存高	外面：型作り 内面：ナデ、指押さえ	密	良好	灰褐色	右足部分	
			5.8	3.3						

第7表 郭1出土石製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			重量 (g)	石 材	備 考
			残存長	残存幅	残存厚			
36	9	茶臼	5.3	6.5	2.5	103.9	安山岩	下臼、被熱

第8表 郭1出土金属製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			重量 (g)	材 質	備 考
			残存長	幅	厚さ			
37	9	小札	2.4	3.2	0.1	4.7	鉄	

第9表 土坑1出土陶器観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備 考
			口径	底径	器高					
38	11	陶器 壺	—	※20.0	△33.6	外面：体部回転ナデ、ハケメ 内面：回転ナデ	密	良	灰色	備前焼 胴部穿孔、工具痕跡

第10表 土坑2出土陶磁器・土器観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備 考
			口径	底径	器高					
39	13	青花 皿	※11.7	—	△2.0	外面：一重圏線、牡丹唐草 内面：二重圏線	密	良好	白色	小野B1群
40	13	黒釉陶器 壺	—	—	△3.2	外面：全面施釉 内面：露胎、須恵質	密	良好	黒色	中国南方系か
41	13	陶器 壺	—	※9.6	△8.6	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密	良好	黒色	備前焼
42	13	須恵器 提瓶	残存長	残存幅	厚さ	外面：カキメ、把手の貼付痕 内面：回転ナデ	密	良	青灰色	
			2.7	5.0	0.9					

第11表 集石遺構出土陶器観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
43	15	陶器 壺	※13.8	—	△ 9.6	外面：回転ナデ、耳貼付 内面：回転ナデ	密	良	黒灰色	備前焼 中世5b期
44	15	陶器 水屋甕	※18.4	—	△ 9.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	赤褐色	備前焼 中世6a期
45	15	陶器 建水	※14.0	※11.6	12.5	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：回転ナデ	密	良	黒茶色	備前焼
46	15	陶器 壺	—	—	△12.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰褐色	瓷器系
47	15	陶器 壺	—	※21.2	△12.0	外面：体部ナデ、ハケメ、底部ナデ 内面：体部ナデ、ハケメ、底部回転ナデ	密	良好	灰褐色	瓷器系
48	15	陶器 壺	—	※16.3	△ 2.9	外面：体部回転ナデ、ハケメ、底部ナデ 内面：ナデ	密	良好	暗赤灰色	瓷器系

第12表 柱穴列1 (P27) 出土陶器観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
49	17	陶器 壺	※14.2	—	△ 5.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	暗赤褐色	備前焼 中世6a期
50	17	陶器 壺	—	—	△11.9	外面：回転ナデ、沈線文、波状文 内面：回転ナデ	密	良好	暗赤褐色	備前焼
51	17	陶器 壺	—	※16.6	△12.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	赤褐色	備前焼

第13表 柱穴列2 (P15) 出土陶磁器観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
52	18	青磁 盤	※18.6	※ 7.3	△10.0	外面：高台内砂付着	密	良好	オリーブ灰色	
53	18	陶器 瓶	—	※10.6	△ 3.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	灰赤色	朝鮮半島産
54	18	陶器 瓶	—	※15.2	△ 4.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	赤灰色	朝鮮半島産

第14表 柱穴列3 (P36) 出土磁器観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
55	19	青磁 碗	—	—	△2.7	外面：無文 内面：無文	密	良好	暗オリーブ色	上田E類

第15表 陶器・瓦溜り出土陶器・瓦観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
56	22	陶器 壺	※11.6	—	△ 8.2	外面：回転ナデ、沈線文、耳貼付 内面：回転ナデ	密	良	暗赤褐色	備前焼 中世6a期
57	22	陶器 甕	※37.6	—	△16.2	外面：回転ナデ、沈線文、波状文、自然釉 内面：回転ナデ	密	良好	暗赤褐色	備前焼 中世5b期
58	22	陶器 甕	—	※30.4	△ 8.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	暗赤褐色	備前焼
59	22	軒棧瓦	残存長	残存幅	厚さ	凹面：ナデ 凸面：ナデ	密	良	灰白色	
			5.5	10.6	2.0					

第16表 柵列1 (P4) 出土石製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			重量 (g)	石 材	備 考
			残存長	幅	厚さ			
80	26	砥石	7.9	5.7	3.3	207.1	細粒花崗岩	仕上砥、左側面刃物痕あり 表裏面及び左右両側面の4面を使用

第17表 腰郭2造成土出土陶器・土器観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
60	30	土師器 甕	※14.4	—	△ 3.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	橙色	口縁部外面 煤付着
61	30	土師器 低脚坏	—	3.3	△ 2.2	外面：坏部ハケ目後ナデ、脚部ヨコナデ 内面：坏部ミガキ、脚部ヨコナデ	密	良	黄橙色	
62	30	土師器 低脚坏	—	※ 3.6	△ 3.4	外面：ナデ 内面：ナデ	密	やや良	橙褐色	
63	30	土師器 器台	※18.4	—	△ 4.8	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良好	浅黄褐色	
64	30	土師器 器台	—	※17.4	△ 5.4	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ	密	良	黄灰白色	
65	30	土師質土器 坏身	※ 7.0	4.0	2.0	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部摩滅のため調整不明 内面：ナデ	密	良好	浅黄橙色	
66	30	土師質土器 坏身	※13.8	7.4	3.5	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	やや良	黄橙色	
67	30	土師質土器 坏身	—	※ 6.3	△ 2.6	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ、指押さえ	密	良好	橙色	
68	30	土師質土器 坏身	—	※ 6.6	△ 2.7	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良好	浅黄橙色	
69	30	土師質土器 坏身	—	6.8	△ 3.2	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	やや良	黄橙色	
70	30	土師質土器 坏身	—	※ 7.1	△ 3.0	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	橙褐色	
71	30	土師質土器 坏身	—	※ 7.7	△ 2.6	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良好	橙色	
72	30	土師質土器 坏身	—	※ 7.8	△ 2.6	外面：体部回転ナデ、底部摩滅のため調整不明 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	橙色	
73	30	土師質土器 皿	※11.8	—	△ 2.0	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰茶色	京都系 内面煤付着
74	30	土師質土器 播鉢	—	—	△ 5.6	外面：ナデ、指押さえ 内面：6条1単位の播目	密	良好	灰褐色	

75	30	土師質土器 火鉢	—	※30.0	△ 3.1	外面：ナデ、1条の突帯 内面：剥離のため調整不明	密	良好	浅黄褐色	
76	30	須恵器 坏身	—	※11.4	△ 1.7	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密	良	灰色	
77	30	須恵器 壺	※15.8	—	△ 4.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	灰褐色	
78	30	天目茶碗	—	3.8	△ 1.2	外面：底部ケズリ 内面：施釉	密	良好	黒色	中国産
79	30	陶器 播鉢	—	—	△ 6.0	外面：ヨコナデ 内面：4条1単位の播目	密	良好	明赤褐色	備前焼

第18表 腰郭2出土陶器観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
			口径	底径	器高					
81	31	陶器 徳利	※7.1	—	△2.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	黒褐色	朝鮮半島産

第19表 腰郭2出土金属製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
82	31	小札	3.5	4.1	0.1	10.0	鉄	

第20表 遺構外出土の古代以前土器観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高					
83	32	T7	土師器 甕	※15.2	—	△4.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	黄灰白色	
84	32	T10	土師器 甕	※12.8	—	△4.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	浅黄橙色	
85	32	T7	土師器 高坏	—	—	△2.9	外面：ナデ 内面：摩滅のため調整不明	密	やや良	黄灰白色	
86	32	B2 表採	土師器 高坏	—	—	△3.4	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	にぶい 黄橙色	
87	32	表採	移動式竈	残存長 9.0	残存幅 11.3	残存高 1.9	外面：指押さえ 内面：指押さえ	密	良	灰黄褐色	
88	32	工事中発見	須恵器 坏蓋	※13.3	—	4.0	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	灰色	
89	32	工事中発見	須恵器 坏蓋	12.7	—	3.8	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	灰色	
90	32	工事中発見	須恵器 坏蓋	12.7	—	4.0	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	灰色	
91	32	工事中発見	須恵器 坏蓋	12.3	—	3.9	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	青灰色	
92	32	工事中 発見	須恵器 横瓶	—	—	△9.1	外面：平行叩き、カキメ 内面：同心円の当て具痕	密	良	灰色	
93	32	A1 表土	須恵器 坏身	※10.6	—	△2.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	青灰色	
94	32	D2 表土	須恵器 坏身	—	※ 6.0	△1.3	外面：ヘラ起こし後ケズリ 内面：回転ナデ	密	良	青灰色	外面煤付着
95	32	A4 表土	須恵器 甕	—	—	△4.9	外面：平行叩き 内面：同心円の当て具痕	密	良	灰色	
96	32	T9	須恵器 甕	—	—	△4.3	外面：平行叩き 内面：同心円の当て具痕	密	良好	淡灰色	

第21表 遺構外出土の古代以前石器観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種別	法量 (cm)			重量 (g)	石 材	備 考
				残存長	最大幅	最大厚			
97	32	T10	石鋏	5.2	7.2	1.6	92.7	安山岩	

第22表 遺構外出土の中世陶磁器・土器観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種 別 器 種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
				器種	口径	底径					
98	33	D4 表土	青磁 碗	※12.6	—	▽ 2.5		密	良好	灰オリーブ色	上田D類
99	33	D5 表土	青磁 碗	※13.2	—	△ 3.4		密	良好	オリーブ灰色	上田E類
100	33	E3 表土	青磁 盤	—	—	△ 1.7	外面：唐草文 内面：唐草文	密	良好	オリーブ灰色	
101	33	D4 表土	青磁 香炉	※ 8.0	—	△ 2.4	外面：施釉 内面：口縁部施釉、体部露胎	密	良好	緑灰色	
102	33	D4 表土	白磁 皿	※ 7.6	—	▽ 2.0		密	良好	白色	森田D群
103	33	T10	青花 碗	—	※ 5.3	△ 1.7	外面：唐草文、四重圏線 内面：不明	密	良好	白褐色	小野C群
104	33	E3 表土	青花 皿	—	※ 5.4	△ 2.1	外面：牡丹唐草文、二重圏線 内面：二重圏線	密	良好	白色	小野B1群
105	33	T11	青花 皿	—	※ 6.0	△ 1.0	内面：唐草文	密	良好	白色	
106	33	D3 表土	青花 小坏	—	※ 3.7	△ 1.1	外面：放射状の線彫り 内面：環状に釉薬を剥ぎ取る、砂付着	密	良好	白色	
107	33	D2 表土	青花 鉢か	※12.8	—	△ 1.9	外面：三重圏線、円形浮文	密	良好	灰白色	
108	33	E3 表土	陶器 茶入か	—	3.2	△ 0.9	外面：体部回転ナデ、施釉、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密	良好	灰黄褐色	中国産か
109	33	T12	陶器 瓶	—	—	△ 4.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	茶灰色	朝鮮半島産
110	33	T9	陶器 瓶	—	—	△ 3.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	暗赤褐色	朝鮮半島産
111	33	T9	陶器 瓶	—	※11.4	△ 5.9	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	良好	暗灰色	朝鮮半島産
112	33	T9	陶器 瓶	—	※ 6.1	△ 3.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	暗赤褐色	朝鮮半島産
113	33	D3 表土	陶器 壺	※11.6	—	△ 4.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	暗赤褐色	備前焼 中世6a期
114	33	T9	陶器 壺	※11.2	—	△ 7.6	外面：ナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	赤褐色	備前焼 中世5b期
115	33	表採	陶器 壺	※14.0	—	△ 5.7	外面：回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、胴部ヨコナデ	密	良好	青灰色	備前焼
116	33	D1 表土	陶器 壺	—	※20.0	△ 4.8	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良好	赤灰色	備前焼
117	33	B1 2層	陶器 甕	※26.5	—	△ 5.4	外面：回転ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良好	暗赤灰色	備前焼 中世6a期
118	33	D2 表土	陶器 甕	—	※35.8	△15.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	黒褐色	備前焼
119	34	D2 表土	陶器 甕	—	※35.6	△ 5.6	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	暗青灰色	備前焼
120	34	T8	陶器 播鉢	※28.0	—	△ 6.4	外面：回転ナデ 内面：5条1単位の播目	密	良好	褐灰色	備前焼 中世6a期

121	34	E3 表土	陶器 播鉢	—	—	△ 3.4	外面：ナデ 内面：播目	密	良好	赤褐色	備前焼
122	34	D1 表土	陶器 播鉢	—	※13.5	△ 3.2	外面：ナデ 内面：播目	密	良好	暗褐色	備前焼
123	34	D3 表土	陶器 皿	※ 9.8	※ 5.0	2.0	外面：底部露胎、高台内環状の砂目 内面：丸ノミによる菊花状の削ぎ	密	良好	灰オリーブ色	瀬戸・美濃焼 折縁菊皿
124	34	D1 表土	陶器 茶壺	※14.7	—	△ 3.6	内面：ケズリ	密	良好	灰オリーブ色	信楽焼か
125	34	D3 表土	陶器 播鉢	※24.7	—	△ 6.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	灰褐色	越前焼
126	34	D2 表土	陶器 播鉢	※34.8	—	△ 4.6	内面：10条1単位の播目	密	良好	灰褐色	越前焼
127	34	-A4 表採	土師質土器 坏身	—	※ 8.0	△ 3.5	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良好	橙色	
128	34	D4 表土	土師質土器 皿	※ 7.6	4.0	1.5	外面：口縁部～体部回転ナデ後ナデ、底 部回転糸切り 内面：口縁部～体部回転ナデ後ナデ、底 部ナデ	密	良	黄橙色	
129	34	T10	土師質土器 皿	※ 7.2	3.8	2.4	外面：口縁部～体部回転ナデ後ナデ、底 部静止糸切り 内面：口縁部～体部回転ナデ後ナデ、底 部ナデ、指押さえ	密	良好	黄橙色	
130	34	T7	土師質土器 皿	※ 7.2	3.8	1.7	外面：口縁部～体部回転ナデ後ナデ、底 部静止糸切り 内面：口縁部～体部回転ナデ後ナデ、底 部ナデ	密	良好	黄橙色	
131	34	T7	土師質土器 皿	—	3.8	△ 1.2	外面：体部回転ナデ後ナデ、底部静止糸 切り 内面：体部回転ナデ後ナデ、底部ナデ	密	良	黄橙色	
132	34	T12	土師質土器 皿	—	※ 5.4	△ 1.1	外面：体部回転ナデ後ナデ 内面：体部回転ナデ後ナデ、底部ナデ	密	やや良	黄橙色	内面タール付着
133	34	D1 表土	土師質土器 風炉	※17.6	—	△ 4.7	外面：口縁部ハケメ後ナデ 肩部三角形のスタンプ文 内面：口縁部ハケメ後ナデ、肩部ハケメ 後指押さえ	密	良	浅黄橙色	
134	34	D1 2層	土師質土器 火鉢	—	—	△ 3.8	外面：渦巻状のスタンプ文	密	良好	橙褐色	

第23表 遺構外出土の中世石製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種別	法量 (cm)			重量 (g)	石 材	備 考
				受け皿径	底径	高さ			
135	35	D1 表土	茶臼	※36.8	※31.0	△9.3	3,050.0	安山岩	下臼

第24表 遺構外出土の近世以降陶磁器・土製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
				口径	底径	器高					
136	36	D3 表土	磁器 碗	※11.3	4.1	5.4	外面：牡丹花文	密	良好	白色	新製焼
137	36	E2 表土	磁器 皿	※22.8	※12.7	3.9	外面：貫入、底部針支え 内面：見込み松竹梅、体部氷裂、梅花、貫入	密	良好	灰白色	伊万里焼 口縁部口錆
138	36	D3 表土	磁器 御神酒德利	—	2.0	△ 7.1	外面：五彩の植物文 内面：露胎	密	良好	灰白色	産地不明
139	36	D3 表土	磁器 御神酒德利	—	—	△ 9.0	外面：蜻唐草文 内面：露胎	密	良好	灰白色	伊万里焼
140	36	D3 表土	磁器 御神酒德利	—	※ 4.7	△ 2.5	外面：圈線 内面：露胎	密	良好	白色	伊万里焼
141	36	D4 表土	磁器 御神酒德利	—	3.6	△ 4.0	内面：露胎	密	良好	白色	伊万里焼
142	36	E5 表土	磁器 仏飯器	5.8	5.4	3.2	外面：南無妙法蓮華経、花文、丸文	密	良好	灰白色	産地不明
143	36	D5 表土	陶胎染付 碗	—	※ 5.0	△ 4.2		密	良好	淡灰色	肥前産
144	36	E4 表土	陶器 灯明皿	※ 8.5	※ 5.0	2.0	外面：口縁部施釉、体部露胎、回転ナデ 底部露胎、回転糸切り 内面：施釉	密	良好	褐灰色	在地産
145	36	E4 表土	陶器 灯明皿	※ 9.0	※ 4.0	2.0	外面：口縁部施釉、体部露胎、回転ナデ 底部露胎、回転糸切り 内面：施釉	密	良好	赤褐色	在地産 外面タール付着
146	36	E2 表土	陶器 灯明皿	※ 8.8	※ 3.1	2.3	外面：口縁部施釉、体部～底部露胎、回転ナデ 内面：施釉	密	良	灰白色	在地産
147	36	D4 表土	陶器 灯明皿	7.7	2.8	1.6	外面：露胎、回転ナデ 内面：施釉、見込み焼台痕	密	良好	淡赤橙色	在地産 外面煤付着
148	36	D1 表土	陶器 灯明皿	7.8	3.0	1.5	外面：露胎、回転ナデ 内面：施釉、見込み焼台痕	密	良好	橙色	在地産 外面煤付着
149	36	-A1 表土	陶器 灯明皿	※ 9.0	※ 4.4	2.1	外面：口縁部施釉、体部露胎、回転ナデ 底部露胎、回転糸切り 内面：施釉、見込み環状の砂目	密	良好	にぶい橙色	在地産
150	36	D3 表土	陶器 灯明皿	※ 9.4	3.5	1.8	外面：口縁部施釉、体部露胎、回転ナデ 底部露胎、回転糸切り 内面：施釉、見込み環状の砂目	密	良好	褐灰色	在地産 外面煤付着
151	36	A1 表土	陶器 灯明皿	※ 6.5	—	△ 3.0	外面：口縁部施釉、体部露胎、回転ナデ 内面：施釉	密	良好	暗赤灰色	在地産 口縁部煤付着
152	36	A1 表土	陶器 灯明皿	—	—	△ 2.4	外面：体部上半施釉、体部下半露胎、回転ナデ 内面：施釉	密	良好	暗赤灰色	在地産 受部煤付着
153	36	D5 表土	陶器 灯明具	※ 4.1	4.8	5.4	外面：底部露胎、ケズリ 内面：体部上半施釉、体部下半露胎	密	良好	灰白色	在地産 底部内面煤付着
154	37	E3 表土	陶器 播鉢	※32.0	—	△10.2	外面：回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、体部11条1単位の播目	密	良好	暗赤褐色	在地産
155	37	D3 表土	陶器 播鉢	※29.7	—	※15.4	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部ケズリ 内面：口縁部回転ナデ、体部21条1単位の播目	密	良好	暗赤褐色	在地産
156	37	D4 表土	陶器 播鉢	※28.8	※ 9.7	13.7	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部ケズリ 内面：口縁部回転ナデ、体部23条1単位の播目	密	良好	暗赤褐色	在地産
157	37	D2 表土	陶器 火入れ	※13.5	—	△ 5.0	外面：回転ナデ、施釉、貫入 内面：露胎、回転ナデ	密	良好	灰茶色	在地産
158	37	D2 表土	陶器 火入れ	※13.5	—	△ 5.0	外面：回転ナデ、施釉、貫入 内面：露胎、回転ナデ	密	良好	灰茶色	在地産
159	37	D2 表土	陶器 火入れ	—	14.4	△ 2.4	外面：施釉、底部蛇の目凹形高台 内面：露胎、回転ナデ	密	良好	淡灰色	在地産
160	37	D3 表土	土製品	残存幅	—	△ 3.5	外面：型作り、2条の沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良好	灰白色	
				2.3							
161	37	D2 表土	土製品	残存幅	—	△ 4.3	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良好	灰白色	
				3.1							
162	37	D2 表土	土製品	残存長	幅	厚さ	外面：型作り	密	良好	暗褐色	
				4.3							

第25表 遺構外出土の近世以降瓦観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				残存長	残存幅	厚さ					
163	38	D2 表土	軒棧瓦	21.8	16.1	1.8	凹面：ナデ 凸面：ナデ	密	良好	黄褐色	
164	38	-A4 表採	軒棧瓦	13.0	17.6	1.2	凹面：ナデ 凸面：ナデ	密	良好	黒灰色	
165	38	D3 表土	軒棧瓦	5.6	10.9	1.7	凹面：ナデ、瓦当部外縁上端面取り 凸面：ナデ	密	良好	黒灰色	
166	38	D3 表土	軒棧瓦	3.5	12.2	1.9	凹面：ナデ、瓦当部外縁上端面取り 凸面：ナデ	密	良好	黒褐色	
167	38	D3 表土	軒棧瓦	10.0	13.4	1.8	凹面：ナデ、黒色釉 凸面：ナデ	密	良好	茶褐色	

第26表 遺構外出土の近世以降金属製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種別	法量 (cm)			重量(g)	材質	備考
				長さ	幅	厚さ			
168	38	D3 表土	煙管 雁首	3.6	0.9	0.9	3.6	銅	
169	38	D1 表土	銭貨 寛永通寶	2.4	2.4	0.1	2.5	銅	
170	38	D2 表土	銭貨 寛永通寶	2.8	2.8	0.1	2.5	銅	
171	38	D1 表採	銭貨 寛永通寶	2.4	2.4	0.1	2.2	銅	
172	38	D5 表土	銭貨 寛永通寶	2.6	2.6	0.1	2.6	銅	文銭

写真図版



石井要害跡 本丸（西から） 昭和44年撮影

米子市立山陰歴史館所蔵



石井要害跡 本丸（西から） 昭和44年撮影

米子市立山陰歴史館所蔵

図版2



住宅造成工事中の状況（北から）



住宅造成工事中の状況（南から）



住宅造成工事完成後の状況（北西から）



調査地遠景（東から）



調査地の頂部から東を望む



調査地の頂部から南東の橋本七尾城跡を望む



調査地の頂部から西の新山要害跡を望む



南東側斜面 調査前状況（東から）



南西側斜面 調査前状況（南西から）



頂部平坦面 調査前状況（南西から）



南西側斜面腰郭 調査前状況（北西から）



調査位置全景（上が南東）



調査地全景（上が南東）



調査地全景（南東から）



調査地全景（南西から）



頂部平坦面 第2遺構面全景（上が南東）



T7土層断面（南から）



T9土層断面（北から）



T11土層断面（北東から）



T12土層断面（南から）



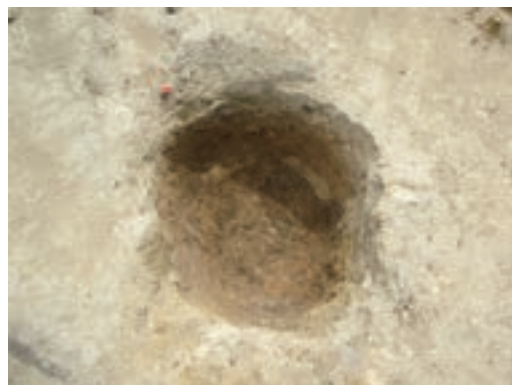
T8 腰郭3検出状況（南西から）



土坑1、3（北東から）



土坑2（南西から）



集石遺構内遺物出土状況推移（北東から）



柱穴列1 (P27) 遺物出土状況



頂部平坦面 D2・3、E2・3グリッド 第1遺構面全景 (北東から)



頂部平坦面 D4・5、E4・5グリッド 第1遺構面全景（北東から）



陶器・瓦溜り遺物出土状況（東から）



腰郭1（上が南西）



T3拡張区 腰郭1（東から）



T2 腰郭1 (南西から)



T2 腰郭1 (北東から)



T6 腰郭1 (南西から)



T6 腰郭1 (北東から)



T2 腰郭1 排水用溝（北西から）



T1拡張区 腰郭1 全景（北東から）



土手状遺構（北東から）



土手状遺構（南西から）



土手状遺構 方形穴（北東から）



溝状遺構（北東から）



柵列 1 (南東から)



T2 空堀 1 (北西から)



T6 空堀 1 (北西から)



T3拡張区 空堀 1 (北西から)



障壁設置遺構 1～3 (北から)



障壁設置遺構 1 (北から)



障壁設置遺構 2 (北から)



障壁設置遺構 3 (北から)



腰郭2 (北東から)



T1 腰郭2土層断面 (西から)



T2 腰郭2土層断面（北西から）



T6 腰郭2土層断面（南東から）



T3拡張区 腰郭2土層断面（東から）



南西側斜面上部切岸（南西から）



南西側斜面下部切岸（南西から）



郭1 出土遺物

(S=1 : 2)



土坑2、柱穴列2、柱穴列3 出土遺物

(S=1 : 2)



43



45



44

集石遺構出土遺物

(S= 1 : 3)



49



56



50

柱穴列1 (P27) 出土遺物

(S= 1 : 3)



57

陶器・瓦溜り出土遺物 (S= 1 : 3)



腰郭2造成土、腰郭2出土遺物

(S=1:2)



郭1、腰郭2出土鉄製品

(S=1:1)



88



90



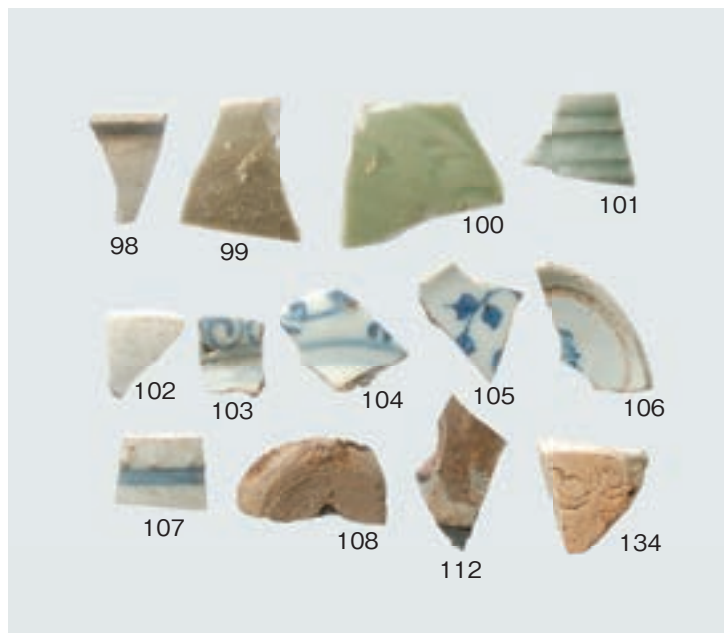
89



91

工事中出土遺物

(S=1:2)



遺構外出土の中世遺物 (1)

(S=1:2)



遺構外出土の中世遺物 (2)

(S=1:2)

報告書抄録

ふりがな	いししようがいあといち							
書名	石井要害跡 I							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	16							
編著者名	高橋浩樹 佐伯純也							
編集機関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-26-0455 eメールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp							
発行年月日	西暦2019年3月27日 平成31年3月27日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石井要害跡	鳥取県 米子市 石井	31202	米子市 156	35度 24分 17秒	133度 20分 50秒	2018年 3月2日) 2018年 7月11日	1,300m ²	急傾斜地 対策工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
石井要害跡	城館	中世	郭、腰郭、土坑、集石遺構、陶器・瓦溜り、空堀、土手状遺構、障壁設置遺構、柱穴列、柵列、溝状遺構		土師器、須恵器、青磁、白磁、青花、中国産陶器、朝鮮産陶器、国産陶磁器（越前、信楽、備前、瀬戸・美濃、唐津、伊万里）、土師質土器、石製品、金属製品			
要 約								
<p>石井要害跡は、米子市西部に位置し、加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地する。</p> <p>今回の調査は、出丸と称される丘陵の頂部平坦面の南東側と南西側斜面の調査を実施した。</p> <p>調査の結果、帰属時期は特定できなかったが、古い時期には頂部の南西側と南西側斜面の中腹で腰郭を検出し、頂部平坦面調査区の中央付近に設定したトレンチでは地山をほぼ垂直に2m以上掘り込んだ切岸を検出した。南西側斜面中腹の腰郭1は、平坦面に空堀が巡り、東側には障壁設置遺構が3ヶ所あり、北西側には土手状遺構があり、その両側の防御を固めている。</p> <p>16世紀前半から16世紀中頃になると、頂部と南西側斜面中腹では、これらの古い腰郭を大規模に埋め立てて造成し、郭を拡張している。造成土は非常に硬く締まっており、版築状を呈する。</p> <p>頂部平坦面の拡張した郭では、土坑3基、集石遺構1基、ピット30基を検出したが、南西側斜面中腹の腰郭2では遺構は確認できなかった。</p> <p>16世紀後半は遺物が出土していないことから、城主が不在あるいは廃城となったと考えられ、その後、16世紀末から17世紀初頭にかけては、量的には少ないが遺物が出土している。</p>								

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書16

鳥取県米子市
石井要害跡 I

2019年3月

編集・発行 一般財団法人 米子市文化財団

〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地

TEL 0859-26-0455

印刷 勝美印刷株式会社